

GOD EATER
Reincarnation

人ちゆら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※本作は『GOD EATER』と『真・女神転生III NOCTURNE マニアクス クロニクル・エディション』のクロスオーバー作品です。

『真・女神転生III』世界の未来を決定する主人公……なのに他作品の隠しボスとして「RPG史上最凶」の悪名を轟かせちゃったりもする自由人・人修羅が、アラガミに席卷されたゴッドイーター世界へと渡ってきてしまいます。しかもその世界、どうもゲーム原作の状態とは少し違っているようで……？

【注意点】

×バトル要素はかなり少なくなると思います。（少なくとも序盤は皆無です）

×元々ちよつとした思いつきで書き始めたものなので、大まかなプロットはあっても基本的に行き当たりばったりです。

【不定期更新】

作者体調不良につき、更新は極めて不定期になっています。

目次

序章

#000 ある日 | 1

第一章 荒野放浪編

#001 荒野 | 4

#002 喰らう | 9

#003 回想 | 12

#004 放浪 | 15

#005 遭遇 | 20

#006 模索 | 25

#007 第一神喰 | 30

#008 荒神と神喰 | 36

#009 西暦2068年 | 42

第二章 新生ゴッドイーター編

#010 奇妙な死体 | 50

#011 アナグラ | 57

#012 検疫室 | 63

#013 疑惑 | 68

#014 シックザール | 74

#015 筆記試験 | 80

#016 能力試験 | 87

#017 適合試験 | 96

#018 ペイラー・榊 | 102

#019 紅い腕輪 | 110

119 #020 閑話：シンの三日間

#021	クソツタレな職場	126	#033	神機覚醒	213
#022	楠リツカ	130	#034	三つの選択肢	223
#023	パートナー？	136	#035	アナライズ	231
#024	「あ——」	143	#036	アクマ？ アラガミ？	
#025	顛末	150	ゴッドイーター	238	
第三章 ビジョンクエスト編					
#026	生きた神機	156	#037	人というアラガミ	244
#027	白昼夢(1)	163	#038	アラガミ進化論	251
#028	白昼夢(2)	172	#039	最終捕喰説	259
#029	死闘	180	第四章 喰人転生編		
#030	ブギウギ	188	#040	エリック・デアIIフォーゲ	
#031	テキサス(?)	195	ルヴァイデ	267	
#032	第一変異	203	#041	こぼれ落ちるもの	275
			#042	そして扉は開き	283

#047	#046	#045	#044	#043
諦めが肝心	新型	二人目	選別される魂	幻想浸食
324	318	307	299	291

序章

#000 ある日

「シンよう。もうお前さんに全部片付けてもらうってわけにはいかんのかね」

荒野に散乱するアラガミの死骸がドロドロに溶け崩れ、地面に染み込むように霧散してゆく様を見て、思わずぼやく男が一人。くたびれた錆臙脂のコートのポケットから、ひどく大きな赤い腕輪をした右手でタバコを取り出し、啜えた。ライターを探してあちこちのポケットに手をつ突つ込むと、コートに付いた砂埃が舞い上がる。

「他人に未来のすべてを委ねるつもりなら、そうするといい。リンドウ」

シンと呼ばれた深紅のコートの男が、無表情にそう応えた。こちらも右手には、赤く大きすぎる腕輪をはめている。

その面差しは、異貌であった。

刺青いれずみだろうか、顔には両目のそれぞれを額から顎まで上下に貫くような太い縦筋が、そこから耳に向けて頬を伝う横筋が二本ずつ描かれている。それさえなければ顔立ちの整った東洋人に見えなくもないのだが。

「いや、まあ、そうなんだが。お前さんはあれだ、せめて神機じんきを使ってくれ」

啞えタバコの男——リンドウというらしい——も気まづげに言葉を濁すと、軽く咎めるように“常識”を口にする。

およその地上にあるすべての生命を喰らい尽くす、悪食の災厄・アラガミ。彼らを討伐するためには、人類科学の精髓たる神機が必要不可欠とされる。それがこの世界の常識である……はずだった。

シンは「すまん」とだけ応えようと、左手で自身の顔を覆った。

ふう、と大きく息を吐いて顔から手を離し、リンドウに向かい合う。顔に浮かぶ模様が薄れて消えた。

「リンドウ。シツクザールは多分、止まらない。ああいう目をした男を昔、見たことがある」

リンドウはライターを探すのをやめ、頭をボリボリと掻いてぼやく。

「そうかい。そいつあ困ったもんだ。それで、そいつはどうなったんだ？」

「死んだ」

「そうか」

これ以上ないシンプルな答えを、リンドウは投げやりに受け入れた。

啞えていたタバコを、無造作にポケットにしまい込む。どうにも気分ではなかった。

「リンドウ。お前は どうする。シックザールのコトワリを認めるのか？」

「それは……たぶん無理だろうな。俺にはあそこまでは割り切れない。他に選択肢はないのか？」

「それはお前たちが自分たちで見つけなければならぬ。俺が教えたら、それこそおしまいだ」

どうにもやりきれない。

その重苦しい空気を嫌って、二人は空を眺めた。

二人の眼差しのその先、天頂には赤く禍々しいカグツチの光……

第一章 荒野放浪編

#001 荒野

——随分と砂埃の酷いところに落とされたようだ。

あたりを見回せば、亀裂だらけのアスファルト道路やら、壊れた機械やらが点在している。遠くには屋根に大穴の空いた家屋、倒壊したビル群もある。元は農地だったのだろうが、廃棄されて随分と経つのだろう。露地が乾けばこうなってしまうのも仕方がない。

遠くで爆発音がする。

大気が強く震えると、続いて爆発音が二回。何気なく視線をやれば、出来損ないの花火のように何かが燃え上がり飛び散っている。あれだけの規模となると、飛行悪魔としてはよほどの大型だったのだろうか？ 自分の知る限りでは、まず蠅ベルゼブフの王を思い出すが、あれが爆散するとは寡聞にして聞かない。

まあ何にせよ距離はあるし、巻き添えを食うことはないだろう。

そうして再び静寂が訪れた。

間雑かんざつシンは、未だ生えてこない髭を探すように顎をしごきながら、ぼんやりと考える。ここではない世界で繰り広げた、生き残るための闘争。その全ての決着がついた時、金髪の少年は「新たなボルテクス界へ送ろう」と言った。それはシンの生き様をして彼を楽しませた、その対価であるらしい。

間雑シンは、まず人間として生を受けた。そして一つの世界の滅びに立ち会い、新たな世界に悪魔アクマとして生まれ変わった。

悪魔として生きた世界は、次なる世界を生み出すための、卵のようなものだったらしい。そこは無意識の象徴カタチ、悪魔と呼ばれるモノたちが、次なる世界に生き残るために互いを喰らい合う、殺伐とした闘争の世界であった。

飽くなき闘争の中、人の心を残していたシンは葛藤し、やがて人でも悪魔でもないもの——人修羅ひとしゆら——と呼ばれるに至り、一つの世界の命運を委ねられた。

……はずである。

どうもその辺りの記憶があやふやで、ハッキリと思い出すことができない。

——どうあつても上着は返さないつもりか。

衣類らしきものは相変わらずデニムパンツのみ。素肌を砂混じりの風になぶられ、シ
ンは一人、つまらないことを考えた。

* * *

望む対象の情報を容赦なく暴く宝重ほうちゆう「万里の遠眼鏡」を取り出し、この世界をじつと覗き込んでみれば、大地が反り返るようにどこまでも続き、この世界が球体の内側のよ
うに閉ざされているのが分かる。だがその傾斜はごくわずかにしか見て取れない。か
つての世界、東京受胎よりもずっとスケールの大きな受胎が行われたのだろう。全周三
六〇度、どちらを向いても同じように反り返った大地が天頂で結ばれている以上、ここ
が新たな世界の卵、揺籃ようらんたるボルテクス界であると考えて間違いないさそうだ。

空を見上げれば赤々と、太陽の代わりにあの忌々しいカグツチが輝いている。あそこ
にもあのハゲ頭が居座っているのだらうか。だとすればここでの自分の役割もまた、再
びこの鉄拳を数えきれないほど叩き込んでやることなのか。あのハゲ頭は石頭であつ
た。精神的にも、物理的にも。

大きな溜息を一つ。

できれば休みが欲しい。ここがボルテクス界であるならば、いずれ戦わなければなら

ないことは分かっている。その時は大いに暴れよう。そしてあのハゲ頭をバラバラのキューブに分解して創世を成す。今度こそコトワリを拓くのだ。そして今度こそヤクソクを……

ヤクソク……はて、それは誰と交わしたものだっただか。幼馴染のツンケンした少女か、あらゆる希望を手放してしまった友人か、オールバックの若ハゲか、あるいは最後まで悔いていた、あの――

……少なくとも若ハゲではない。そうであるはずがないのだ。数多のハゲは自分の敵であったのだから。

それにしても静かなものだ。前のボルテクス界ではそこら中に悪魔が跋扈していて、ちよつと歩けば因縁をつけられては命の取り合いになったものだが。

「おっ…」

それはシンがこの世界に来てから、初めて発した一声であった。

遠くに二足歩行の恐竜のような動物を発見する。むき出しの筋肉質な脚と腹。背中
はびつしりと獣毛で覆われている。そして頭部と大きな尾は生物にも金属にも見える、
鬼面のような殻……あれがこの世界の悪魔なのだろうか？ 万里の遠眼鏡で覗いてみ

ると「オウガテイル」という名が分かる。なるほど、鬼面オウガの頭部と、野太い尻尾テイルという

ことだろう。分かりやすくてよろしい。

だがいくら覗き込んでみても、その素性がさっぱり見えてこない。どの神話で、どの文明で、どのように生まれ語られてきたのか。そしてどのような力があるのか。それは悪魔ならば、どんなものでも持つているはずの生存証明。自分の知らない文明のもので、近現代の都市伝説であつても暴くはずなのだが。

それともこの全知の宝重も、こちらの世界ではそこまでの力が無いのかもしれない。あるいはまだ馴染んでいない、なんてこともあり得るか。なにしろボルテクス界の間を移動したことなど、これまで一度もなかったのだ。可能性はいくらでも考えられる。

仕方がない。まずは情報収集だ。

#002 喰らう

「よう、ブラザー兄弟」

シンは恐竜オウガテイルもどき——最初のイメージに比べて随分と小柄であったが——に、陽気な声をかける。前の世界でごくまれに、こうしてコミュニケーションをとってくる悪魔がいたことを思い出して、真似してみたのだった。確かこの後くるくと横回転してみせれば完璧だ。スダマを嫌いになれる悪魔はいないだろう。だがどうやって回ればよいのか、シンは思わず動きを止めてしまった。

もつとも、その悩みは全くの無駄でしかなかったのだが。

恐竜もどきはやたらといかめ厳しいその顔突き出し、シンに向かって大きく吠えたててみた。どうやら威嚇しているつもりらしい。ははは、愛あひい奴め。

もしやイカレたやつらダーク系悪魔なのだろうか？ 彼らと話すための愉快な能力は、生憎あのハゲ頭を殴るために封印してしまったのだ。ハゲ頭はいつまでも崇る。

仕方がないので、まずは落ち着かせることにした。こうしたとき、悪魔はまず力の差を分らせることが先決である。

飛びかかってくるオウガテイルを右にステップして避けると、シンはその側頭部を軽

くぶん殴つてみた。遠眼鏡越しに見たときも思ったが、なかなか硬そうだ。だからほんの少しだけ、力が入ってしまったのだろう。あるいは多少、高揚してハいたのネかもしれない。

岩石の割れ碎ける音と生肉をこねたような音がほぼ同時に聞こえたと思った時には、オウガテイルは10メートルばかり吹っ飛んでいった。

しまった。やり過ぎた。

* * *

間薙シンの肉体は、まぎれもなく悪魔のそれである。それはただ力が強いことや魔法が使えることに限つた話ではない。

たとえばボルテクス界における悪魔にとつて、食事は必須のものではない。ただ生きるだけであるなら、カグツチの無尽光を浴びてさえいれば、滅びることはない。

だがそれでもボルテクス界の悪魔たちは、互いを喰らい合つていた。何故か。それは彼ら悪魔たちの力が、あるものを喰らうことによつてより強くなるからである。その力の源をマガツヒという。

オウガテイルの割れ碎けた側頭部から、見みまご紛うことなきマガツヒの光が漏れ出して

た。その奥を覗き込めば、小さな球体が有る。そこから光がこぼれているようだった。マガツヒが固体化しているのか？

シンは首を傾げながら無造作に手を突っ込むと、その球体をむしり取って吸血——対象の生命力を奪い取る——能力で吸い込んでみた。するとそれまで電球のように辺りを遍く照らしていたマガツヒの光が、糸筋となって不自然にシンの口元へと集まり、瞬く間に吸い込まれて消えてしまう。

球体はひび割れ、あつという間に砂となって風に飛ばされていった。

見れば球体を抜き取られたオウガテイルもその活動を停止し、その体はゆつくりと溶け崩れて地面へと染みこんでいく。まるでマネカタのようではないか。アサクサの泥をこねて生み出された、あの哀れな人間もどきたち。そうか、オウガテイルが恐竜もどきだとすれば、ここは人間の代わりに恐竜たちが栄えた世界の成れの果てだったりするのだろうか？ もっとよく観察しておくべきであったかもしれない。

……また次の機会が良いだろうと考える。こいつらがかつての支配種だったなら、そこら中にいるはずだ。ならば機会はいくらでもある。あれだけ巨大なカグツチがあるのだ。この世界のマガツヒが枯渇するようなこともそうそうないだろう。

さて、どうするか。

自分が独白していることにも気付かず、シンは歩き始めた。

#003 回想

荒野のような郊外を歩きながら、間雑シンは思い返す。

あちらの世界では、どんな悪魔でも意思の疎通はできた。ダーク系悪魔^{わからず屋}たちは時に意味不明なうめき声やら分かりそうで分からない電波を送受信したりしていたが、まずほとんどの状況でちゃんと言葉になっていた。言葉にならないのはカグツチの光がひときわ強くなる一時だけのこと。

だが今はカグツチの輝きは強くない。少なくとも初めて見上げた時よりかは衰えている。カグツチの影響ではなさそうだ。

言語の問題なのだろうか？　とも考えたが、あちらの世界では言葉の壁は全く存在しなくなっていた。そもそもボルテクス界では過去の人類文明の影響が極めて小さくなっている。コトワリを拓く選ばれた人間たちを除けば、その影響は残された構造物――道路や橋、その他の建造物、あるいは街灯や信号機くらいしか無いのだ。新たな世界を産み落とすためには、それら遺物に価値など無いとばかりに。

この世界にもコトワリを拓く人間は残っているのだろうか？

ふたたび独りごちるシン。ふう、と溜息をつく。

一人で歩き回るだけでは埒が明かない。少し手伝ってもらおうとしよう。

——来い、ベルゼブブ。

仲魔の召喚。協力の契約を交わした悪魔——仲魔^{ナカマ}——であれば、シンは誰でも召喚することができる。シンの体表にある電子回路のような模様の上を、青緑の光が往来する。が、何も起こらない。

む？

これまで「召喚に失敗する」ということはありえなかった。かつては契約した仲魔が死亡していた場合、蘇生を行うまで召喚することはできなかったが、今のシンはルイ・サイファーから悪魔全書を受け取っている。生前の記録通りにマガツヒで依代を創る悪魔全書の召喚術ならば、その生死は問わなかったはずだ。

どういうことだ？

それぞれのボルテクス界は独立した世界とはいえ、同じアマラ宇宙に浮かぶもの。世界が違うからといって召喚門が開かないということは無い……と思っていたのだが、そういうわけでもないのかもしれない。シンはあまり魔術に詳しいわけではない。そのような知識は、すべて仲魔たちに任せて困ることがなかったから。

それにしても、会えないとなると、途端に寂しさを感じてしまうものである。もちろん元のボルテクス界に帰るなり、このボルテクス界が創世をなしてアマラ宇宙につながるなりすれば、再び会えるには違いないが。悪魔にとって、時間はあまり意味を持たないのだ。コトワリの戦いも、どれだけ長くても一万年はかからないだろう。であるなら焦る必要もない……シンにとって彼らとの絆は、時間によつて損なわれる類のものではなかった。

とはいえ一抹の不安がないではない。せめて話し相手が欲しいところだ。

話し相手といえ、やはりピクシーであろうか。旅の始まりから行動を共にし、何度も変異して妖魔の女王クイーンメイブに成り果てても、やがてそれすら超えた力を得てもなお、態度を変えずに慕つてくれた心優しい悪魔。せめて彼女を呼ぶことはできないか。

——来い、ピクシー。

だが応えるものは無い。

ふう、とため息を吐いて、シンは再び歩き始めようとする。

そういえば。シンはあることを思い出し、再び万里の遠眼鏡を覗き込む。

カグツチ塔はどこにあるのだろうか？

#004 放浪

眼前には、はるか遠くまで続く大地。

あまりに巨大な世界の卵は、シンをして途方に暮れさせるだけの広大さであった。時間は無限にあり、睡眠も食事も呼吸も必要のない、もはや疲労することすらない肉体だとしても、どこか人間の精神を残しているのが間雑シンという存在であった。

偵察のための召喚もできなかった。となれば、自分の身一つで行動するしかない。

ここは未だカグツチ塔すらないボルテクス界だ。それはこれから建てられるのであろう。ならばまずは、それを建てるだろう人間を、コトワリを拓ける強い意思ある人間を探し出すのだ。この広大な揺籃の卵の中から。

東京一帯だけですら、あれだけ方々に振り回されたというのに……!!

無敵の人修羅の心が折れそうになった瞬間であった。

なんでもいい、何か目標になりそうなものはないか。万里の遠眼鏡を覗きながら、ぐるり頭を巡らせると、遠くに巨大な城壁のようなものが見えた。泥中の蓮のような、割れた卵のような、ちぐはぐの継ぎ接ぎだらけのそれが、時折小さな火花を放っている。まるでマントラ軍に攻めこまれたときのニヒ口機構のようだなと、シンは懐かしい過去

を思い出す。

まずはそこを目指してみるとしよう。シンは三度、歩き始める。

この男の真価はなにかと問われれば、多くの仲魔たちが「どこまでも歩いてゆけること」と答えるだろう。

人修羅の歩みを止められるものは、彼自身の他にない。

* * *

……などと格好つけてみたが、その歩みはひどくゆっくりとしたものだった。

この大地は一見するとただ荒れ果てているだけにしか見えないが、そこかしこに戦いの痕がある。獣の爪ヘルファングで切り裂かれたような痕や、数多九九の針針を吹き付けたような痕、打ち捨てられた巨大ビルには球状メに剝キり抜ドかれた痕のようなものである。それら一つ一つをつぶさに観察しながら、シンはこの世界の悪魔たちの戦力を分析していく。

それらは魔法のような超常のものではなく、全てが自然科学で説明できそうな破壊痕だった。少なくともエレベーターメキドラオンの終幕シマの挨拶挨拶のような異常は見当たらない。どうにでもなりそうなレベルだと見当をつける。気を抜くわけにはいかないだろうが、警戒しすぎて手控えていても損するだけだろう。

そんなことを考えながら歩いていると、視界の端にきらめく水面が見えた。

どうやらクレーター跡に雨水か何かが溜まったのだろう。あるいは湧き水でもあったのか。

水棲悪魔たちがいれば喜んだらうか。たとえばあのイソラだ。彼らがここにいたらと考える。昔だったら符りじゃれ合まっていただけだろう。

シンは彼らに恨みがあるわけではない。むしろ大きな恩がある。なにしろ彼らがいなければ、かの赤の魔人に勝つことなどできなかつたに違いないのだ。シンは自らの中に残る、彼らのマガツヒに感謝する。どこからか空飛ぶエイの恨みがましい声が聞こえた気がしたが、気のせいに違いない。

彼らの巣窟たる大下水道を思う。そういえばあの愉快なマネカタ、ハジキの使い方はわかつたのだろうか。

そこは湖と言つていくくらいには広さのある水たまりであつた。クレーター跡の辺りに屈みこんで水面を覗き込み、シンは思いを馳せる。湖底は凸凹としている。爆発系魔法で絨毯爆撃でもしたのだろうか。さもなくば何らかの連打系体術か。お、この辺りは特別深くなっているな。このあたりに追い込んで集中砲火にでもしたのか。

特に意味などは無い。ただ湖面のきらめきや水の揺らぎに気が向いただけだ。

飽くなき闘争の世界を離れ、シンはこれが癒やしというやつかとほんやり眺める。そ

ういえば回復の泉の巫女は、こちらにもいるのだろうか……あの際どい装束で。いつも無傷のギリメカラが粉かけようと言いつては素気無く流され——

ドボン。

* * *

ぼんやり水面を眺めていたら、背後から軽く小突かれてクレーター湖に落とされてしまった。

ああ、翼を生やした赤子らが、螺旋を描いて空へと昇って……ただの気泡だった。

それにしても久しぶりの水浴びは心地よいものだった。汗が流れるでなし、筋肉疲労があるでなし、代謝をとうに辞めたはずの肉体がそう感じることは不思議だが、心の持ちようとはそういったものかもしれない。そういえば前の世界では水浴びをする機会などなかった気がする。氷結系魔法で凍らされたことなら、数えきれないほどあるのだが。ゆらゆらと湖面に昇る気泡を眺めながら、益体もないことばかり考える。

蛸壺のようにえぐれた湖底へと沈んでいくと、だいぶ薄暗くなってきた。奥はもしやダークゾーンなのかも。何度も壁にぶつかるのはゴメンだと、シンはようやく浮上することにした。

くぐもった雄叫びのようなものが聞こえる。誰かが陸で戦っているようだ。

#005 遭遇

「この辺りだと思っただが……」

フエンリル極東支部ゴツドイーター第一部隊隊員・雨宮リンドウは、到着するはずだった輸送機の航路をたどっていた。墜落直前の交信波を、運よく受信できていたためだ。

平原を進むリンドウ。この辺りにはグボロ・グボロが出現するという報告があつた。だがグボロ・グボロの高圧水砲に、輸送機を撃墜できるほどの射程はない。ハズレか？ ブシュ、とビール缶を開けた時のような音が聞こえる。缶ビール飲みてえなあと、自室の冷蔵庫と、それからもう一つ別の冷蔵庫を思い出すリンドウ。自室の方にはもう残っていないが、あいつの分はまだ有つたはず。よし、帰つたら上手いことねだろう、などと益体もないことを考える。文明崩壊前ならそこらの自販機にワンコインで買えた缶ビールも、今では月イチの配給品をやりくりしなければならぬ高級品なのだ。

ところでさっきの物音は何か。缶ビールであるわけがない。第一それならもつと手近なところでなければ聞こえやしない。無意識の願望が作り出した幻聴か？ それも違う。

答えは最初から分かっていた。これは圧搾空気砲の音。両肩にバズーカ砲のような砲身を備えた、ゴリラのような中型アラガミ・コンゴウ種の攻撃手段の一つだ。

「退屈つてのはいかんア」

下らないことをしている自覚はあるのか、頭をボリボリと乱暴に搔いてから神経を集
中する。どんなに小さな異音も決して聞き逃さない。それは彼が単独での作戦行動か
ら生存するために磨き上げた能力の一つだ。

遠くでバシヤンと水音がした。何かが落ちたか、飛び跳ねたか。グボロ・グボロだ
うか？ 続いて巨体が飛び跳ね、ドスンドスンと大地を揺らす音。これはコンゴウの
のだろう。

なんにせよリンドウには手頃なアラガミだった。二体同時でも手間取るようなこと
はない。だが輸送機の墜落現場は、ここからさほど離れてはいないと思う。もしも生存
者がいるなら、周辺のアラガミは減らしておいたほうが良いだろう。搜索にかかる時間
よりも、中型二匹を片付けるほうが早い。

よし、そうしよう。

* * *

だが、そこには湖を覗き込むコンゴウが一体いるだけだった。グボロ・グボロが湖へ逃げたのだろうか？

どちらにせよ、単騎でいる今が狙いどきだろう。さっさと片付けることにする。

フツと息を吐いて大地を蹴ると、リンドウは三段跳びの要領で、一步、二歩と飛びかかるようにコンゴウの背後に移動する。そして肩担ぎに構えた鉄塊のような神機を、勢いそのままにコンゴウの尾に振り下ろした。硬い表皮を深く切り裂いた一撃に、瞬間、真紅の光が弾ける。痛みに気付いたコンゴウが振り返るよりも早く、跳ね上がった尾に横薙ぎの一撃。振り向くコンゴウの背に遠ざかる尾を追うように、跳躍して三撃目。再び真紅の光を弾けさせたその斬撃は、コンゴウの房毛に覆われた尾の先端を切り落とし、大きな怒声を上げるコンゴウ。

巨猿コンゴウは体をこわばらせて憤りを露わにすると、飛び跳ねざまに体を大きくひねって振り返る。まるで新体操のようだ。

コンゴウは素早くリンドウに照準を合わせ、肩の砲塔から圧搾空気弾を射出する。強烈な空気砲は、しかし瓦礫の山を弾き飛ばしただけであった。

* * *

「よつと」

ガシヤンと金属のこすれ合う音を立てて、神機は再びリンドウの肩へと担がれた。

その大ぶりな様からは想像もできないほど、ゴッドイーターにとつて神機は軽いものだ。それは自分の血肉に、言うなればちよつと腕が伸びている程度の感覚にすぎない。もちろんよほど酷使すれば重く感じることはあるが、少なくともリンドウという男にとつて、それほどの敵と相まみえたことは数えるほどしかなかった。

ただ長いから歩くときに邪魔になるのが玉に瑕だよな、とひとりごちる。

——その後、コンゴウはあつけなく顔面をかち割られ、コアを抜き取られて崩壊した。

中型以上のアラガミは、コアが抜き取られた後も体組織の崩壊までそれなりの時間を要する。リンドウは一休みとばかりにコンゴウの遺骸に腰掛け、胸ポケットから取り出したタバコで一服していた。

コンゴウが何を見ていたのか、気になったからだ。

大きな池のような水たまりに目を向ける。きらめく水面に、ぼうつとするリンドウ。アナグラに居たのでは決して見られない光景だ。ビールの代金ならんもんかな、などと益体のないことを考える。あいつはこういうの、意外と好きなんじゃないかね。

ふと、きらめく水面に小さな異変を見つけた。気泡が弾けている。水中に揺れる影も見えた。サイゴードよりも小さい気がするが、アラガミだろうか。ちと気を抜きすぎたかもしれない。腰掛けていたコンゴウから降りると、捨てたタバコを踏み消した。

ゆつくりと浮上してくる影。急に飛びかかってくる可能性を考え、距離をとって物陰に隠れる。その際、ホールドトラップを仕掛けていくのを忘れずに。さて、どんな野郎だか。

だが次の瞬間、彼は唾然とすることとなる。水から上がってきた影は、人型のなりをしていたからだ。よっこいしょ。

0 0 6 模索

泳ぐ、という経験も随分と久しぶりだ。シンは生前、友人らと連れ立って市民プールで泳いだ記憶を思い出す。彼は一人で黙々と泳ぎまくるのが好きだった。あの日一緒に行った幼なじみの少女は、やたらとフリルのついた、観賞用水着を着けていた。泳ぎにくくはないかと尋ねたらひどく機嫌を損ねたものだった。

ぺたり。水をかき分け、ようやく水たまりの縁へと手をかける。そこを支点に、よっこいしょ、と身体を持ち上げる。濡れた身体が地面につくと、砂が張り付いてあまり気持ちの良いものではなかった。方針を変更して腕の力だけで跳び上がった。大きな水音を立てたが、まあ気にすることもあるまい。

結局なんだったんだ、いったい？

何故自分が泳ぐことになったのか。そういえば自分を突き落としたはずの犯人はどこにいるのだろうか。

辺りを見回すと、ようよう体組織の崩壊が始まっていた、カラフルで巨大なゴリラが目についた。あれかな？

だとするとあれをあんな有様にした奴がいるはずだ。軽く首を振って周囲に意識を

巡らせる。周辺把握の真似事に過ぎないが、彼にはそれで十分だった。

瓦礫の影に、なにかが潜んでいる。敵対的ではないが、警戒しているようではある。オウガテイルあたりにはそんな知能も無かったようだが、もつと知的な存在だろうか？
誰か居るのか？

* * *

(……人間!? まさか……)

リンドウは目の前の光景を、信じられずにいた。

アナグラの壁の外も外、この辺りには、もはや集落すら残ってはいないはずだ。この辺りに人間がいるとすれば、それは自分のようなゴッドイーターの他にはありえない。だが水中から現れた人影には、神機らしきものは見当たらなかつた。それどころかゴッドイーターの証である大きな腕輪すら見られない。

ならば彼は、ゴッドイーターではない。

ゴッドイーターではないが、しかし一見するとアラガミとも思えない。とはいえ人間とも言い切れない、それはなんとも判断に困る存在だった。体表面に見られる模様は、どこか鉄板のようなブレイド型神機を思わせる。

「誰か居るのか?」

その人型の生物は、頭部を巡らせて辺りを見回しているようだった。と思えば次の瞬間には言葉を発していた。ありえない。

リンドウは手元の神機を、それからベルトポーチの武装を確認する。スタングレネード、ホールドトラップ、回復錠・改、まだ十分な数が残っていた。

逃げられるかなと考える。意味のある言葉を発していたことから、知能は有ると考えたほうが良い。敵対的なニュアンスは感じられなかったが、それは擬態かもしれない。アラガミと考えるなら異常に細身の個体ということになるが、その分、素早そうでは有る。逃がしてくれるかどうかは分からない。だが擬態ではない可能性はどうだろうか。そもそも人間を餌にかけようとするようなアラガミがいるのか。彼らは非常に貪欲な捕食者ではあるが、意思らしきものといえは怒りくらいだ。それすらも実際には生存のための威嚇や、防衛本能に根ざした攻撃性に過ぎないだろう、というのがあの変人博士ベイラー!の見解だった。つまりアラガミに今のところ、人間に類する知能らしきものは確認されていない。あるいはこれが新発ファーストコンタクト見かもしれない。だがそんなことがありえるだろうか。紳博士モジヤモジヤメカネに確認をとりたい。だが今は特別任務中であるため、通信はできない。いや可能ではあるが、相手の知覚力が高ければマズいことになりかねない。情報が無い。勝てるのか。そもそも戦って良い相手なのかどうか。

アラガミとも外部集落サテライトの人間とも違う存在に、リンドウは対応を決められずにいた。考えれば考えるほどドツポにはまっていく。リンドウはそれらを振り払うように頭を振ると、前を向いてプランを立てる。

いくら下がつて距離を取ろう。その上で正面から極力友好的な態度で挨拶をする。少しでも動きがあったら先ほど仕掛けたホールドトラップへ誘導しながら建物の影に駆け込んでやり過ごす。その後は隙を見て長距離移動用のジープまで走って、一気に離脱しよう。

覚悟は決まった。

* * *

その頃、シンは興味深いものを見つけていた。

白く細長い紙と、茶色い木くずのようなもの。

それはタバコの吸殻だった。

……人間がいるのか？

ここは恐竜オウガテイルもどきや巨大ゴンゴウゴリラどものワクワク動物王国ワンダーランドではなかったのか。

これは気を引き締めなければならない。ここがボルテクス界であり、そこに人間が居

るのであれば、それは高確率でコトワリを拓く者であるはずだ——シンにとって人間とはそういうものだった。

かつて出遭った彼らに思いを馳せ、これから出会う彼らを想像する。そして憂鬱になった。彼らはそのコトワリを信じる強い意思のためか、相手の話を聞こうとしないことが非常に多かったのだから。またあの論理の飛躍する会話をしなければならぬか。

せめて必要な情報を得るまでは、友好的に話し合いをしなければなるまい。それには第一印象が大事だ。相手が何者かもわからないし、下手なテクニクは逆効果になるかもしれない。まずは相手の様子を見る必要がある、か。

「こちらに敵対の意思はない。だが危険は積極的に排除するつもりだ。おとなしく出てくればよし、さもなければ攻撃する」

こんなところだろうか？

——短くも濃密な生存闘争の日々は、彼から「人との付き合い方」というものを消し去って余りあるものだったらしい。

#007 第一神喰

「お前さん……ゴッドイーターか？」

リンドウの声は、驚愕に満ちていた。

人型の声を聞いてすぐさま、撤退しようとした。彼にはその声がヴァジュラの咆哮よりも恐ろしいものと感じられたがため。故に一目散に逃げようとした。並外れた脚力に加え、牽制も兼ねた神機のインパルスエッジを推進剤代わりに、一気に加速する。彼の距離は十分にあつたはずなのだ。だがリンドウが動き出した次の瞬間には、その人型は彼の目の前にいた。それほど機敏に動ける人型の生物など、ゴッドイーターの他にはいない……はずである。

肩を掴まれ、瞬時に身動きがとれなくなる。なんだ。コレハナンダ。

だが、その人型は首を傾げると、一言「ゴッドイーター？」と返す。

まさかゴッドイーターを知らない？ そんなことが、あるのだろうか。防壁外の集落で暮らしているとしても、フェンリルの支援を受けずにいることはほぼ不可能のはず。そしてフェンリルの支援を受けるためには、ゴッドイーター適性の簡易検査を受けなければならぬ。それを知らないということは、やはりこいつは……

* * *

人間を相手にするのも久しぶりだと、シンは思考の海へと潜る。目の前にいるリンドウのことを、スツカリ忘れて。

考えをまとめよう。考えなしに動いてトラブルが増えるのは、もう沢山だ。そもそもゴツドイーターってなんだ？

(ゴツドイーター……神を食う者？ 種族か何かだろうか。俺がそうかと言われれば、まあ、そう言えなくもないが)

シンの独り言が、流石にこの至近距離でリンドウに聞こえないということはない。彼は気になったことを尋ねる。

「そう言えなくもない、とは？」

(前のボルテクス界では、確かに喰っていたが。そうしなければ、あのハゲ頭を殴り倒せなかつたし)

前に居たボルテクス界で、シンはたくさんの神と呼ばれた悪魔たちを仲魔にした。だがそれ以上に屠ってきたのだ。悪魔^{カミ}を屠り、悪魔^{カミ}の力^{マガツヒ}を喰って力を蓄え、そしてあのハゲ頭を殴り倒したのである。人に生まれて人に非ず、悪魔に生まれて悪魔に非ず。

ヒトシユラ
人修羅などと呼ばれたりもしたが、ゴッドイーターという呼び方は初めてだった。

「その、ぼるてくすかいとかハゲ頭とかはよく分かんが、大変だったんだな」

まっただくと、シンはひとりごちる。

（自分はただの学生だったのに、なんであの人は自分にこんな役割を割り振ったのか。いや、それを言うなら金髪の子供とあの婆さんの方かもしれない。おかしな虫を無理やり食わされ、こんな姿に改造されて）

「改造……まさか人体実験？」

（人体実験というか……あれ、結局なんだったんだらうな？）

マガタマを呑み込ませた金髪の子供。いやまあ実際はそんな可愛らしいもんじゃあ無かったわけだが。なんにせよ、あいつらが興味半分だったことには違いない。なにしろ相手は生粋の悪魔である。元とはいえ人間であるシンが、その本心を理解することなどできやしまい。

だが、あの時ああされていなければ死んでいたのは確かなのだ。マガタマが適合して力を得たのは偶然に過ぎなかったらしいのだが。

（ま、感謝することも無いだろうが、今さら恨んでもいない）

「そうか。まあ、お前さんが納得しているなら、それでいいんだ。ところでお前さん、名前は何？」

(名前……)

名前を尋ねられて、ようやくシンはリンドウの存在を思い出した。そうだ、初対面なのだから、自己紹介をしないとイケない。

本当に人間界のことを忘れているな、とシンは一人小さく笑った。

「シン。間違シンだ。今後ともヨロシク」

「お、笑ったな。俺は雨宮リンドウ。よろしくな、シン」

互いにどこかすれ違いを感じながら、和やかに会話が行われる。

リンドウは単独行動に飽いていた。

シンはこの世界の知識に飢えていた。

結果、互いに理想的な話し相手を得たのであった。

* * *

「すまんが仕事が終わってない。話したいことも色々あるし、ちよいと付き合っちゃくれないか」

そんな風にリンドウが誘えば、シンは特に躊躇することもなく承諾する。どうせ他にやる事が有るわけだし、リンドウには色々聞きたいことも有る。渡りに船という

やつだ。

「構わないが、色々教えてもらえるか」

「教える？」

「ゴツドイーターとか、このあたりのこととか」

シンは自分の事情をどう説明したものか、まったく思いつかなかつた。だから人間だった頃に読んだ小説だか何だかの設定を借りようとしたのだが、その記憶も漠然としたものしか残ってはいない。結果、出たのが――

「まあ、あれだ。流れ着いたとか、記憶喪失とか、そういうやつだ」

――であった。

これでは「なんだそりゃ」と返したリンドウの方が正常であろう。

「あの……ほら、あれだ。貴種流離譚むかしぼなしとか。どこからともなく現れた英雄とかが、怪物退

治して村を救ったり」

「英雄なのか？」

「自分で名乗るもんじゃないだろう、そういうのは」

「村を救ってくれるのか？」

「いや、わからん」

「お前ね」

流石にリンドウも呆れてしまった。

だがシンにも言い分はある。

「そもそも何を忘れていいのか、何を覚えているのか、そういう判断材料自体が無くてな。だから話を聞いていれば、何か思い出せるかもしれないと思っただが」

「ああ」

そういうものと、どこか釈然としないものを感じながら、リンドウは納得することにした。

後日、この時の判断について聞かれたリンドウは、得体のしれないところはあるが、悪党には見えなかったからだとして笑って答えたという。

#008 荒神と神喰

「ゴッドイーターってのは、まあ、一口に言えば地球の掃除屋だな。やたらと増えちまつたアラガミどもを片付ける。アラガミってのは、さっきのデカイ猿みたいなのとか、二本足で歩くデカイトカゲみたいな……ああ、オウガテイルには遭ったのか。あれだつてゴッドイーター以外の人間^{ヤツ}が出くわしたら、まず死を覚悟するようなやつなんだが」

シンは危うく勘違いするところだったが、恐竜^アもどき^レがこの世界の旧支配種ではなかったようだ。まあアレが支配種だとしたら、農地やアスファルトの道路、信号機は何なのかということになったのだが。お行儀よく赤信号で立ち止まるオウガテイルを想像してみると、それなりに愛嬌はあるかもしれない。

「思つたより柔らかかつたんだが。そういうものなのか」

「柔らかかつたか。まったく。無茶苦茶なやつだな、お前さんは。で、まあそのアラガミなんだが、あれはゴッドイーターにしか倒せない。前に原子炉ふつ飛ばしてまとめて片付けようとしたこともあつたが、ほとんど効果は無かつたし」

「原子炉って」

この世界の人間は相当無茶なことをしていたらしい。

「それじゃあ世界も滅ぶだろう」

「ありやあ酷かった」

酷かった、で済ませてしまふんだから、この世界の人間たちも大概だ。あるいはそれだけで済ませられてしまうくらい、どうしようもなくなっているのか。

まあ既にボルテクス昇化してしまっている以上、残された道は次なる世界へと進むだけなんだろうが。

「生物兵器とかじゃダメだったのか？ あれだけ別物っぽいんだ、人間とか環境に無害なもので有効な細菌とか」

科学の進んだ文明なら、あるいはそんな手段もあつたのではないだろうか？

「あー。もしかすると効くのもあるかもしれないが、基本的にはダメらしい。外殻ガワをなんとかしても、すぐに再生しちゃう。だから内部ナカにこいつをぶち込んでやらにやあならん、らしい」

「らしいって」

「なんでもアラガミってのは細胞の群れそのものらしくてな。ただぶつた切ったりぶつ潰したりしても、細胞同士が戻ってくつついちゃう。だから普通的手段じゃ倒せねえ。ただその細胞同士がくつつくのを指示してる司令塔コマってか、アラガミには核コアってのがあつて、そいつをこの神機——ゴッドイーターにしか使えない、えらく気位キイの高い武器

なんだが——こいつで抜き取ってやると、細胞がくつついていられんようになって倒せる……だったか」

「単細胞生物みたいなものなのか。そりゃあ厄介だ。にしても」

「ん？」

「随分とあやふやなんだな」

「まあ、俺らはこいつを振り回してるだけだからなあ。難しいことはそういうのが好きな人間が考えてくれてる」

「それもそうか」

カラカラと愉しげに笑う二人。笑いながらもシンは、まだ人間が分業できる規模で存在しているということに驚いた。かつてのボルテクス界には人間は片手の指で足りるほどしか残らなかつた。こちらのボルテクス界は、もしかすると多くのコトワリの種があるのかもしれない。

あるいは前のボルテクス界とはコトワリを啓くルールが違うのだろうか？

「そういう難しいことを考えてるのがフェンリルつつつて、俺の職場なわけだが。お前さん、本当に知らんのか？」

「ああ」

現在、人類圏の守護者は間違いなくフェンリルである。

まだアラガミのいなかった時代から遺伝子工学に支えられた穀物メジャーだったフェンリルは、荒廃した後の世界でもその力を遺憾なく発揮し、瞬く間に人類圏の穀物シェアを寡占、全人類を対象にした食料の供給源となった……とされる。実際にはフェンリルによって世界各地に築かれた防塞都市^{イヅ}の存在しないエリアの人類は、全てアラガミの大増殖に飲み込まれて死滅し、ハイヴ及びその周縁集落^{サテライト}、つまりフェンリルの食料供給地域のみが生き残ったためなのだが。

ともあれ今の地球上に「フェンリル」の名前を知らない人間が存在したことが、リンドウには信じられなかった。

「前から知らなかったのか、それとも単に忘れていただけなのか、俺自身には判断できないのだが」

「ああ、そりやそうか」

記憶喪失というシンの虚偽申告を、ひとまず信じることにしていたリンドウだが、会話自体はスムーズにできているため、すぐに失念してしまう。常識の欠落というやつは、これでなかなか意外と対処が難しいものだ。

面倒なことは、そういうのが好きな相手に投げてしまおう。リンドウは早々にそう決めて、ひとまず思いついた限りの説明をしておくことにした。

「フェンリルは俺のつてか、ゴッドイーターの職場だな。フェンリルにはアラガミの研

究をやつてゐる酔狂な連中がいてな。そいつらのお陰で俺らみたいなゴツドイーターとか、あとはアラガミを防ぐ防壁、対アラガミ防壁なんてセンスの欠片もない名前なんだが、そういうもんを作つて都市を守つたり。それから食料生産、医療福祉なんてのもやつてる」

「それはもう一つの国じゃないのか？」

「ああ。フェンリル帝国なんて言うやつもいるくらいだ。まあそういう連中は碌なもんじゃなかったりするんだが……：：：？」

話の流れで昼食がまだだったことを思い出し、リンドウは車のサイドポケットを開ける。圧縮された栄養食のバーを取り出し、何気なくシンの目の前に差し出してみた。それはまるでカ○リーメイトのようであった。

「クツソ不味いけどな。良けりやあ食べるか？」

「いや、俺は大丈夫だ」

「遠慮しなくていいぞ。お前さんのお陰で仕事も早くに片付きそうだし」

「不味いんだろ？」

「ああ。すげえ不味い。ハイヴに帰りやあもう少しマシなもんがあるんだが、外じゃあな」

「なら、ええと、ハイヴか？　そこに帰つてからで構わない」

「そうか？ まあお前さんがそれで良いんなら構わんがね」

「俺にはアイツさえあれば食事は必要ないんだ。美味しいものなら食いたいが、不味いものをわざわざ食いたいとは、な」

そういつて天頂の太陽カグツチを指差し笑うシンに、リンドウは思わず啞えタバコを落としてしまった。

#009 西暦2068年

「まさか植物人間だったとは」

「それじゃあ別の意味にならんか？」

「光合成してるんだらう？」

「光合成と言えるのかどうか。アレはそもそも光なのか？」

ボルテクス界にあつて、食事とはマガツヒを取り込むこと。それだけだ。それですら生命を維持するだけなら不要だったのだ。ただしボルテクス界では次なるコトワリを定めるための生存競争が行われるため、強くならねば生き残ることができない。だから強くなるためにマガツヒを食らう必要があつた。それだけだ。

「そいつも人体実験の成果なのか」

「原理は分からんがな」

「それが分かりやあなあ」

この世界では、食糧の欠乏がひとつの大きな問題となつていくという。ボルテクス界のあり方には謎が多い。ここは自分の知るボルテクス界とはあり方が違うのかもしれない。

* * *

リンドウの話によると、この世界では大地がめくれ上がった際にも、地震のような災害はなかったようだ。かつてシンのいた東京は、受胎した際に建造物のほとんどが倒壊し、更地になるほどの大災害になったというのに。

ある日突然、いつの間にかそうなっていることに誰かが気付き、しばらくは騒ぎになつたらしい。だがそれも沈まぬ太陽、あの忌々しいカグツチに比べればどうでも良いことだと考えられるようになったという。夜が来ないということは、それだけで人間をおかしくすることができてしまうのだ。

もちろん被害がなかったわけではない。特に交通・輸送のインフラは滅茶苦茶になった。太陽光による熱、海洋や山岳といった地形、天体の引力、そして自転。それらによって生み出されていた気流や潮流が大きく変化したのだから当然だ。気象条件の変化は、まず航路というものを壊滅させた。それらを再整備するために必要なデータを採集するはずの人工衛星は、もはや一つも存在しない。受胎現象はどうやら大気圏外のものを取り込んでくれなかったようだ。

そして人類は再び体験の経験化というアナクロナ能力を要求されることとなつた。

しかもアラガミの跋扈する世界で。

かくして世界はその広大さを取り戻した。

カグツチによつて夜の^{ない}世界になつたこの世界は、植物の生長にも変化が生じた。人類の生存圏に残つていたお陰でアラガミの捕食を免れた植物が、一斉に枯れ果ててしまったのだという。これについてはシンの方に思い当たる^{こと}が有つた。

カグツチの光は意志あるモノに活力を与えるが、意志なきモノには何も与えない。次なる世界を生み出すため、世界^{コト}のあり方^{カタ}を啓く者と、その助けとなるモノ。ボルテクス界に必要なのはそれだけだ。意志なき植物^{モノ}に価値はなく、故に彼らに生きる術はない。光合成すらできないのだから当然だろう。

結果として今現在、この世界において植物と呼べるものは、フェンリルの人工農場で太陽光を模して調整された人工光を浴びせられ、生産が維持されている農作物だけになつてしまつたそう^だ。

不思議と一部の海藻類、プランクトンなどが死滅することはなかつたようで、それらを使った食料生産なども研究されているらしいが、今のところ食料は家畜の肉と、巨大化させた穀類でどうにか賄っている状態^だとか。

人間ですらアーコロジーとして建設され、かつての自転のサイクルで昼夜を再現しているフエンリルのハイヴを除けば、どこも夜の無い世界となってしまったのだ。ハイヴ外で細々と生き延びていた集落の多くは、沈まない太陽カクツチに生活サイクルを乱され、狂を発した人間を核として互いに殺し合うようになり、自滅してしまっただけらしい。

「詰んでるな、人間」

「……ああ」

シンのボヤきにリンドウはため息混じりの紫煙を吐き出し、小さく嘆いた。

人間が生きるために必要なものが根こそぎ奪われてしまっていた。旧文明がそれだけ多くの環境モトに依存するものだったという証左かもしれないが、それを言っても始まらない。とにかく人類文明を支えていたあらゆるものが書き換えられてしまった。それだけは理解できた。

アラガミによつて虫の息になるまで追い詰められた世界は、受胎によつてその僅かな可能性を失った。

あるいはだから受胎したのかもしれない。あの日のトウキョウのように、あの若ハゲのような誰かの陰謀によつて受胎したわけではなく、ただアラガミによつてこの世界が

死ぬしか無い状態になってしまった。それ故にボルテクス界へと変容したのかも。

どちらにせよ、この世界にアラガミが現れたことがトリガーだったのだろう。それがあの若ハゲのような誰かの企みだったのか、それとも偶発的なものだったのかは分からないが、アラガミが無尽蔵の生命体であり、ひたすら増殖するだけのものであるのなら、それは対処不可能な致死ウイルスのパンデミックのようなものだ。世界の終わりとも見做されても納得できる。

「だからな、その食わんでいってのは秘密にしとけ」

「解剖でもされかねんか」

「ウチにはやりかねん人がいるからなア……」

傍観者気取りのアラガミ研究者であるサカキ博士はまだしも、ハイヴの運営責任を背負い込んでいる支部長なら、それくらいのことにはやりかねない。研究畑から政治家に転身した変わり者。リンドウは彼のことを、人類救済という至上目的のためならいかなる犠牲をも顧みない、大義に狂った男だと思っている。

リンドウの口ぶりから、彼のハイヴにはあの若ハゲのような人間がいるのだろうかというあたりをつけたシンは、その忠告に感謝した。

「ああ……わざわざ自分から話すことでもないからな」

正直なところ、ああいう他人の話をまったく聞かず、ひたすら自分の都合だけで何もかも動かそうとする手合には、できることなら会いたくはない。だがコトワリとはそうした絶対の価値観があつて初めて成り立つものだ。シンはその身を車のシートに思いつきり沈め、倦んだ心情を表した。

「おう。で、だ」

「……何だそのニヤケ面」

「ほれ」

リンドウが差し出したのは、一度は引つ込めた栄養食。出来損ないのカ○リーメイトであつた。

「……不味いんだろう?」

「食つとけ」

「要らん」

「けどなあ、お前は どうにも芝居のできる性分じゃあなさそうだから」

「……だから?」

「どこからお前の可怪おかしさがバレるとも限らんだろう? だから、な。ちゃんと食つて

知つとくべきだつて」

「……そんなに食わせたいのか」

「バカお前、こりやお前のための思つて言つてるんだ。でなけりや貴重な食料をお前……」

「で、本当のところは？」

「空きつ腹の辛さを知らんなんてな不公平だからな。せめてこの不味さを思い知れ」

「つたく」

悪童のごとく笑うリンドウの顔に、シンは何故だか魔王ロキのそれを思い出ししていた。

下らない悪戯を考えては、周りの迷惑そつちのけでふざけて回るガキ大将トリックスターぶりは、どこか憎めないものがあつたものだ。

もつとも、女悪魔たちを相手にする時は、また別の悪戯セクハラを仕掛けていたようだったが、しようがない。

あいつは底意地の悪い飲んだくれたが、自分もその手下を殺して蔵を漁つたことがある。これをその罪滅ぼししてもらおう。

シンは勝手にそう決めつけると、リンドウの手からそいつを受け取り、かじりついた。

「……なんかこう、地味に不味いな……」

「だろ？」

どうやらこのボルテクス界においては「食」が重要課題となるようだ。

#010 奇妙な死体

一台の装甲車が砂埃を巻き上げ、荒野を駆け抜けてゆく。

シンにとって、車両での移動は久しぶりだ。その感覚は、前のボルテクス界では得た^かくても得られなかったものである。砂埃に汚れた窓から荒廃した大地を眺めて失われた世界^{日本}に思いを馳せるが、あまりうまくはいかなかった。

シンはあのハゲ頭を鉄拳で叩き潰した瞬間から、滅びた、否、自らの意志によって滅ぼした世界とのつながりが薄れてしまったことを自覚していた。数多のコトワリに雁字搦めにされ、未来を失っていた世界だ。後悔はない。だが自身の記憶が失われた^うことが腹立たしくはあった。

人修羅の力の源泉たる二十五のマガタマ、奇跡を凝縮したいくつつかの宝重、旅の中で契約した仲魔と悪魔全書、そしてあの六枚羽の大魔王から強^う請り取った^た「ミロク軍」と称する反唯一神の軍勢。それがシンが持ち出せた財^たの全^{から}てだ。

失われたものは人間の^{ヒト}身体、旧世界の記憶、そして上着。

……分の良い取引だった気がしなくもない。

自動車という貴重品に乗り慣れているらしい風情のシンに、リンドウは首を傾げながらも車を走らせる。

リンドウから見たシンの外見は、十二、三歳程度の若々しい肌を持った成人男性、というものだ。フェンリルの不断の努力により——味の面はともかくとして——肉体的成長に必要な栄養は供給されている。182センチのリンドウと遜色ない身長も、平均よりはやや高いと言った程度でさほど珍しくはない。

だがそれでも、肌に表示される年齢は嘘をつけない。対アラガミ防壁に囲まれたハイヴの中で暮らしていても、風に乗って舞い来る砂埃までは防ぎようがない。そしてその砂埃は露出した肌を容赦なく研磨するのだ。

お陰で半世紀前^{21世紀初頭}の都市人と比べ、ザラツキやすく、シワも出来やすい。例外はオラクル細胞によって新陳代謝能力が向上するゴツドイーターくらいのものだ。

そんな現代において、シンの肌年齢は異様に若い。たぶんオペレーター^{竹田ヒバリ}のあの子が見たら嫉妬するくらいには。普段、アナグラのエントランスに詰めて屋外に出ることのない彼女ですら、シンの肌艶には敵わないだろう。まあ、シンはそんなことを言われても喜びはしないだろうが。

そんなどうでも良いことを考えながら、シンの案内^{ナビ}に従って車を走らせた。

* * *

装甲車がヘリの墜落現場にたどり着く。

あたりに散乱するヘリの残骸を見て、シンはあの時に聞いた音の正体がこれだったのかと納得する。化石燃料ガソリンに着火して爆発する音など、映画の中くらいでしか覚えがない。もはや忘却の彼方にあつたものだった。

「あーあー。ひつでえ」

車を降りたりインドウが、大きなボヤキ声をもらした。

気持ちは分からなくもない。あたりには金属の残骸だけでなく、人間の残骸だったモノも散らかっているのだから。

シンにとつても見慣れない光景だ。何しろ前のボルテクス界では、意志なき肉片などすべてマガツヒになって霧散してしまうものだった。

それにそれら肉片は、たしかに人間のものに違いなかった。泥から作られたマネカタに、人間のような臓器は無いはずだ。だが比較的原型を留めている遺骸の中には、内臓それがはつきりと確認できるものがあつた。少なくともこれはマネカタではない。

とはいえ気持ち悪いと感じることも、喉を突く嘔吐感なども無い。人修羅の口は言葉を発し、マガツヒを食らうためのものだ。その奥にはあるいはマガツヒが収まる臓器ら

しきものはあるかもしれないが、それには胃酸を生産する機能も、異物を吐き出すために痙攣する機能もないのだろう。

それでもシンに刻み込まれた不謹慎という言葉が、彼の眉をしかめさせた。

もとより見て楽しいものでも愉快なものでもないのだから、笑顔になる道理は無い。それでも先ほど携帯食を食べたときよりずっと小さな反応だったことは、彼の人間性のあり方が、さもなれば死への慣れの問題か。

「あー、見物は構わんが、良いと言うまで物には触らんでくれ。写真を撮らにやならん」
「仕事か」

「お仕事ですよー」

ヤル気の欠片も感じられない返事をしつつ、億劫そうにのったりした動きで現場写真を撮影するリンドウの姿に、シンはあの呪われた男を思い出す。人間が死滅したはずのボルテクス界にあつて、何故か残っていた雑誌記者。

もはや名を思い出すことはできない。

アマラの禁忌タブーを犯し、永劫の輪廻に囚われた愚者。

磔刑に処され、マガツヒに溶かされ死してなお、運命から逃れられぬ男。

楽園より出たいでる人類に与えられた言祝のろいぎの象徴カタチ。

それはそれとして。

くわえタバコのまま器用にカメラを構えているのはいいのだが、紫煙がもろにレンズの前を横切っているのはいいのだろうか。あのままでは煙った写真になりそうなのだが。

まあいいか。

他人事として、シンはあたりに散らかった遺体^{モノ}に目を向けた。

おかしなものが、そこに有った。

コンクリの瓦礫とヘリの外装とが奇跡的なバランスで組み上げた、小さな厨子^{ずし}のような空間。

そこに血と泥によって化粧の施された、成人女性の胸像^{トルソー}が収められていた。

顔から胸元、肋下の切断面までにいたる、明らかな作為の感じられる左右線対象の化粧は、ちょうどシンが人修羅^{アケマ}の力を開放した時に見せる、光る刺青のようなアレを思わせる。

そのすぐ近くには、肩から切り離された両腕が放り出されていた。

そこに収めるために切り落とされたのだろう。

鋭利な刃物で丁寧に切られた作り物めいた肉の断面と、切ることができなかつたのか無理やり折り砕かれた骨が生々しい。

周囲に散らかる爆発で引きちぎられたものの中で、それだけが異様に存在感を示していた。

刃物を使うアラガミがいるのだろうか。死体を飾り立てる知能を持ったアラガミ。シンは自分が目撃した恐竜オウガティルもどきとイメージが合わないことを首をひねった。

一人で考えていても答えなど出るまい。

シンは散らかったヘリの機材を撮影していたリンドウに尋ねた。

撮影を続けながら、そっけなくリンドウが答える。

「いや、そもそもアラガミに襲われたんなら、遺体なんかはとつくに食われてるだろう」

「じゃあこれ、人間がやったのか」

「は？」

シンがそれを指差していると、撮影を止めてリンドウがこちらに来た。それを目の当たりにして一瞬だけ怯んだ表情を見せてから、片手で拝み手を掲げ、黙祷する。それからファインダーを向けてシャッターをカチカチと何度も押し込んで撮影を始めた。

一通り撮り終わったのか、カメラを仕舞うと肩をぐるりと回した後、ため息を一つ。

「こりやまた厄介なことになりそうだな。あー、こいつは見なかったってことで」
「分かった」

興味はあつたがただの好奇心にすぎない。

シンは素直に頷いた。

「あー。見るもんは見たし、帰るとするかね」

かくして二人は帰路につく。

フェンリル極東支部。

かつて日本国の神奈川県と呼ばれた地域に築かれた、人類防衛の要塞。

そこにコトワリを啓くニンゲンは居るだろうか。

シンは一瞬、言いようのない期待に身を震わせた。

#011 アナグラ

リンドウとシンを載せた装甲車は、砂埃の舞うアスファルトの道路を走る。

メンテナンスの行われていないアスファルトは、ところどころ欠けたまま放置されていた。「もうゴッドイーターがアラガミ狩りに使うくらいだから」とはリンドウの言。ハイヴの周縁集落に食料配給の輸送車が走っていた頃には、まだいくらかは整備されていたらしい。

そうしてようやく前方に見えてくる。あの時に万里の遠眼鏡で見た、蓮の花びらのような外壁を持った都市。

「今や数えるほどになってしまった人類文明圏の最終防衛線を標榜する、フェンリルの直轄都市だ。」

「随分とデカイ壁だな」

「ああ。ありや対アラガミ防壁だ」

「あれでアラガミの侵入を防ぐのか。にしちゃあ隙間だらけだが？」

「あー……素材が足りなかったり、手抜き工事で倒壊したり、あと大型種に破壊された

り。色々だな」

対アラガミ防壁はアラガミのコアが素材になるらしい。だからゴツドイーターは常にアラガミを狩り続けている。アラガミの数を減らし、防壁も増やせれば一石二鳥というわけだ。

「とはいっても減ってる実感は無いけどなアラガミ」

「やらないよりかはマシ、程度か」

「だから俺 ゴツドイーターらの仕事は無くならんわけだ」

「ブラツクだなあ」

「ぶらつく?」

ブラツク 過剰労働という概念は無くなってしまったようだ。

そんなことを言っていられないレベルまで追い込まれている、ということなのだろう。無論、元よりただの俗語にすぎないのだ。別の言葉に置き換わっているだけかもしれないが。

「それら、そろそろゲートだ。挨拶ぐらいで、あとは黙つといてくれ」

「分かった」

車はそれまで正面に見えていた大きなゲートを避けるように右折し、そこから大分離

れた場所にある小さなゲート前へ到着する。傍らにある小さな見張所の中から、職員らしき若者が手を振っていた。

「ハイハイ」

「俺らの職場直通のゲート。正面ゲートから入ると手続きが面倒だから」

特に咎められることもなく、装甲車が一台どうにか通れる程度の小さなゲートを通過する。シンはそこで、なんらかのセンサーが照射されていることに気付いた。空港で金属探知機のゲートを通らされるようなものだろうか？

リンドウはそのまま半地下の駐車場へと車を滑り込ませ、適当な場所へ停車させる。駐車場にはだいぶ空きがあつた。多くが出撃中なのか、そもそも車両が少ないのかは分からない。

* * *

長距離を走って熱のこもっていた装甲車から降りた二人は、涼しい外気を吸い込んで腰を伸ばす。シンも、必要もないのにそうしていた。なんとなくそうした方が、体のキレが良くなる気がする。ただそれだけのことだ。

リンドウに従って駐車場を出ると、すぐに小ぶりの剣らしき武装を担いだ男に呼び止

められた。シンがどうしたものかと黙っている間に、リンドウは「情報提供者だよ」と笑って答える。

男が気だるさを感じさせる声でボヤいた。

「またですか？」

「今度は本物だつて」

「じゃあ前の人はやっぱり嘘だつたんですね」

「どうだったかな」

シンはなにか面倒でもあるかと身構えそうになったが、思いの外、二人のやり取りは軽妙で緊張感がない。お互いの言葉が気の利いた冗談であるかのように、楽しげに笑い合っている。

どことなく所在無げな心地になったシンに、男が笑顔で語りかけてきた。

「ようこそアナグラへ。もう大丈夫ですよ」

シンはどう答えたものか分からず、ただ「ああ」と小さく頷く。

態度には表さなかったものの、シンは密かに今の状況を楽しんでいた。

安心しろと促されるなど、どれくらいぶりのことだろうか。あの世界に落ちてからというもの、もうずっと、自分が安心させる側となるか、さもなければ二度と相手がそういうことを考える必要が無いようにしてやるか、そのどちらかしかなかったのだ。

何故か動きを止めたシンの様子に、男とリンドウは顔を見合わせ、今度は小声でやり取りを始めた。

「緊張してるってわけじゃなさそうだし、随分おとなしい人ですね」

「そりや外で生きてりやあなあ」

「すいません。失言でした」

男がリンドウに頭を下げると、リンドウはアゴをしゃくつてシンを示す。下げる相手が間違っているということか。

まったくお節いなヤツだ。シンは思わず苦笑いを浮かべた。

その表情に気付いたようで、男も小さく頭を下げる。目が笑っているのは苦笑いに対してか。この男も苦勞しているのだろう。何かが通じ合った気がする。

シンは「気にしないでくれ」と手を振り、同じようにして応えた。

「すまない。人と話すのは久しぶりで」

「そうでしたか。私はここ極東支部の第二部隊、防衛班班長の大森タツミおおもりです。よくぞ「ご無事で」

タツミが差し出した右手を握って「ありがとう」と応じると、シンの目をじつと見つめながら、「大丈夫だ」と言わんばかりに力強く握り返された。無論、その程度の力でどうにかなるシンではない。微動だにしないシンに、むしろタツミの方が驚いている。

快活で熱のある男。同僚となればさぞ頼り甲斐のあることだろう。こういうタイプは居なかつたなど、シンはひとりごちた。

#012 検疫室

タツミと別れてすぐ、リンドウは一つのドアの前で立ち止まる。

彼があの大きな赤い腕輪を壁から出っ張った何らかの装置の上に乗せれば、そっけなく『検疫室』と打刻されたプレートが張られた重そうなドアが横に開いた。

「外からおかしな病原菌やらを持ち込んでないかどうか、ここで検査せにやならん。まあただ部屋の中でダラダラしてれば済む。お前さんは初めてだから、ちよいとばかり時間がかかるかも知れんが」

「そうか」

リンドウは部屋の隅のソファに寝転がると、退屈そうにあくびをかみ殺す。ああ、と何かを思い出したように声を出し、起き上がってソファの裏をまさぐりだした。

「退屈だったら、この辺でも見ててくれ」

差し出されたのはA4サイズの分厚い液晶端末。シンにしてみれば随分と懐かしい、文明の香りであった。

そう思ってたさつそく受け取るが、その端末にはボタンらしきものが無かった。どこで電源を入れるのかも分からなければ、起動後にどう操作すれば良いのかも想像がつかない。

い。あるいはキーボードが格納されているタイプかと想像し、金属製らしいフレームや裏面、縁をなぞるようにしてそれらしき凹凸を探すが見つからないではないか。

どうすれば良いのだろうか。

「あー、すまん。それはその透明の平らなところに手のひらを当てて。そう。ほらな」
言われたとおりにしてみると、しばらくトライバル柄の起動画面ブートアップメニューが表示され、やがてメニュー画面に遷移する。

シンはかつての世界のATMを思い出すが、あれと比べても動作が軽い。それもそのはず、彼の工業技術は西暦2003年の民生品レベルでしかない。実はこれも、大型のPDAや電子手帳のようなものだと思っていたのだ。

とはいえピンチやスワイプといった特殊なタッチ操作を除けば、インターフェースや用語についてはほとんど変化がない。OSもブラックボックス化されているため、感覚的にはほとんどウェブのブラウジングだ。すぐに慣れた。

「お、端末は知ってるか？ お前さんチグハグだなあ。まあいいか。そいつで時間つぶしててくれ。俺はちよっくら寝てるから」

そう言うやいなや、再びソファに寝転がると、リンドウはすぐに寝息を立て始めた。シンがやたら頑丈で重い端末を操作し、目についた「バガラリー」という動画のシリーズを眺めていると、たつぷり数時間ほどしてからドア上の検疫終了のランプがついた。

* * *

検査室の様子をモニタからチェックしている二人の男。

一人は金色の長髪を無造作に束ね、きれいに整えられたスカーフ、糊の利いた純白のロングコートをまとった清潔感のある男。名をヨハネス・フォン・シツクザール。フェンリル極東支部の支部長を務める。

もう一人はよれた黒のインバネスコートに大きく不似合いな丸眼鏡、そしてあちこちに飛び跳ねた頭髪と、およそだらしなさが全身に溢れている男。名をペイラー・サカキ榊。アラガミ技術開発総括責任者であり、またゴツドイーターという人類の救世主を開発した科学者である。

白と黒、およそ対象的な姿でありながら、その目は共に研究者のそれであった。

「ペイラー。どうかね、彼は」

検査室の様子を写したモニタから視線を外さず、まずシツクザールが口を開いた。

「病原体検査はオールグリーン、P53 パッチテスト因子適性は陽性と出たね。ランクはオレンジ。基礎能力はリンドウ君よりも高い」

サカキが手元のタブレットを確認しながら報告する。

チャートを表示したタブレットをシックザールへ手渡すと、そのデータを見た彼が喜色を露わにした。ひどく楽しげだ。

「ほう、これはまた！ ……いや待て。この数値、ソーマよりも高くないか？」

「ヨハン。ソーマ君のデータは君の専有だったと思うのだが」

「……そうだったな」

愛称ヨハンとで呼ばれたシックザールは一瞬「しまった」と顔をしかめる。

実のところ、フェンリル極東支部、通称アナグラに所属する全ゴッドイーターの基礎データは、ゴッドイーターの研究主任であるサカキ博士が管理することになっている。それがソーマというゴッドイーターについてのみ、シックザールが専有、秘匿しているが、これは支部長と言えども本来、越権行為ですらあった。告発されれば面倒なことになるかねない問題だ。

だがサカキはそれを黙認していた。彼とソーマとの関係を考慮した結果である。

どうにも気ままずげな表情になりながらも、シックザールはすぐに大きな声で方向転換を図る。

「ともあれだ！ リンドウ君のわがままも、たまには役に立つということだな」

あからさまな話題逸らしに、しかし親友サカキは乗った。顔には苦笑いを浮かべている。

「彼はただ善人なだけだよ、ヨハン」

「来年には第一部隊の隊長だよ、彼は。それでは困る」

「君の立場にすれば、そう言わなきやならないことは、理解しているよ」

「相変わらず君は傍観者スタージェイザなんだな、ペイラー」

「そうあることが僕の願いだからね、ヨハン」

#013 疑惑

「それよりも彼だ」

「本人にその気があれば、能力的にはまったく問題ない。このパラメータなら新型機すら使いこなせるはずだ。人格面は、まあ君が納得いくまで面接でも何でもしてくれ」

「ああ、もちろん」

サカキのどことなく投げやりな言葉に、シツクザールはただ鷹揚に頷き応えた。

最終責任を負う都合上、シツクザールは有望なゴッドイーター適格者との面談を希望する。その際には研究者としての性分なのか、やたら細かい疑問点について質問攻めにするのがあり、アナグラでは「支部長との面談」はその理由を問わず面倒の一つと目されている。

怒らせなければ良いが。サカキは立場が変わってもなお変わることのない親友の愛すべき欠点と、それによって巻き起こされた過去の騒動について思いを馳せた。

そんな親友の胸中など知る由もないシツクザールは、そのままモニタに映るシンの姿に視線を移し、眉間に皺ひいて小首を傾げる。

「それよりも今の様子、少々気になることがあるんだが」

「というと?」

「見た目の年齢はまだ十五、六歳といったところだろう。仮に驚くほど若作りだったとしても、三十歳以上ということはあるまい? それなのに、あれはどういうことだ」

シンはタブレットを早くも使いこなしている。それはこちらの人間にとつて、少々以上に特異なことであつた。

前にも触れたとおり、彼の外見年齢は実年齢よりも随分と若く見られてしまう。仮にシンが十五歳とするなら、産まれたのは西暦2053年。既に国家がアラガミに対抗する力を失つており、彼が物心つく頃には民衆の手からコンピュータ技術のほとんどが失われてしまつていた。

フェンリルが国家に成り代わつたたちちょうどその頃に産まれたと思われる少年が、情報端末に触れる機会があるとすれば、それはフェンリルのハイヴで生まれ育つた者だけだ。だが――

「ハイヴの市民データに該当する個人は存在しない」

「過去のP53因子適性検査の方にもデータは無いね」

――フェンリルの管理するデータベース内に、間雑シンに該当するデータが一切存在しないのだ。

フエンリルではハイヴに住まう全住民の基礎データを管理している。これは都市機能を最適化するために必要なものとされ、ハイヴ内からゴッドイーター候補者を探し出し、人員補充する際にも使用されていた。

極東支部は対アラガミの最前線ということもあり、データベースへの閲覧権は最上のものが与えられているのだ。世界の現状を考えれば、このデータベースに今なお未登録の人間など九分九厘、存在しえない。

それはつまり、彼が外部で生まれ育った人間であること、そしてこれまでフエンリルの支援を受けずに生きてきたことを意味している。

だが階層構造や用語検索といった概念は一つの技術であって、その日暮らしに汲々とした市民が身につけられるものではないのだ。

そうした意味で、シンの行動に対して疑義を抱くことは、彼らにとっては当然のことだったと言える。

「他の支部の人間という可能性は、無いのかい？」

「もちろん可能性はゼロでは無いさ。何らかの理由で秘匿されていた可能性は否定できない。産まれてから今までの十数年間、負傷も疾病もなく健やかに過ごしたとすれば、だがね。そうでなければ必ず基礎データは作成される」

「そうだね」

「どちらにせよ現状では連絡も取れないんだ。定期的に人員を往来させる提案はされているが、その第一便が——」

「リンドウ君の報告にあった、アレかい？」

「そうだ」

リンドウはアナグラ帰投後すぐに、現場写真のデータを提出していた。

人為的なものである可能性を考慮し、既に調査隊の編成が始まっている。

現場が多少遠いため、そう長い時間ではないが、このハイヴの防衛力が低下することになるだろう。

それでも精密な調査を必要とするのは、極東支部が孤立することを防ぐためだ。

極東支部は何かと特^{イレギュラー}別な場所である。アラガミの発生数、危険度、ともに世界最高を記録する。またその数のせいいか、あるいはアナグラとの生存競争がそうさせるのか、新型アラガミの発見数も極東支部が最多である。そしてそれは、極東支部に最も刺激的なデータが集まっているということだ。

特に人類の救世主たるゴッドイーター開発、その中核たる偏食細胞研究を拓いたペイラー・榎、またその技術からアラガミ装甲、対アラガミ防壁を設計したヨハネス・フォ

ン・シツクザールという二人の天才が常駐しているのがこの極東支部だ。いかなる新技術が開発されるのか、世界中のフェンリル関係者が注目している。その技術と開発力を独占できたハイヴは、他のハイヴに対する影響力を強め、より優位に立つことが出来るだろう。

極東支部から他支部への連絡が取れなくなったことは、もしかしたらそうした策謀によるものかもしれないのだ。

「彼がその定期便で密航してきた可能性は？」

「無いとはいえない。だがウラジオストクから墜落現場まで、直線距離でも約1000キロはある。巡航速度で少なくとも4時間はかかったはずだ。どこに隠れていたのかという疑問が生じる。同意の上で搭乗していたとするなら、彼らは何のために、どこから連れてきたのか」

「政治の話は分からないがね。オラクル細胞の移植が行われていない以上、新型ゴッドイーターのお披露目という可能性は低い」

「つまりは」

「わからない不明、ということだね」

辣腕で知られた極東支部支部長も、これほどの異常事態に対しては、流石にすぐには

思考をまとめられなかった。

「ペイラー。君ならどうする?」

「しばらく監視するしか無いだろう? 能力的には、リンドウ君とソーマ君か」

「それは……」

「僕ならそうする、というだけさ」

対するサカキ博士は、実にあっさりと答えを出してみせた。それは場当たり的な対策に過ぎないが、しかしそれ以外に無いという絶妙の一手であるようにも思える。

他人事として突き放す無責任な親友に、スターゲイザー責任者は恨みがましい目を向けた。シックスザール

#014 シックザール

「情報提供、感謝する」

検疫室を出て十分と少し後、シンは支部長室にいた。

大きく重厚なデスクの向こう、これまた重厚な革張りの椅子に腰掛けた男の名は、ヨハネス・フォン・シックザール。かつての日本国神奈川県藤沢市に建設された防衛都市、フエンリル極東支部の支部長だと名乗った。

人類最後の帝国と揶揄される巨大企業^{メガコーポ}フエンリル。中でも極東支部は対アラガミ戦線の最前線であり、フエンリルを現在の地位に押し上げたオラクル細胞研究の権威が二人とも赴任する、最重要拠点の一つである。

荒廃した西暦2068年の地上において権力というものに格付けをするならば、おそらくは世界の十指に入るのだろうことはシンにも想像できた。

そんな世界規模の最重要人物に、ソファに腰掛けたシンは軽く頭を下げて応じる。

応じてから、シンは首を傾げた。たぶん墜落事故の件なのだろうが、あれがこうしてVIPから感謝されるほどのことだったのか？ あるいは口封じ、口外法度の念押しか。

その様子に、ふむ、と小さく頷いたシックザールは席を立ち、背面の壁に飾られた地図を示しながら語り始める。まるで学校の授業のように。

「リンドウ君は外部での活動範囲が広い。ここがアナグラで、ここから、ここ。あとはこちらに出て、だいたいここからこの辺りまでが、彼の作戦域だ。自然、外部で生き延びてきた人たちと出会うこともある。そして彼はその、とても優しい人間だ。同じようにここに辿り着いた人間はそれなりに居るんだ。ああ、もちろん我々も、救える人間は極力救いたいと考えている。だが我々の資源も限られていて、既にこの都市で暮らしている人々への責任もある。誰でも受け入れることは難しい。分かるかい？」

要は情報提供者という口実で自分を歓迎する。そういうことなのだろう。

シックザールの講義はゆっくり大きな手振りを加え、しかしその目は一瞬たりとシンから外されることがなかった。落ち着いた語り口に、強い意志を持った瞳。そこには明確な統治のあり方をイメージしていることが伺える。

それはかつてのボルテクス界における若ハゲ……もといシジマの総司令・氷川を思わせる強かさだ。ただし彼の頭部の輝きは金色の長髪によるものだし、何よりその弁舌には熱意があった。諦め、切り捨てることでコトワリにたどり着いた氷川とは違う。

コトワリの種はここにあり。

されどまだ芽吹くには至らず。

「あなたが統治者として努力していることは——」

理解した。臆面もなくそう告げると、シンはゆっくりと頷く。

言われたシツクザールは大きく瞠目した後、目をつぶって小さく息を吐く。善意を押し付けることによつて後の交渉を有利に運ぼうと考えていたのだが、まさかここまで真正面から評価されるとは思っていなかった。

シツクザールは椅子に腰掛けると頭を軽く振り、両手の指を組んで顎を乗せる。疲れの見える面差しには、自嘲するような苦い笑いが浮かんでいた。

「ありがとう。そう言ってもらえると救われる。なかなか理解してはもらえないものでね」

* * *

今後のスケジュールについて簡単なレクチャーを受けた後。

シンから質問が投げかけられた。

「一つ聞きたい。あなたは、この世界がいかなる姿であるべきだと考える？」

この面談が始まるまでシンに対してスパイ疑惑を強く持っていたシツクザールだったが、言葉を交わすうちにそうした気持ちは薄れていた。それは彼が、親友たるパイ

ラーとよく似た距離感を持った人間、傍観者であると感じられたから。

だがその問いによって、再び疑惑は持ち上がる。

それは少なくともシックザールが見てきた市民が考えるようなことではない。いかに傍観者であろうとも、アラガミの恐怖と相対し続けてきたはずの人間が、世界のあり方などという広い視座に至ることがあるだろうか？

「それは一体」

「大した話じゃない。目指すものがあるのかと思っただけだ」

どう答えたものか。

どう答えるべきか。

虚を突かれた形ではあったものの、すぐに精神を立て直したシックザールは冷静にシンを観察する。

特に気負った様子の無い自然体。

だがその問いに何らかの価値を見出しているらしく、こちらの答えをじつと待ち構えている。

下手な言質を与えることはできない。いや、どちらにせよ答えは一つなのだが。

「人類がアラガミに怯えることなく、争うことなく安心して生きてゆける。そうあつて欲しいと願い、そうなるようにできる限り行動しているつもりだ」

そう。その願いは真実だ。

いつの時代も人類は平和を願う。

“私が傷つきませんように”

その思いに偽りはない。

問題となるのはいつだって手段なのだ。

「ありがとう」

思考の海に沈みかけていたシツクザールに、シンは深々と頭を下げた。

なにか彼の琴線に触れるようなことでも有ったのだろうか？ 彼にはわからない。

だがその感謝はごく自然に受け入れられるものだった。

* * *

不思議な男だ。

彼が出ていった部屋で、シツクザールは思い返す。

どこまでも自然体だった。

外で生き延びていたというのに、疲れも、諦めも、喜びも、感じられなかった。

そこにはただ、なにかを見極めようという意思だけが存在した。

まるで絶対の裁きを下す、旧文明における「神」のように。

静謐な瞳だった。

力強い瞳だった。

小揺ぎもしなかった。

例えるなら、それは一つの天体、一個の惑星そのものようにすら感じられた。

シックザールは熱力学第二法則のような、強固な方程式を思う。

それは研究者であつた自分が追い求めたものではなかったか。

ふつと強く息を吹くと、机の上の書類が震えた。

自分にはやらねばならないことがある。

彼は協力してくれるだろうか。

第二章 新生ゴツドイーター編

#015 筆記試験

「話は終わったか。また妙な演説でも聞かされたんじゃないのか？」

シツクザールとの面談が終わると、隣室で待っていたリンドウが片眉をひそめて笑った。

外にいた時とは違い、それは少し影のある笑顔だった。

「いいや」

シンが軽く首を振って否定すると、「なら、いい」と安堵の表情を浮かべるリンドウ。シンには実務的な人間に思えたのだが、演説癖でもあるのだろうか？

(ま、こちらの話を聞かずに一方的に喋る手合には慣れてるし)

アレらに比べれば会話が成立しただけ何百倍もマシというものだ。シンはそう結論づけた。

「そうだ。ほれ」

ポイツと無造作に投げられたものを、シンは右手でキャッチする。ホテルの鍵を彷彿

とさせる、大振りな棒状のキーホルダーがついた鍵だった。

「取り敢えず、部屋の用意ができたつてよ」

「部屋？」

「ここまで連れて来といて、ほっぴり出すわけにも行かんだろ」

「そういうものか」

シンの経験上、そこまで面倒見の良いニンゲンに遭遇したことはない。まあ高校生までの平凡な人生と、あとはボルテクス界で悪魔たちと戯れていたくらいの経験しかないのだから、当然といえば当然かもしれないが。

シックザールに注目し、また他の人間たちの中にコトワリを啓くものが現れないかどうか観察するため、アナグラに居ようとは思っていた。だからその申し出が、渡りに船だったことには違いない。

ただ、シンには睡眠を摂る必要がない。人修羅となった彼は、疲れることがなく、眠る必要も、食べる必要も無いのだ。そして人であること^{ヒト}を捨て、すべての悪魔の頂点——混沌王となった今では、「休む」という概念は、感覚を閉ざして目的の時間まで待機する、あるいは活発な活動を停止して思索に集中する。そのどちらかのために採られる行動となっていた。

結果として、部屋を用意したという申し出を受け、ようやくシンは、人間の生活とい

うものを思い出すこととなった。

言われてはじめて、支部長の語った「資源」や「受け入れ」という文言の意味に思い当たる。自分の迂闊さに小さく苦笑いを浮かべると、リンドウが眉をひそめた。

「迷惑だったか？」

「いや。助かった」

「済まなかつたな。言っておくべきだった」

それでその話は終わった。

そう思っていたのだが――

* * *

シンに割り当てられたのは、家具一式の揃った個室であった。彼が人間だった頃の乏しい経験からすると、それは小洒落たホテルの一室のようだったが、何故か彼は、古い海賊映画の船室を思い浮かべていた。フローリングの床のせいかもしれない。

入って左手には四角いテーブルと、それをL字に囲む安手のソファ。壁面のサイドデッキの隅には小型の冷蔵庫。右手にはセミダブルのベッドと、その奥には灰色の無骨

な大型筐体。サイドデツキには音楽プレイヤーやコーヒーセット、何冊かの本、観葉植物、レトロな電気スタンドなどが配置されている。

そこが本来、ゴツドイーターに割り当てられるフロアであることを、シンはまだ知らない。

そしてその案内が終わってすぐにシンは館内放送で呼び出され、その十分後、彼は何か、テスト用紙を前にしていた。

「制限時間六十分。始め」

その言葉を聞くや否や、シンは鉛筆を手にして設問をざっと眺める。幾つかの問題にバツ印をつけると、目安のために置かれた時計を確認。それからようやく設問を解き始めた。全体を眺めて手の掛かりそうな設問に印をつけ、それ以外の問題をさっさと問いていく。高校生時代に身に付けた、彼なりのテスト攻略法である。

人間だった頃の記憶はだいぶ薄れてしまったのに、こうしたことは忘れないのだなと、後になってシンは笑った。

いわゆる理数系の設問には、それほど時間を掛けずに済む。

元から得意だったということも有るし、なにより人文系に比べ、数学や自然科学の基

礎はそうそう変化するものではない。シンの人間としての生が終わりを告げた二十一世紀初頭と、地上の殆どをアラガミに席卷されたこちらの世界の文明レベルは——幾つかの先進技術を除けば——、少なくとも基礎の面においてそれほど変化はなかったようだ。

対する人文系の設問は、一部ほとんど手を付けられないものがあつた。歴史だ。

言語に関する設問ならば、まだ手の付けようも有る。混沌王は、あらゆる悪魔とのコンタクトが可能である。それ即ち、彼らの背景にあるあらゆる文明とのコンタクトが可能であるということだ。シンにとって、もはや言葉上の障壁は存在し得ない。故に漢字だろうが熟語だろうが慣用語だろうが、あるいは修辞学や論理的な設問も、そう手間取ることはない。

だが、その権能はコンタクトを可能にするというだけで、成功させられるというわけではない。彼らの背景についてまで、いちいち教えてはくれないのだ。第一、他の悪魔に言うことを聞かせるだけなら、力さえ有れば良い。結論として彼は、それぞれの文明の全てについては過去の学習以上のことを、まったく知らない。

あまつさえアラガミに抗するために繰り広げられた戦争の歴史など、知りようもない。

結局シンは、解ける設問だけを全て解いた段階で、監督役の職員に終了を告げ、答案用紙を手渡ししてしまう。

「え？ あ、お疲れ様でした。えっと、どうしよう……じゃあ隣の休憩室で、少し休んで。次の準備ができたら呼ぶから」

シンについて、ただ都市外で生存していた人間としか聞いていなかった職員は、どうせほとんど白紙かデタラメだろうとたか括っていた。だが実際には、答案用紙の約半分がそれなりに読める日本語で埋まっていることに驚き、次に指示になかった制限時間内に途中終了した現状に戸惑い、とりあえず終了を受け入れて上役に相談しに行くことにした。

休憩室に移動して、シンは呼ばれるまでのしばらくの間、活動を休止した。

* * *

「明らかに異常ですよ、これ」

「なんでこれだけの学力を持ちながらアラガミの知識が無いんだ」

「これ、鍛えれば研究班でもやっていけるんじゃないですか？」

「だがサカキ博士の話では【パッチテスト：オレンジ適合可能性86%以上】らしいじゃないか」

「となるとゴッドイーター行きか」

「簡易パッチって防疫室のあれだろ？ 誤認の可能性もあるんじゃないのか」

「だからその辺をこのあと測るんだろ」

「適合率低くても基礎ガタイが良ければそれなりには戦つかえるんだし」

「それなりで潰すには惜しくないか」

「年齢的にはまだ高校くらいですよね？」

「候補生がくせいだった可能性は」

「無い。適合パターンを持つカードは発見されなかった。だいたい候補生だったらアラガミの知識が無いのはおかしいだろう」

「ロシア支部の方も見たか？」

「ロシア？」

「あそこは支部長肝煎りだ。何か隠していてもおかしくない」

「そんなところに潜るのはリスクが大きすぎるだろ」

「仕方ないか」

#016 能力試験

筆記試験を終えて休憩室で待たされること二十分。お次は能力試験ということであナグラの外にある地上の施設へと移動する。シエルター並みに分厚い外壁を持つその建物の中、案内されたのは、バスケットコート2面分ほどの広さと十メートル近い高さを持つホール。シンは母校の体育館を思い出した。

普段はゴッドイーターたちが戦闘訓練を行っているそうで、床や壁にはさまざまな傷跡が残されている。

「すまんな」

「気にするな」

先に到着して待っていたリンドウが、手を上げて挨拶代わりのように謝罪の言葉を口にした。口調こそ軽いものの、その表情には後悔の色が浮かんでいる。

シンはまだアナグラでの立場がはつきりしていないため、リンドウが名目上の後見人となっていた。リンドウはただ情報提供者として連れてきたつもりだったが、この捉えどころのない青年はクソツタレな支部長に目をつけられ、既にフェンリル極東支部の新戦力として期待されてしまっている。

リンドウの肩を軽く叩き、シンはそれを笑って流した。元よりゴッドイーターになって働くことも、自分の能力をある程度見せておくことも、自分の目的——コトワリを啓く可能性の高いシツクザールを観察する——のためには都合が良い。

そう。この時シンは、そこそこ使える程度の人材として目をつけられる程度に収めるつもりだったのだ。

能力試験と銘打たれているものの、今回シンが受けているものは単なる身体能力測定である。ゴッドイーター志望者に対し、通常、このような試験は行われていない。

ゴッドイーター志望者は防疫室の各種センサーを使った簡易検査の後、一定以上の適合率が認められればそのまま適合試験という名の手術へと回され、紅い腕輪をつけることとなる。そしてそのまま専用の神機と寮の一室が貸与され、ゴッドイーターとしての速成訓練が開始される。

(ちなみに適合試験に失敗して死亡した者は、そのまま検体として研究局で有効活用されることになるのだが、志願者は適合試験をクリアするまで職員と必要以上に接触しないよう隔離されるため、その辺の事情を知る人間はアナグラ内部でも非常に少ない)

ゴッドイーターになれば身体能力は飛躍的に向上するため、非ゴッドイーター時の身体能力を測る必要など、本来は無い。これは簡易検査の結果がオレンジ、つまり最上

だった人間がゴッドイーター化した際、どの程度能力が向上するのか、そのデータを欲した研究局の強い要望によって実施されている。

なにしろこれまで適合率最上級のサンプルなど、シックザールの秘蔵っ子であるソーマただ一人しか居なかったのだ。そしてそのソーマのデータは支部長の占有となつてゐる。新しいサンプルの発見に研究局は色めき立ち、シックザールも拒否はできなかつた。そういう裏の事情もある。

かくして試験は順当に開始された。

そしてすぐに問題が発生した。

最初の試験は握力測定。

握力はシンが人間だった頃、どちらかといえばインドア派だった彼が、密かに得意としていた能力である。だからシンは、今の自分がどの程度かつての自分から逸脱してしまつてゐるのか、興味がわいた。わいてしまった。最後に測つた高校二年生の測定では、確か六十キロ程度だったはず。

試験に使用される握力計は、見た目こそ一般的なものだが、実際には千キロ、つまり

一トンまで測定できる特別製だ。ゴッドイーターたちは、重い神機を振るえるだけの握力を身につけている。この握力計は、そんな彼らのパラメータを測るために用意された特注品であった。

最大値を示す千の目盛りを、小数点を含んだ百キロだろうと誤解したシンは、流石にこれでは測りきれないだろうとアッサリ握りつぶしてしまった。

呆氣にとられる研究員たちの様子に、シンは思わずリンドウにアイコンタクトを図る。肩をすくめ、苦笑いを浮かべるリンドウはジェスチャーを交えながら応えた。

(マズかったか?)

(もう少し抑えてくれ)

(分かった)

これにより、シンは以降の試験は控え目にしようと思がけ……しかしてそれは徒労に終わる。

アナグラに来るまでの道中で見たリンドウの能力を、平均的なゴッドイーターのそれと誤解したままだったこと、そしてゴッドイーターが超人的な存在であることを知らなかったことは、加減を誤った大きな要因の一つだ。

だが最大の要因はシン自身の特性——即ち生きるための戦いをくぐり抜け、圧倒的な力を以て頂点にたどり着いた彼には、己を弱く見せようとするという考えが無かったと

いうことである。相手に力で劣るならば、鍛えてから挑めば良い。

そのための糧は雑魚悪魔を大量に狩りまくることで手に入れる。

それが彼が闘争の只中にあり続けた最大の理由であったのだから。

続けて行われた重量挙げ、肺活量の試験も、当然のように破壊された。

そろりそろりと周囲の様子を見つつ下手な演技を試みたが、その都度シツクザールが「真剣にやってくれないか」「正確な数値が出ないと困る」と口を挟んだためだ。

それでも加減はした。だからほどほどの破壊で済んだとも言える。

反復横跳びをすれば堅固に造られた床材を歪め、垂直跳びはゆうゆう天井に届く。万事その調子であった。

中でもパンチ力測定では力加減を完全に誤り、測定機器どころかその向こう側の壁にまで巨大な衝突痕を作ってしまった。人修羅の拳はあらゆる障害を打ち破り、押し通る。それは正しく神殺しの神器であった。どれほど堅固であろうが人造の測定器で受け止められるはずもない。

それらと比べれば他のゴッドイーターと比べても大差なかった短距離走などは、相当に大人しい結果だったと言える。もっと早く走れたなら、あの学ラン剣士からも逃れられたかもしれないのだが。

果たして能力試験は終了した。ほとんどの項目に「測定ⁿ不能^u」の四文字を記して。

* * *

「流石にこれほどとは……」

「いやはや、とんでもないね彼は」

ゴッドイーターが戦闘訓練を行うシミュレーションルーム。

アナグラの中でも地下シエルターの次に頑強なそこで行われた異邦^シ人の身体測定——あるいは破壊活動——に立ち会っていたシックザールとサカキ博士が、その惨状を前にしての第一声がそれであった。言葉を続けられなかったシックザールに比べ、応えたサカキ博士のほうがやや余裕があるのは、責任者と傍観者という両者の立場の違いだろうか。

「だがこれで、彼には別の嫌疑がかけられることになったわけだ」

「どういうことだ……!?!」

「おやおや、気がついてないのかい?」

大きな丸眼鏡の位置を直すふりをしてもったいぶるサカキ。シックザールは苛立ちを露わに、彼を睨みつけて詰め寄った。

その様子に気付かぬふうで、サカキは飄々と言葉を続けた。

「彼はアラガミなのでは、という疑いだよ。当然だろう？ ゴツドイーターでもないのにこんな身体能力を持った人間が、いや、少なくとも人間大の陸上生物が居るわけがない」

シンが聞いたらどんな顔をするだろうか、えらい言われようである。

だが、二人は真剣そのものだった。

「確かに、な。だが人型のアラガミなど……」

「アラガミは取り込んだ細胞の遺伝子情報から都合のいいものを取り出し、その特性を獲得する単体進化の生命体だ。中には人型を選ぶアラガミだっているかもしれないじゃないか」

「その可能性にはゼロがいくつ付くんか？ よしんば人型を採ったとしても、生物として脆弱な人類種に寄せることはないだろう」

「そうかもしれない。だが我々人類がそれと認識していない特性を、アラガミが見出すかもしれないじゃないか」

現実主義者リアリスストと理想主義者ロマンチスト、楽観主義者オプティミストと悲観主義者ペシミストと言うべきか。人類史に名を刻んだ二人の偉大な天才は、しかしそのスタンスからして全くの別物であったよう

だ。

このやりとりも、かれこれ五年以上は繰り返している。平行線から一ミリたりと動こうとしない互いの頑固さに、そしてこのやりとりの不毛さに二人が二人ともため息を吐くと、シツクザールは眉間のシワを揉みほぐし、サカキは肩をすくめておどけて見せた。それが二人の間で決められた、休戦協定の合図だった。

シツクザールは一度席を外し、ホールの外にある自動販売機で缶コーヒーを二本買うと、ホールに戻って一本をサカキに投げ渡す。

何度かお手玉をしてようやく受け取った缶を見て、サカキが苦々しげな表情を浮かべる。徹夜続きの研究局御用達、それは一口で目が覚める濃厚ブラックコーヒーだった。甘党のサカキにとってはもはや薬品カテゴリーに属するものである。

それでもサカキは一口だけ口をつけて渋面を浮かべ、もう要らないとばかりにシツクザールに突き返した。

そのやりとりでシツクザールは溜飲を下げ、正式にオフサイドとなる。これまたいつものことだった。

「どうする。オラクル細胞の反応は無かったはずだろう」

「簡単なことだよ、ヨハン。彼にゴッドイーターになってもらえばいい。どうせ最初か

「らそのつもりだったんだらう？」

#017 適合試験

能力試験の翌日。

案内された部屋に入ったシンに、強化ガラスを挟んだ観察室からシツクザールが問う。

「最後にもう一度だけ確認する。覚悟は良いかね？」

「慎重なことだ。構わない。やってくれ」

その問いに含まれたわずかな緊張に気付かないふりをして、シンはそっけなく応じた。

能力試験後の話で一度、この部屋に入る前に一度、そして今もまた、同じ質問をされている。正直クドいと思ったが、そうしてしまう事情が彼の側になにかあるのだろう。適合試験には苦痛を伴うという話だったが、もしかするとそれだけではないのかもしれない。

……そう訝しんでもみたが、次の瞬間にはどうでもいいかと切り捨てていた。大したことは起こりはずまい。そうたかを括っていたのだ。

「そうか。では只今より被験者・かんなき問難シンのゴッドイーター適合試験を開始する」

「開始します」

シックザールの宣言に、同じ部屋にいた白衣の男が目の前のパネルを操作する。シンのある部屋、被験室の全扉がロックされ、全ての出入り口がシャッターで閉鎖される。このシャッターは対アラガミ防壁と同じ素材で出来ている。それは適合試験と言う名のゴッドイーター化手術に失敗し、被験者がアラガミ化してしまった場合に備えたものだ。

ぽつんと唯一人取り残されたシンの前に、駆動音と共に台座がせり上がってきた。そのまま眺めていると、台座はシンの腰より上、胸元ほどの高さまでせり上がり、その上部が更に三十センチほどベッドの天蓋のように開く。

中にはシンの身長ほどもある武器らしきもの——神機しんき——が置かれていた。

にわかに緊張が高まる中、シックザールが次の指示を出す。

「では間雑シン君。台座の赤い凹みに利き腕の手首を乗せて、その神機の柄を軽く握ってくれ。ああそうだ、軽くていい。それから握ったらそのまま、しばらく動かないでいてくれ。君の力では台座が壊れてしまうかもしれないから」

言われたとおり、台座の縁にあるくぼみに右手首を乗せ、神機の柄を握った。

ガシャン!!

次の瞬間、せり上がっていた天蓋が勢い良く落ちてきて、シンの右手首がガツチリと金属の輪のようなもので挟み込まれる。

これがリンドウの付けていた腕輪か。

シンが冷静に観察し、納得していると、その固定された右手首に、針のような何かを打ち込まれた。

無意識に抵抗しそうになる体を押さえ込み、その針のようなものを受け入れる。

すぐさま何かが入り込まれ、そしてシンは、適合試験と称されるこの物々しい実験の正体によくやく気がついた。

(なるほど。そういうことか)

それは彼に人間であることをやめさせた金髪の子供——あるいは神に唾する大悪魔——の所業、そのものだったのだ。

* * *

話は前日、能力試験から約一時間後。

リンドウに誘われ、シンが時間遅れの昼食を取っていた際に遡る。

シンの前にはリンドウに代わって、初対面の男が立っていた。

その男について、印象に残ったことは三つ。

ひとつは糸のように細い狐目。笑みを浮かべているようできて、どこを見ているのか分からない。なんとも胡散臭い雰囲気を醸し出している。眼鏡を掛けているのはともかく、なぜ首から他に二つの眼鏡をぶら下げているのかも、さっぱり分からない。

それから黒のインバネスの下の、カラフルを通り越してサイケデリックな暖色系の羽織袴。深紅やらシヨツキングピンクやら金系やらで飾られた、不揃いのボーダー柄。なんと目にも優しくない配色である。そのわりに意外と似合っているように思えるあたりは、少し面白い。

そして最後にその頭部。およそ整えるということを忘れられているような、あるいは身だしなみという人類文明の知恵に唾することが、この男の魂の色、定められた宿業なのかもしれない。

「で、貴方は？」

「僕はペイラー・紳。この研究局の、まあ、責任者みたいなことをしている」

研究局という言葉聞いて、シンは僅かに眉をしかめる。アナグラに来る前、リンド

ウが話してくれたことの中には研究局の狂的なエピソードがいくつも混じっていたためだ。

とはいえ眼の前に居る男からはこれっぽちも脅威を感じることは無かったため、警戒はしても逃げるまでには及ばない。

シンのそんな様子に全く気付いた様子もなく、世界有数の頭脳は何の前置きもなく質問を投げかけてきた。

「ああ、君。新製品のレーシオンは食べてみてくれたかい？ 自信作でね」

新製品のレーシオンとはもしやあの、カ〇リーメイトめいた形状のアレだろうか。

ただ純粹に「不味かつた」としか言い表しようのない代物だったのだが、あれで自信作なのか……技術的な問題か、あるいは味は目的ではないのか。あるいは彼の味覚に問題がある可能性もあるか。

「リンドウから貰ったものなら、食べたが」

「どうだった？」

「不味かつた」

「そうかい。他には？」

「いや、特には」

「ふむ。その時、怪我をしていたとか？」

「いや、無い」

「ほう！ で、君は味覚に自信はあるかな？」

「あまり」

「なるほどなるほど」

矢継ぎ早に繰り出される質問に、シンは端的に答えていく。人修羅になつてからというもの、人間らしい食事から離れて随分経つ。自分がまだマトモな味覚を持っているかは怪しいものだが、リンドウも不味いと言っていたし、不味かつたという感想がマズいことにはならない……はず。

だがそんな不安はすぐに気にならなくなった。なにしろ繰り返されるのはひどく些細な、何の意味があるのかも分からないような下らない質問だ。それなのに、そんなうでも良いようなことに一つひとつ答える度、目の前の変人^{マッド}はやたらと楽しげにテンションを上げていくのだ。シンははつきりと戸惑いを覚えていた。

そんなシンの様子などまったく気にすることもなく、ペイラー・榊は質問攻めの最後に爆弾を投げ込んできた。

「君、もしかしてアラガミなのかい？」

#018 ペイラー・榊

「君、もしかしてアラガミなのかい？」

広々とした食堂を照らすLEDライトを反射し、主の表情を隠していた大きな丸眼鏡の奥で、ペイラー・榊のどこを見ているのかすら定かではなかった糸目がハッキリと開かれていた。貼り付けたデスマスクのような、柔和であつてもどこか不気味だった微笑みも、いつの間にもやら消えている。

シンの【眼】には、彼のマガツヒが煌々と輝いて見えた。それは彼の意志の強さ。身にとまつていた仮面、即ち自身を守るためのすべてをかなぐり捨て、その問いに命を賭しているのだろう。

それは紛うことなき狂気であつた。

人間を人間たらしむる力とは、社会の中で生きること。群れの力、多様性の力だ。個々が個体として完結している悪魔との違いはそれである。

『人に似て人に非ず、悪魔に似て悪魔に非ず』とうたわれた人修羅が、最後の戦いで最強の個体を凌駕出来たのも、多数の異なる仲魔を従えて力を合わせたが故であつた――

—そしてそれはトウキョウでの死闘を制し、アマラ深界の【玉座】に至って苦戦、接戦から遠ざかった今のシンが忘れかけているものでもある。

彼は今、その力、自身を人間たらしむる力を一時的とは言え、捨て去ろうとしている。それは自ら悪魔になろうとするようなものだ。

その愚を犯してもなお、その問いの答えを得たいということか。

……いや、そんな自覚はないのだろうが。

なるほど、彼は間違いなく狂的^{マッド}であろう。

リンドウの人物評は、少なくとも彼については正しかったようだ。

命を賭した問いだ。真摯に答えねばなるまい。

シンは正面からペイラーの目を見据え、はつきりと答えた。

「俺はアラガミではな——」

「ではゴッドイーターなのかな？」

やはり矢継ぎ早と言った感じで、シンが否定し終えるよりも早く、次の質問が浴びせられる。

「その問いに答えるには、知識が足りない。ゴッドイーターとは何だ？」

「ふむ……それはとても難しい質問だね」

質問を返されたことよって、博士の狂気が身を潜めた。

彼は丸眼鏡の位置を直すと、そのモジャモジャ頭をボリボリと掻き散らかす。乱れた髪は、もはや無残としか言いようがない有様だ。

* * *

その問いを真正面から問われたのは久しぶりのことだろうか、ペイラーは大きく息を吐いた。それについてシツクザールと最後にやりあったのは何年前だったか。

人類の守り手。アラガミを狩るもの。造られた超人。フェンリルの首輪付き……細々と研究開発していた数年前ならまだしも、現場に大つぶらに配備され、人目に触れるようになった現在では、この世界で生きる誰もが「ゴッドイーター」という概念について——それが漠然としたものであれ——自分なりの答えを持っている。

どう答えたものか。

大きな丸眼鏡に手をやり、その位置を直すほんのわずかな時間で、ペイラーはその問いに対する答えをまとめ上げる。声が上がったりはしていないだろうか。我に返ったペイラーは、先ほどまでの自身の振る舞いに気付いて気まずげに頭をボリボリと掻い

た。

「実のところ、僕も全ての答えを知っているわけじゃあない」

「ほう」

「ここでは私の立場、科学者としての見地から尋ねたものと思って欲しい」

「なるほど」

「で、その定義だが。基本的にはオラクル細胞を保有し、偏食因子を投与され、フェンリルと契約を結んで腕輪と神機という装備が貸与された人間が、そう呼ばれる。だがまあ、フェンリルとの契約については、フェンリルのデータベースに君の情報が無かったことから、無いのだろうと判断した。隠されている可能性は、否定出来ないけどね」

「……」

ごく短時間にまとめられた定義だが、必要十分条件は整えた。

これで伝わるかどうか、シンの論理的思考力に対する簡単なテストのつもりだった。オラクル細胞や偏食因子など、部外者では知ることのできない用語についての反応。腕輪や神機といった、公にされている情報に対する反応。フェンリルとの契約という要素に対する反応、特にデータベースと照合したことを匂わせる内容に対して。また彼に對してアナグラの人間が抱く疑惑についての警告。そして彼に尋ねた二つの大きな質問

との関連性。

短い中にも情報量は十分にある。

さて、彼はどう反応するだろうか。

「質問はあるかい？」

視線を彷徨わせる彼に、ペイラーは水を向けてみることにした。

彼は少し考える素振りを見せてから、幾つかの質問を行った。

「アラガミとゴッドイーターの身体的な違いは、その偏食因子ってやつだけ、なのか？」

「少なくとも、僕が知る範囲ではそうだね」

「じゃあ次。人の姿をしたアラガミがいるのか？」

「存在は確認されていないね」

「なるほど。可能性はある、と考えているわけだ」

「話が早いね」

嬉しげに手を叩くペイラー。

「そしてその存在こそが、貴方が探し求めているものだ」と

「うん。将来の可能性として、関心があることは否定しないよ」

世界最高の頭脳^{博士}は、内心で快哉を上げていた。

研究者ならまだしも、文字通り在野の、それもこれまでフェンリルの存在すら知らな

かった外部の人間が、ここまでスムーズに思考できるということに。最後の質問はいささか論理的飛躍を感じたが、勘所を掴んだ良い質問だと言えるだろう。だからか、次の問いには虚を突かれる思いだった。

「一つ聞きたい。あなたは、この世界がいかなる姿であるべきだと考える？」

* * *

シンは好奇心と、なにより違和感から、問うてみることにした。

「一つ聞きたい。あなたは、この世界がいかなる姿であるべきだと考える？」

ペイラー・榊。

マッドサイエンティスト

この珍奇な狂的^{マッドサイエンティスト}科学者は、この世界におけるアラガミ研究の第一人者であるという。そして人類防衛の要とされるゴッドイーターの開発者であり、また世界各地のフェンリル支部を中心とした都市^{ネスト}を守る対アラガミ防壁の研究にも協力しているらしい。これまでの功績を列挙すれば、まさにアラガミの天敵と言うべき存在だ。

その彼が、アラガミ殲滅を望むシツクザールの下にいる。

ならば普通は、彼もまたアラガミの殲滅を望んでいるのだらうと思つたのだが……

先ほどまでのやり取りの中で、ペイラー博士はアラガミに対して好奇心めいた関心は有つても、敵と見做す思考は見られなかつた。

そもそも自分に「君はアラガミなのか？」と尋ねていたが、もしそうだとしたら、どうするつもりだったのだろうか？ アラガミが人類の敵であるなら、その場で喰われてもおかしくはない。人型アラガミなる存在がどのような知性を持つに至るかは分からないが、わざわざ擬態して敵地に潜入するような存在であるのなら、口封じという思考も当然あつただろうに。

だが彼は、己の身を捨ててその問いを投げかけてきた。

それが単なる知的好奇心の為せる業なのか、それとも何かしらの意図があつてのことか。もしかしたら彼もまた、シツクザールとは異なるコトワリを持つているのかもしれない。

シンはそれを期待した。だが――

「難しい。とても難しい質問だね。私はただ、この惑星ほしの行く末を観察したかつた。ただそれだけだからね」

「観察か」

「そう。もちろん私は死にたくないし、私の知人にも死んでほしくはない。だがそれとは別に、この世界の、この惑星のがこれからどうなるのか。それが知りたい、この目で見たいという好奇心を否定できない。私にはかくあるべきという考えは無いんだ。だからその質問に対する答えを、私は持ち合わせてはいないんだよ」

どれほど強い影響力^{チカラ}を持っていても、世界のあるべき姿、かくあれと願うカタチがなければ、コトワリを啓くことは出来ない。ひとまず彼は、今の世界のコトワリの支持者である、ということだ。

無論、今がそうであるからといって、未来永劫^{そう}であり続けるとは限らない。かつての友人らのように、過酷な世界の中で何かをきっかけに自身のコトワリを見出し、啓く日が来るかもしれない。

だが今のところ、この眼鏡だらけの男は注目に値しないその他大勢の一人に過ぎないということだ。

シンはあからさまに関心を失い、ただ「そうか」と呟いた。

#019 紅い腕輪

「ふむ。なにやらガツカリさせてしまったようだね。だがそれが私という存在だ」

「正直に話してくれただけで、十分だ」

「そうかい」

関心を失ったシンと、冷静さを取り戻したサカキ博士。

二人とも続く言葉を忘れたのか、他に誰もいない食堂は、無人の静けさを取り戻したようだった。

シンはこれで話も終わりかと思い、席を立とうとする。

だがサカキは安手のパイプ椅子に腰を落ち着けたまま、シンから目を離そうとはしない。

「どうやら続きがあるようだ。シンは再び座り直した。」

「さて、では話を戻してもう一度尋ねよう。君はゴッドイーターなのかい？」

「分からない。自分にその、オラクル細胞だったか？ それが混じっているかどうか、調べたことなど無いからな」

シンの言葉使いはぶっきらぼうだが、内容はいかにも冷静で論理的ですらある。

ふと、似たような少年のことを思い出したサカキは、頬が緩みそうになるのをどうか我慢した。ソーマ・シツクザール。今はまだ年相応の少年だが、ある一点を除けば意外と冷静で、物事の真理を突く眼力がある。科学者であった父の後を追ったならば、あ

るいはこうした人間になるかもしれない。

自分の隣で研究に勤しむ少年の未来を思い浮かべ、在りし日のちっぽけな研究室を思い出し——今は空想にふけるべき時ではないと浮かぶ笑いを噛み潰し、小さく頭を振った。

サカキを見つめ、言葉を待つシンに、サカキは頷いて言葉を続けた。

「ふむ。普通に暮らしていればそうだろうね。フエンリルの簡易検査も、偏食因子への適性を見るだけだし。安心してくれていい。君が普通の人間であるなら、オラクル細胞を身に帯びる可能性はゼロに等しい。過去にアラガミの核コアを直接経口摂取し、オラクル細胞を身に帯びた例が無かったわけではないが——」

「どうなった？」

「アラガミ化した」

「なるほど」

要はアラガミを食べた、ということだろう。

それが自発的な一個人の行為によるものなのか、それとも実験室の中で衆人環視の下に行われたことなのか、シンは敢えて問わなかった。わずかに歪むサカキの表情を見れば、それは一目瞭然であつたから。

「ひとつ質問なんだが」

「なんだい？」

なによりシンには、そんなことよりもずっと重要な、確認すべき事柄が思いついていたということもある。

つまり――

「確たる証拠もなければ可能性も限りなく小さいが、それでも俺がアラガミではないかと疑う人間がいる、ということか？」

「正解」

ある種の確信をもって疑っているのは、そう応えたペイラー・榊ただ一人なのだが、彼もそこまで正直に教えはしない。

「で、その疑惑を晴らす方法はあるのか？」

「ある」

「どんな？」

「君がゴッドイーターになればいい」

* * *

時は戻ってシンのゴッドイーター適合試験、改めゴッドイーター化手術。

全ての出入り口が対アラガミ防壁シャッターで閉ざされ、薄暗くなった室内。

その中に一人ぼつんと立つシンの目の前はひとつの台座。

そしてそこに鎮座しましたるは、神機じんきと呼ばれる巨大武装。

シツクザールの声に指示された通りにその柄を掴めば、右手首から何かを注入された際の感覚。それは忘れもしない、シンがああ病院で初めてマガタマを飲み込んだ時のものだった。

とは言えあれから既に二十四回は繰り返したことだ。入手し、飲み込む都度、肉体は少しずつ変容する。これが二十五度目。その痛みにとくに慣れてしまったからなのか、それとも実際に痛みが軽減されているのかは分からないが、とにかくシンにとってそれは軽い不快感、それ以上のもものではなくなっていた。

「今、君の体にオラクル細胞が埋め込んでいる。その腕輪は肉体と融合し、生涯外すことはできない」

シツクザールは丁寧に、その作業工程を一つひとつ説明してゆく。彼にとって、また

被験者にとつても、これはある種のセレモニーだ。ゴツドイーターという新たな生物へと生まれ変わる。そしてフェンリルの支援の下、人類の盾となる。ゴツドイーター適合試験は、謂わばその記念式典であつた。

だがこのあたりの工程は、実のところ前日の段階でサカキ博士から既に聞いていた。そう驚くことでもない。

シンにとつて驚くことではなかつたが、もう一方の人々にとつては驚かずにはいられなかつたようだ。

彼の知るべくもないことだが、今まさにこれまでの適合試験と異なる光景が展開されていたのだから。

オラクル細胞の移植は、被験者の肉体を丸ごと作り変えることと同義だ。その激痛は強靱な意思を持つてなお、耐え難いものだときれてきた。根性が自慢のとあるゴツドイーターも、適合試験だけは二度と受けたくないとうそぶくほどに。

だが、シンが苦痛を感じている様子は無い。

それどころか自身の右腕の変化を、極めて冷静に観察している。

それは異常事態と言つても過言ではない。

「痛みはないか？」

「血が逆流するような気持ち悪さはあるが、痛いというほどでは無いな」

シツクザールが努めて冷静に問いかけるが、問われたシンは、これまでと同じ調子で答えた。

オラクル細胞を埋め込まれてなお平然としているシンの有様を見ていた研究員は、驚嘆を隠せずに居る。

隣接する監督室は軽いパニックに包まれていた。

「P53 偏食型オラクル細胞、移植できているのか？」

「間違いありません。パラメータには従来通りの遷移が見られますし、センサーにも異常はありません」

「なら何故痛みを感じない！」

「無痛症ということは」

「ありえない。彼の触覚が正常なことは確認されている」

「じゃあなんで！」

「分かりませんよそんなこと！」

「適合率オレンジとはそれほどのものなのか……」

「静かにしたまえよ君たち」

それまで傍観していたサカキ博士が口を開いたことで、それまでの狂騒がパタリと静止する。

皆、彼の言葉を、アラガミ研究の第一人者であるペイラー・榊の言葉を待っていた。

「適合率によって痛みの程度が変わることは、十分なデータで示されているだろう？ 適合率オレンジ、理論上の最高値を記録した彼なら、こういうことだってありうるさ」

「そう、なのですか」

さも当然のこと、予測の範囲内であると断言するサカキに、研究員たちも半ば無理矢理に納得する。

そこに畳み掛けるようにして、サカキは次の提案エサを挿いをした。

「ああ。彼の体細胞はP53と特別相性が良いんだろう。少ないがサンプルも提供してもらっている。今はまだ培養中だが、それが済んだら研究チームを編制してもらおうよ。いいよね、ヨハン」

「あ、ああ。もちろんだ」

* * *

一方、被験室に一人放置されていたシンは、自身の肉体が改造されていく様子をじつと観察していた。

シンにはすでに分かっていた。

神機、腕輪、そして注入されたオラクル細胞は、合わせて一つの、謂わば疑似マガタマだ。

これを完全に取り込んでしまえば、人間は確実に悪魔化するだろう。だがこうして分けておくことで、人間と悪魔との境に身をおくことができるのだ。

たぶん。

それを制御するのがこの腕輪の役割なのだろう。

前日に受けたサカキの講義レクチャーによると、ゴッドイーターは放っておけば、移植されたオラクル細胞によって全身が侵され、アラガミ化してしまうという。そうさせないため、定期的にエサを注入する。そのソケットが腕輪なのだそうだ。腕輪は通常、手首に融合して引き剥がせなくなるが、腕ごと切り離すなどの方法で腕輪を失ったり、腕輪を破壊されたりすると、そのゴッドイーターはアラガミ化の運命から逃れることは出来なくなるのだ。

監督室の騒ぎが収まるより前に、シンに対する施術は終わった。シンの右手首に真紅の腕輪を残して、台座の天蓋が再び開いてゆく。なるほど、これがリンドウの付けていたモノかと理解する。そうしてここにまた一人、新たなゴッドイーターが誕生した。

#020 閑話：シンの三日間

フエンリル極東支部——通称「アナグラ」。

ここに来てからの三日間を思い返し、シンは久しぶりに忙しい生活を送っている気分になっていた。

初日。ヨハネス・フォン・シツクザールとの面談は、まるで大学入試の面接でも受けているようだった。

シツクザールについて、シンをここに連れてきたあまみや雨宮リンドウは最悪のクソツタレと評していたが、面談の感触から、シンは彼を偽悪的な善人ではないかと想像している。もつとも、そうした人物が善意からとんでもない厄災を運んでくることは少なくない。人格の善悪とは往々にして、行動の善悪と乖離がちだ。

そんな訳知りのようなことを思うシンだが、自身の人物眼にそれほど自信を持つてはいない。人生経験の乏しさは、痛いほど自覚しているのだから。

二日目は一日がかりで能力試験。

興味本位で行われた筆記テストでは、この時代にしては異常なほどの高等教育を受けた形跡も確認され、後ほど別の問題が噴出するきっかけとなるのだが、今は置いておく。

次に行われたのが身体能力のテスト。握力や跳躍、反復横跳び、遠投などが体育の授業で行われていたものを彷彿とさせる内容だった。もつとも、そこに露骨な戦闘能力のテストも含まれていたのだが。

そのテストで、シンは超人的な身体能力——特に白兵戦の才能——を示した。ゴッドイーター用の測定機器を投入してなお、ほとんどの項目を「測定不能」で埋める高い能力を発揮し、立ち会った全ての人々の度肝を抜いた。

ちなみに測定機器の多くは高級品であり、それらの幾つかが破壊されるに至り、室内には居並ぶ研究者たちの悲鳴が^{こだま}飴^{だま}したという。

反面、射撃戦の能力はお粗末なもので、こちらは同席した研究員の「このまま遠距離式（神機）を持たせて戦場に出したら誤射姫より酷いことにならないか？」という^{ボヤキ}評価がすべてを物語っている。

例えばシンのマガタマに秘められた攻撃能力は、大砲を釣瓶撃ちにするような面制圧に偏っている。狙撃と言えば対象のマガツヒに直接干渉する各種単体魔法か、あとは必中が約束されている因果逆転攻撃〔至高の魔弾〕くらいしかないのだ。狙撃^{シューティングレンジ}場で射出されるソーサーを撃つ感覚など分からなくても仕方がないというものだろう。

そして三日目。シンのゴッドイーター適合試験が行われた。

ゴッドイーターとなった人間は、体内にオラクル細胞を、右手首にフェンリルへの服従の証である深紅の腕輪を、そしてその手にアラガミ狩りのパートナーたる神機を与えられる。

シンに言わせると、それらは合わせて一つのマガタマのようなものだという。

本来ならば体細胞を入れ替えられる激痛に耐えねばならない移植手術も、二十五個のマガタマそれぞれの活性、不活性を操作し、日常的に肉体の概念そのものを作り変えているシンにとっては、ごく慣れたものでしかない。

かくして本来ならばその激痛に堪え、かつ半日から二日間は何どい倦怠感に悩まされるはずの適合試験を、シンは平然とクリアし、フェンリル極東支部所属のゴッドイーターとなったのである。

* * *

かくして新人ゴッドイーターとなったシンだが、彼に対する期待と反発はじわじわとアナグラ内に広がっていた。

彼の能力を目の当たりにした研究局員や、万年人手不足に悩まされている防衛班の多くは前者を。その他の職員、特にゴッドイーターと接する機会の多い整備班、ゴッドイーターのミツシヨンをバックアップする作戦班、食堂や清掃局などゴッドイーターの荒つぽさに悩まされる職員は後者の反応を示している。

そして同僚となるゴッドイーターの意見もまた、大きく三つに分かれていた。

一つはリンドウや彼に近しく、シンがアナグラに來た経緯を知っている者。

彼らの多くはサテライトと呼ばれる周辺集落の出身者だ。彼らは彼らの家族や友人らがフェンリルの支援を受け続けるため、交換条件として適合試験を受け、ゴッドイーターとなつて命がけの戦場に身を投じたのだ。ただ生を繋いできただけの者も多く、性根のネジ曲がったものもいるが、多くは互助の精神を持った者たちである。そうしなれば生き残れなかつたから、という切実な事情もあつてのことだが。

だが、だからこそ全くの身一つ、フェンリルの支援を必要としないはずのシンが、業を背負うことになつたことには深く同情し、後ろめたさを感じている者すらいた。

一つは部外者として敬遠する者。

彼らはフェンリル直轄の教育機関——通称「学校」——の出身者たちだ。フェンリルは幾つかの学校で、職員の候補生たちを育てている。国家がその形態を維持できなく

なつた時代に、義務教育など存在するはずがない。ましてや高等教育など夢のまた夢となつていた。だがフェンリルの力の源泉は、まさにその高等教育とその先にある科学の力である。

彼らの中からゴッドイーターになつた者たちは、自身をフェンリルの生え抜きと自称し、数こそ少ないが独自に派閥を形成している。そんな彼らにとつて、初歩とは言へ科学的教養を持った部外者の存在は、ただただ不気味なものに映つている。

そして最後の一つは単に商売敵と見る者たち。

彼らにとつて同僚は皆、自分たちの獲物を横取りしようとする邪魔者だ。強力なアラガミのコアと素材を得、自身の神機をより強く育てようとする者。あるいはアラガミを狩ることで得られる報奨や、ゴッドイーターとしての特権、そして民衆から寄せられる羨望を独占したい者。

彼らにしてみれば、新人などはただ囹として、あるいは壁役として使えればそれで十分なのだ。自分よりも強いゴッドイーターなど余計な存在でしか無い。彼らにとつてはシンはおろか、リンドウたち第一部隊すら疎ましい存在だ。それは彼らが優先的に高難度ミッションを任じられ、より良い素材、高い報酬を得る機会に恵まれているからだ。

厄介ごとの渦の中心。それがフェンリル極東支部におけるシンの今の立場である。

まるで腫れ物扱いではあるが、それだけ彼の存在が異質だということだ。

そんなシンもゴツドイーターの一人——即ちフェンリル職員——となったからには、例外なく新人教育を受けなければならぬ。

だが彼はフェンリル都市^{ネスト}どころか周縁集落^{サテライト}ですらない、既に人類文明から打ち棄^すてられたはずの荒野出身だという。その知性に高等教育の残滓は見えるものの、どのような環境で暮らしてきたかも分からないのだ。これまでの教育マニュアルなんて役に立たないかもしれない。

実際にはそれほど大きな違いはないのだが、そんなことは誰にも分からない。

かく言う当人は、精々がアルバイトの新人研修くらいにしか考えてはいないのだが。

さて。

ゴツドイーターとなったシンに、フェンリル職員の基礎教育が行われることになった。

これには特に、シンの異常性に目をつけた研究班、万年人手不足に悩まされている防衛班、そしてこれから迷惑を被ることが確定している整備班の強い要望があつてのことだ。それぞれ好奇心、即戦力、面倒事の最小化と、その内実には随分な違いがあるよう

だった。

この仕事を、シックザールは誰に任せろべきかで頭を悩ませることとなる。

最初に案内役に立候補した研究員はシンを検体モルモットにしようと目論んでいるのがまる分かりだったし、次に立候補した防衛班のゴッドイーターは案内を口実にサボる気マンマンでアテにならない。任せてみようかと思っていたオペレーター見習いの竹田ヒバリは、座学と雑用で疲労困憊といった有様だ。今にも倒れそうだったので、二日間の休暇を与えた。（翌日、エントランスに暑苦しい男どもの悲鳴が上がった）

結局、この仕事もリンドウに丸投げまかせすることにした。「間難シンにアナグラの各施設の案内と、ゴッドイーターの仕事の説明するように」と、ただそれだけを任務として。

年齢のわりにスレたところのあるリンドウは、それだけで概ね事情を察し、任務を拝命した。

#021 クソツタレな職場

そうして四日目。今日はアナグラの施設を一通り巡るオリエンテーションである。

ナビゲーターはこの世界で唯一の馴染みと言つて良い——とシンは思っている——
雨宮^{あまみや}リンドウ。彼は各施設を順繰りに紹介していく……はずだった。

だが実際はと言えば、リンドウはやる気なさげにダラダラと歩きながら、シンをエン
トランスホールに連れて来ると、カウンターに置かれていたリーフレットを一部取つて
手渡し、「だいたいそこに書いてある」と言つて案内を終わらせようとした。

「先にちよつと話しておきたいことが有つてな」

そうして、朝食時を過ぎて閑散としている食堂の席に、二人、向かい合つて座る。

「たぶんお前さんが勘違いしていることを、先に説明しておく」

そう前置きをしてから、リンドウは話を始めた。

こうしてこの男を真正面からじつと見たのは初めてかもしれない。などと益体もな
いことを考えるシン。正面に座る男は、まだ二十歳^{はたち}になるかどうかの若さに似合わず、
どこか世慣れた中年サラリーマンのような雰囲気を漂わせている——もっとも、この時

代にはシンの想像するようなサラリーマンなんて存在は、どこにも居ないかもしれないが。社会に出ることもなく学生のまま人生を終えたシンにしてみれば、とても同世代とは思えない成熟ぶりだ。

自分が大人しくリンドウの言うことに従っているのも、そのあたりで多少、気後れしている部分があるのかもしれない……そんなシンの思索に気付いた様子もなく、喫煙所で立ち話と洒落込んだリンドウは、配給の紙巻き煙草を啜えたまま気怠げに話を続ける。

「アナグラってのは、防壁で囲まれたこの都市ネストのことじゃない。あくまで俺らがねぐらにしている、ここ。この四角い建物のことだ。正式名称はフェンリル極東支部ってんだが……まあ、そう呼ぶ人間ヤツはお偉いさんくらいだな。どこに行っても極東支部だけで話を通る」

「じゃあ周りに住んでる人間は、アナグラとは無関係なのか？」

「ああ。アナグラの職員は全員、アナグラの中で生活してる。だからまあアナグラなんて言われてるんだけどな。で、外にあるのは外部居住区つつつて……あー。こう言っちゃあなんだが、勝手に住み着いた連中だ」

なんとも言いにくそうに視線を彷徨わせ、頭をボリボリと掻きながら、リンドウ。

「まあ、最初はな。フェンリルも人類救済を看板カンバンにしてるし、食料の配給なんかも近くに居てくれた方がいろいろと都合が良いってんで黙認してたんだが、当時の予測以上にアラガミの増殖が早かったとかで、あつという間に対アラガミ防壁のこつち側が、いっぱいになった」

「そうなるだろうな」

「で、何度もアラガミに襲撃されてるうちに、どつかのロクデナシのクソツタレが気がついたわけだ。アラガミに壁を乗り越えられてから、アナグラまでの時間稼ぎに都合がい
いんじやねえかって」

「……ああ、なるほど」

「まあそんなクソツタレな職場だよ、ここは」

唾えタバコを足元に吐き捨てると、必要以上に力を込めてその火を踏み消すリンドウ。

シンはこの時代において、急激な減少傾向にある人間——もはやそれは稀少資源というべきだ——を、単なる肉の壁として消極的に浪費する行為に、如何なる正当性があるのか？ それを肯定した何者かは如何なる未来を企図しているのだろうか？ と、そんなことが妙に気になった。

シンの冷めた——あるいは白けた——と言うべきか——視線から逃れるように、リンドウ

はロクデナシのクソツタレ氣に食わない誰かの代わりに踏みにじった煙草の残骸を、じつと睨みつけていた。

その気まづい空気も、そう長くは続かなかつた。

ぼつ、と何かが通電したくぐもつた音が響くと、続いて「あーあーあー」と、わずかに幼気の残つた女の声が、壁に添えつけられたスピーカーから聞こえてきた。人間世界の最先端の科学の砦であるはずのアナグラだが、シンにはその箱型スピーカーが、まるでかつての小学校の体育館にあつたそれと同じに見えた。

そんなノスタルジーなどお構いなしに、短い館内放送が始まる。先程の声でだ。

『雨宮リンドウ、間薙シン。両名は至急、整備局へ出頭してください。繰り返します。雨宮リンドウ、間薙シン。両名は至急——』

「……リンドウ？」

「あーそういうやそんな話、してたっけ。スマン、忘れてた」

シンの冷めた視線を避けつつ、リンドウは頭を掻いて謝罪した。

#022 楠リツカ

「遅いですよリンドウさん！ また遅刻ですか」

「悪い、リツカちゃん。いやあ、あちこち案内して周ってたもんで」

整備局でシンとリンドウを待ち構えていたのは、大きなゴーグルにツナギ姿の一人の少女だった。

ホルダーに工具だらけ、油まみれのニツカポツカが妙に似合っている。

年の頃はシンとそう変わらない——たぶん高校卒業くらいのもの——怒れる少女に対し、リンドウは両手を合わせて頭を下げている。その頭をリツカちゃんと呼ばれた少女が、手にしたスパナで優しくノックする。

「リンドウさん、今日はずっと食堂にいましたよね」

「え、いやあ……」

「なんでいつつもすぐバレる嘘つくんですか。サクヤさんに言いますからねー」

「そりゃあ勘弁してくれ。な、このとおり！」

くわえタバコによれたコート、くたびれた風体のリンドウが両手を合わせて頭を下げるさまは、妙な説得力がある。相手を呆れさせ、諦めさせるダメ人間、あるいはダメ大

人といった風に。荒野でアラガミを軽々と処理してゆく、デキる男のニオイはこれっぽっちも感じられない。

半ば戯^{じゃ}れているようにも見えるのは、相手もそれほど怒^{しか}つてはいないからだろう。

一区切り付いたのか気が済んだのか、リツカが「もういいよ」と呆れた声でリンドウを許すと、彼女はようやくシンの方に顔を向けた。

当の本人は「リンドウはサクヤサンに弱い。覚えておこう」等とニヤついていたのだが、すぐに間抜けた顔を引き締め、さて何の用なのだろうかと心の内で身構える。この世界の常識も知らなければ、そもそも幼馴染を除いて同年代の少女との会話経験など数えるほどしか無い。

真面目な顔をしていれば、少々強面^{コウモテ}ではあるが、精悍な美男子と言つて差し支えないシンだ。

特にここは殺伐とした世界である。強いということとは、評価を上げることとはあつても下げることはない。既にアナグラの女性職員の間では話題になつていて、隠し撮りされた写真が出回つていたり、肉食系女子たちが虎視眈々と機会を窺つていたり、それについての特トカルチョが行われていたりもする——配給チケットが掛け金になつたことも騒動を大きくした原因だろうが——のだが、その辺りのことを彼が知るはずもなし。

閑話休題。

急に真面目くさった顔になったシンに、リツカはちよつと驚いた顔をしてみせると、「なるほどね」と何かを悟ったように呟いた。

「で、君が新しいゴッドイーターくんだね。お名前は？」

「ああ。問かなぎ薙シンという。君は」

「私は楠くすのきリツカ。ここで神機の整備士をしてるんだ。よろしく」

「ああ」

リツカから差し出された右手をとり、シンは彼女と握手を交わす。

とはいえリツカは厚手の作業用手袋をつけたまま、気にした様子もない。これまた職人らしい無頓着さだとシンは一人納得してその手を握り返す。だが、不思議とゴワゴワとしたはずの手袋は、シンの手には吸い付くように感じられた。

リツカも同じように感じ、「あれ？」と首をひねる。

神機整備のための作業手袋は、対アラガミ用のコーティングがされている。オラクル細胞を注入されたゴッドイーターなら反発するはずなのだが……

これは新米ゴッドイーターへの研修の一環である。その反発がなぜ起こるかを説明

し、それから神機の扱いについて、不用意に他人の神機に近付いたり、ましてや触れないように警告をする、そのための話題作りのプロセスだ。多少なりと他人に不快感を与えることに抵抗の有るリツカも、必要性から黙認していた。

だが、いつまで待っても反発することはなかった。

それどころか、妙にしつとりと馴染む感触が心地よい。

シンは興味深げに、リツカは何が起こっているのかを理解するために、握りあつた右手を見つめながら、相手の手を揉みしだくようにニギニギと蠢かせる。

……なんだこれ？

二人の顔に、ハテナマークが浮かんだ。

ここでちよつとだけカメラを引いてみることにしよう。

整備局詰めの中機整備補・楠リツカ。

男だらけの整備班に咲く一輪の花。紅一点のアイドルである。高校生になるや父の後を追うようにアナグラの整備局に出入りし、班員らに可愛がられながら高校卒業と同時にこの職に就いたのだ。誰もが娘や妹のように大事に思っていた。

そんな彼女がちよつとばかり男前で背も高ければ体つきも悪くない、ついでに女性職員の間で噂になっている新米ゴッドイーターと、握手をしながら互いに見つめ合ってい

る——ように見えたのだ。そりやあツナギ姿のむさ苦しい男どもが、血涙流してシンを睨んだって仕方がないというものであろう。

互いに握手をしたまま、その視線は互いの顔と手を何度も往復させる少年少女。

その二人の傍らで火の付いていないタバコを啜えて「まだ？」とばかりに二人を見やる草臥れた男。

そしてその三人を取り巻いて、齒を食いしばり目を充血させて少年を睨みつけている男ども。

この日この時の整備局は、名状しがたき不思議空間と化していた。

「こう見えてリツカちゃんには整備班のエースだからな。怒らせるなよ」

その場にいる全員がこの不思議空間から解放されたのは、周囲の様子に気がついたリンドウが混ぜっ返し、茶々を入れたお陰だった。

いやリンドウにしてみれば、自分の立場がまるで立会人だか仲人だかのように見えてしまうのではないかと、という危惧からの、保身に過ぎなかつたりもするのだが。そのことを指摘したとしても、彼なら助かつたんだからいいだろうと、うそづくに違いない。

「もう！ リンドウさん、そのリツカちゃんつてのやめてって言ってるでしょ」

「そう言われてもなあ」

そうしてやっと気がそれたリツカが、手を離してリンドウに突っかかるのを、整備班の男どもは緩みきった表情で見やり、サムズアップしてリンドウを褒め称えたのだった。

#023 パートナー？

フエンリル極東支部・整備班のエース、楠リツカ。

シンとは同年代のようなだが、可愛らしい顔立ちに反して、機械油で汚れた頬や年季の入ったオーバーオールは、確かに熟練の職人を思わせる風格がある。やや大きめの野暮つたいニツカポツカも、彼女の魅力を引き立てるばかりだ。

シンがまじまじとその風体を眺めていると、お返しとばかりにリツカもシンの全身を舐め回すように見つめ、そして可愛らしく首を傾げた。

「……リンドウさん。もしかしてこの人、スゴイ人？」

「お、流石リツカちゃん。分かるか」

「だってこの人、どこにも無駄がなくない？ ちょっと触らせてね」

そう言うや否や、シンの腕から肩、首、胸、腹、背中、太もも、ふくらはぎと、リツカは全身をペタペタと触り始めた。ボディチェックというわけでもなく、ひたすら筋肉と関節を触ってくるのだが、頬は緩んでいるくせに目だけは真剣で、ちよつと怖い。

何事かと戸惑うシンに、リンドウは新しいタバコを取り出しながら「やらせておけ」とでも言うように頷いてみせる。セクハラにはならないんだろうかとシンは考えたが、人

類が高度な文明社会を維持できているのはアナグラの中だけであるし、そのアナグラにしても人員は常に不足していて福利厚生にまで手が回らないのが現状だ。つまるところ、この世界ではセクハラなんて概念は摩滅していた。

タバコを啜えてライターを取り出すなり、リンドウは通りがかった整備班員に「火気厳禁ですよ、整備局は」と注意され、分かりやすくしよぼくれた表情をしてみせる。

どうも彼は整備班と相性がよろしくないらしい。

「アソビは有るのに無駄がほとんど無い。これ全部が安全マージンなんだ。凄いなあ」
ひとしきり触って満足したのか、リツカはうんうんと頷きながら何度も「凄いなあ」と呟き、もうちよつと触り足りないとかばかりに手を伸ばしては関節や筋肉を撫で回し、を繰り返していた。それを眺めていた整備班の何人かが「何故自分にはゴッドイーター適性が無かったのか」と嘆き、また何人かは「次の休暇はトレーニングジムにチケットを使おう」と密かに誓ったという。

「……で、呼び出した用事は？」

流石にしびれを切らしたシンが問うと、リツカは頬を、リンドウは頭をそれぞれポリポリと照れくさそうに搔いた。

「あ、そうそう。君の神機じんきのことで相談があつたんだ。どんなタイプがいいのかなと思つて」

「タイプ？」

「うん。ゴッドイーターが使う神機は、大きく分けると白兵式と射撃式の二つがあつて、それぞれ更に三つに分かれるんだ。白兵式はブレードで、ショート、ロング、バスター。射撃式はスナイパー、アサルト、ブラストだね。まず君は、遠距離と近距離、どっちで戦いたい？」

「近距離だな」

「だな。こいつにガンナーやらせるのは勿体無い」

シンは自分の拳を見つめつつ、リンドウはシンの射撃の成績を思い出しつつ、それぞれ同じ答えを出した。

「白兵式かあ。まあ君なら問題なくやれそうだね。でも、油断は禁物だよ」

「ああ」

「それじゃあ、こつち来て」

* * *

リツカに案内され、シンたちは無骨な神機たちが柱石のように立ち並ぶ部屋、神機保管庫へと足を踏み入れていた。

シンの腰ほどの高さがある台座に、一台に一機ずつの神機が立てられ、無骨な金属のアームで固定されている。空いている台座のほとんどは、現在出動中のゴツドイーターのものだそうだ。

シンが何気なしに目に付いた神機に手を伸ばすと、リツカとリンドウが慌てた声で「ストップ!」「待った!」と制止した。

「神機は基本的に、登録された人にしか触れないんだ。それか専用のグローブをはめるか。それでも長時間は触れない」

「なら整備はゴツドイーターが自分で?」

「おいおい、勘弁してくれよ」

リツカの説明にシンが疑問を口にする、リンドウが心底嫌そうに悲鳴を上げた。

実のところ、シンもそれほど器用というわけではない。できれば細かい作業は避けたいところだ。

「そうしてくれたら私たちも楽かも知れないけど、定期的にオーバーホールしないと、戦場では留め具が一つ緩んでただけで命に関わるから」

「そうそう」

「リンドウさんはもう少し神機を大切にしてくれてもいいと思うけどね！ でね、整備局私たちは基本的にはマニピュレータを使ってるんだ。直接触らないで、ロボットアームを操作してね」

それでも人間が近付きすぎると反応することが有るんだけどね。と笑ってリツカ。

そのまま「君の神機はあつちだね。A-13」とシンを案内しながらも、彼女は神機の説明を楽しいげに続ける。放っておけば何時までも話し続けそうだ。だが不思議と嫌な感じはしない。同意を求めたり、様子を窺ったり、といった素振りが見られないからだろうか。ただ好きだから喋っているだけで、そこに押し付けがましさが無い。

勝手にしやべくり倒すあたりはシンの知り合いたちによく似ているが、そこに押し付けがましさが無い、というのは斬新だ。他人のことを勝手に決めつけたりもしない。嫌味がない、とはこういうことだろうか、シンの思考は脱線してゆく。

ふと右手首を軽く圧迫される感触を覚え、シンは我に返った。

見ればリツカがシンの腕輪を、ポンポンと軽く叩いて示していた。

「神機のコアと、この腕輪とは一対一でリンクしてるんだ。使うときは、神機のサブコアからケーブルが腕輪に自動接続されて、神機とゴッドイーターの偏食因子の照合が行われる。適合試験の時に神機の柄を握らされたでしょ？ あの時君に静脈注射された

因子とコア、腕輪をフォーマツトして、リンクしてるんだ。人体に入った因子は、その人の影響を受けてほんの少し変化する。そのほんの少しの変化で、コアはそのゴッドイーターを仲間、というか自分自身かな？ そう認識するんだよ」

「へえ」

その辺もマガタマに良く似ているな、とシンは一人思う。

シンがトウキョウにいた頃、力を求めた悪魔やマネカタに、スキルを絞り尽くした自身のマガタマを貸したことが有る。それで仲魔が強化されるのであればと思っただけだが、悪魔は自身のマガツヒを吸い尽くされて塵となり、マネカタは元の泥に戻ってしまった。

理屈は未だによく分かっていないのだが、人修羅の血肉^{もの}となったマガタマは他の誰にも使えない、ということだけは確かだ。

そしてその禁を犯せば存在^{マガツヒ}の源を失い絶対の死が待っているということも。

「ああ、ごめんね。君の神機はこっち。A-13が君のパートナーの住所になるから。覚えておいてね」

「パートナー？」

思わず問い返すシンに、リツカはゆつくりと大きく頷き返した。

「うん。ゴッドイーターにとって神機はアラガミと一緒に戦ってくれる大切なパートナーなんだ。この子たちは言葉は喋れないけど、大切に、信じて、育ててあげれば、きっと君に応えてくれる」

台座のロツクを解除し、シンの手を導いてそこに置かれた神機を握らせたリツカの面貌には、まるで愛子を慈しむ母親のように柔らかな笑みが浮かんでいた。

0 2 4 「あ——」

「間雑^{かんざき}シンだな？」

アナグラのエントランス。

フェンリルの職員共用ターミナル、ゴッドイーターに任務を発行するカウンター、簡易ブリーフィング用のソファとテーブル、居住フロアをはじめとする各施設への直通エレベーター、職員食堂への扉、そして出撃用ゲートのあるそこに、三人のゴッドイーターの姿があった。

一人は間雑シン。新人ゴッドイーターとなった彼は、支給されたアナグラ職員の制服を身にまとい、肉厚で長大な刀身を持つ白兵式神機——バスターブレードという規格らしい——を担いでいる。

一人は雨宮^{あまみや}リンドウ。若くして既にベテランの域にある青年は、火のついていないタバコを啣え、シンの様子をじつと伺っている。

そして最後の一人は——

「ふん。面構えだけは一人前だな」

「こいつはそれだけじゃねえですよ、姉上」

「任務中は隊長と呼べと何度言ったら……」

——そう言つてリンドウを小突いたのは、ひどく扇情的な服を身にまとつた女だつた。

彼女もまたゴツドイーターであるらしい。名工の手になる彫像の如き整つた顔立ち。大きくウエーブする豊かな黒髪は腰のあたりまで伸びている。左手にはバズーカ砲より太くゴツイ銃身の遠距離型神機を担ぎ、空いた右手でリンドウの頭を押さえつけている。

だが何より目を引くのはその装束だ。

ライダースーツのようにピッチリと身体にフィットした白い革の着衣は、シンの寂しい語彙を漁れば、まるでそういうプレイの女王様のようなのである。胸元は大きな双丘を見せてつけるかのように開き、ジャケットの背面とパンツの膝から上側面は深いスリットから肌を露出し、かろうじて編み上げで留めているような有様。いかに遠距離戦メインとはいえ、それで戦うつもりなのかと、シンは脳内で常識人ぶつたツツコミを入れる。リヤナンシーあたりと気が合うかもしれない。

「私は雨宮ツバキ。第一部隊の隊長だ」

* * *

「で、昨日の今日で、早速お仕事つてわけだ」

アナグラから出て悪路をゆくこと約四十分。かつては多くの人間の生活の場であった都市、今ではゴツドイーターたちの狩場を見下ろす高台に、三人の人影はあった。

「贖罪の街」と呼ばれるその狩場の中心には、大きな教会が建っている。かつては美しい姿で人々の目を楽しませていただろうその白亜の建物には、アラガミの侵攻から逃れた近隣の人々が、救いを求めて集つたらしい。そして人間は、この地上にはもはや、慈悲ある神の恩寵カミなどありえないということを思い知らされたのだ。

その周囲は不自然なほど何も無い。

それは群れ集つたアラガミたちが、隠れ潜む人間を残らず喰らうために周囲の建物を潰しまわり、また逆撃を食らわせようとした自衛軍の兵器によつて焼き払われ、瓦礫も残らず吹き飛ばされた結果らしい。

無論、教会に隠れていた人々は焼夷弾の熱で全滅している。

そうして吹き飛ばされた瓦礫がこのエリアに通じる道路のほとんどを封鎖し、今では時折小型のアラガミが侵入するだけの、比較的 안전한エリアとなつているらしい。

あくまで比較的、というだけなので人が住めるほどではないが。

だがフェンリルにとつてはアラガミ素材やコアの回収に手頃な狩場となっていて、新人ゴツドイーターの研修や、小物狩りのトレーニング場として利用されているという。転んでもただでは起きないとはこのことか。

「気負う必要はない。愚弟の言葉が確かなら、このあたりのアラガミなどお前の敵ではあるまい。だが油断はするな。その神機も、腕輪も、それなりに手間のかかったものだ。忘れるなよ」

ツバキは厳しい表情で警告する。

だが実際のところ、彼女もシンがこのあたりのアラガミに負けるとは思っていない。彼の戦いぶりを語った愚弟を^{リンドウ}どこまで信用してよいものかは分からないが、少なくとも身体能力の高さは折り紙付きだ。

「我々は手出しはしない。あくまで緊急事態に備えて同行しただけだ」

「神機の使い方を教えてやらにやならんでしようが」

「それはお前の仕事だ」

「へいへい。承りましたよ、人使いの荒い姉上さま」

軽口を叩くりンドウの頭に、無言の拳が振り下ろされた。

神機の使い方として【装甲】と【捕食形態】という二つの変形について簡単に説明したリンドウは、

「あー。ヤバそうだったら割り込むから、とりあえず一体狩^やつてみてくれ」と気軽に提案し、シンはそれに黙って頷いた。

* * *

「作戦目標は贖罪の街に発生したアラガミ、コクーンメイデンの除去とする。私からの命令は三つだ。死ぬな。死にそうなら退け。退いて隠れてオペレータの指示を待て。以上だ。分かったら返事をしろ」

シンが装甲車^{キャリアー}を待機させた崖の上から飛び降りるなり、耳につけた通信機からツバキの声がした。多少ノイズ混じりだが、特に問題は無さそうだ。

「了解」

「では行け」

「間薙シン、出撃する」

この時、シンの心はちよつとばかり浮かれていた。映画やアニメでしか見たことがないような、軍隊めいたやり取りに。そして作戦に従事するという自分の立場に。

特にそうしたやり取りに思い入れがあったわけではない。ただ薄れかけている過去の記憶が刺激され、失いかけていた人間性が反応したのだろう。

三日間という非常に短い時間ではあったが、いくつもの新たな出会いと遭遇した。ポルテクス界にあつて未だ人間性を保っている彼らとのコミュニケーションは、興味深くも有つたし、刺激的でも有つた。それは彼の目的にも沿つたものだった。

だが、それを得るために抑圧していたものも有つたのだ。

たつたの四日ぶりというアナグラの外は、その時のシンにとつては非常に開放感に溢れたものだった。

だからちよつとばかり浮かれてしまつたのも、仕方のないことなのだ。

後にこの時のことを尋ねられた彼は、そう自己弁護したという。

そして浮かれ気分のシンは、およそ自制というものを忘れた速度で贖罪の街を駆け抜け、あつという間に目的のアラガミ、生きた鋼鉄の処女の眼前に到着する。

そしてコクーンメイデンがその四方八方に鋭いトゲを放射するより前に、手にした神機を振り下ろした。

次の瞬間――

パンツツ

と、音速の壁を超えた音が響いたかと思えば、砂煙が贖罪の街一面に舞い上がって視界を塞がれてしまう。

だがそれ自体は、大型のアラガミとやりあえば発生する状況だ。リンドウにせよツバキにせよ慣れたもので、リンドウがすばやく神機のシールドを展開すると、その影からツバキがスコープを覗き込んで状況確認を急ぐ。状況によってはそのままアラガミを狙撃し、あの規格外の新米を救助しなければならない。

「あ——」

だがスコープ越しにツバキの視界に飛び込んできたものは、柄の部分を残して原型を留めていない、シンの神機だった。

#025 顛末

シンが神機を一振りで破壊した。

その記録映像がアナグラへ持ち帰られると、即座にシツクザールによつてその映像は没収され、同行したリンドウ、ツバキには箝口令が布しかれることとなつた。

それが広く知られることになれば、問題となることが明らかだつたからだ。

一つは神機が簡単に壊れたということ。

神機の強度はゴッドイーターたちの扱うり所である。なにしろそれ無くしてアラガミと対峙することなど不可能なのだから。

強力な衝撃を受けることで装甲板シールドの展開機構が上手く動かなくなることは有る。そこが最も複雑な機構であり、そして最もダメージを受けやすい構造だからだ。だが神機そのものが完全に破壊されたことは、アナグラの記録に存在しない。ゴッドイーター自身みが死亡した戦いの中ですら、神機は刀身や銃身部分がひしゃげようと、コアが剥き出しになるほど損壊したことはなかった。

それほど丈夫な神機だからこそ、自分の命を預けるに値する。頑丈な神機が有ればこ

そ戦える。そうやって恐怖を押さえ込んで戦場に立つ戦士たちは、決して少なくは無いのだ。

そしてもう一つは、アラガミが蒸発したという現象であった。

これまでアラガミはいかなる武器によっても完全破壊することが出来ず、神機という他のアラガミに捕食され、その核を抜き取られることで初めて自壊することが確認されていた。ダメージを与え、行動不能に追い込むことは出来ても、オラクル細胞は接地面から大地に浸透して退避。別の安全な地点まで移動して再度結合するものと予測されていた。故にゴッドイーターという、神を喰らう者が重用されてきたのだ。

だが今回、シンはただ超音速で神機を叩きつけたのみ。それによってアラガミは、地面に浸透することなく、まだその破片を撒き散らすことなく蒸発し、消滅した。コクーンメイデンを構成していたオラクル細胞がどうなったのかは確認が取れていないが、もしも超音速で神機を叩きつけることでアラガミを、ひいてはそのオラクル細胞を消滅させることが可能であるのならば、アラガミへの対処も様々な可能性が考えられる。

そしてそれは、ゴッドイーターの価値を毀損しかねない大きな危険をはらんでいた。

* * *

「あーもうホントに！ やつてくれちゃって！ もう！」

柄と二つの核のみとなったシンの神機を前に、ロボットアームを操作しながらリツカはイライラをぶちまけた。

「……まで完膚なきまでに壊やっしてくれたのは君が初めてだよ！ 防御は装甲でつて教わらなかつた!」

シンはふと、教わらなかつたことにしてリンドウに責任をなすりつけることを考えた。またリツカとの掛けコ合いトが見られるかと思つたからだ。だが今回は冗談では済まない事態のようだし、流石にそれは非道すぎるといふものだろうと心を改め、黙つて首肯する。

「ヴァジュラの口に突つ込むとか！ 神機バトナは大事につて言つたでしょ！ ……まあ、それで君の身が護れたんだかし、この子も本望だとは思うけど。反省してよね！」

そう。神機の全壊という一大事に、シツクザールは即座にカバーストリーをでつち上げていた。

即ち「シンは突如現れたヴァジュラ——巨大なケルベロスのようなアラガミ——から身を護るため、その口に研修用の神機を突つ込み、神機を奪われた。ヴァジュラは同行

していたツバキとリンドウに撃退されたものの、彼らの攻撃が偶然、ヴァジュラの啞えていたシンの神機に命中したことで、神機は破損してしまった」

……そういうことになっている。

期待の新人では有ったものの、流石に研修初日の新人が大型アラガミを圧倒できる、などと考える人間はアナグラにはいなかった。むしろ彼の不運に同情する人間のほうが多かったことは、彼にとつても、また秘密を守らなければならないシツクザールらにとつても幸運であつた。

ちなみに、ゴッドイーターは研修が終わるまで、研修用の弱い神機を貸与されることとなつている。これはかつてゴッドイーター化した者の一部が、アナグラに反旗を翻した事件を教訓としたもので、対外的には機密事項とされているが、アナグラ内では概ね知られていることだ。それもまた、今回のカバーストーリーに真実味を付与していた。

ともあれ、その後二時間ばかり続いたリツカのお小言を、シンは身じろぎもせず聞いていた。人間の強い感情は、多くのマガツヒを生み出すものだ。その甘露を全身で味わいながら、彼はこの茶番にしばらく付き合っていた。

* * *

シツクザールの執務室で、三人の研究者が声を潜めて話し合いを続けていた。話題は「間難シンの神機の設計」である。

アラガミを一体潰すために神機をいちいち壊されてしまうのでは、あまりに割に合わない。もちろん万が一、巨大なアラガミが現れてこのアナグラが襲撃された際には、最終兵器として使う分には十分以上のコストパフォーマンスと言えるだろうが。

それに記録を見た限り、彼の一撃はアラガミの核^{コア}すら消し飛ばしてしまつていた。アラガミの核は貴重な研究材料であつて、確保できるならばそれに越したことはない。ならば彼の出撃は最後の最後ということになる。

もしも普通のゴッドイーターに対処できたなら？ 核を手に入れることができたなら？ と考えれば、いかにアナグラの危機と言えども、そう気軽に出撃させることは出来ない。人類の叡智の結晶たるフェンリルにとつて、それがどれほど貴重なものかは計り知れないのだ。場合によっては極東支部と引き換えにしても手に入れたいと考えるかも知れない。

そうした命令に、シツクザール支部長やサカキ博士が従うかはまた別の話であるが。だが、シンの身体能力をこのまま捨て置くのもまた、あまりに勿体ない。

故にこそ、彼の使用に耐えうる神機が——彼がその他のゴッドイーターと同じように戦い、アラガミを下し、その核を捕食できる。そんな神機の開発が求められていた。

「で。要は強度不足……ですよね」

「そうだ。従来の神機のようにパーツごとの強度が異なる場合、どうしても耐久性に限界が生じる。それでは一定以上の負荷、少なくとも彼の使用には耐えられない。と、考えられる」

機械油で頬を汚し少女が問えば、白衣の男がコピー用紙に出力されたチャートを指差して答える。

「振り抜く方向が常に一定ならともかく、ゴッドイーターの蛮用に耐えうるものをと考えると一体構造にするしかない。だが」

「それは僕の仕事だね」

白衣の男が次の問題を唱えれば、黒衣の男が眼鏡をクイ、と上げて笑ってみせた。

「実は既に実験中の素材があるんだが、こいつでテストしてみてくれないか?」

「どんな素材ですか?」

「アラガミさ」

第三章 ビジョンクエスト編

#026 生きた神機

気が付けば犬だか狼だか分からない、赤茶けた毛並みの獣が荒野に行儀よく座っていた。

——この地は黒いのだな。

獣が喋った。

それが人語であるのかどうか。いや、そもそもそれが音であるのか、あるいは思念波テレパシーのような別の手段であるのかも、よく分からない。ただ人修羅であるシンには、その意志が理解できるというだけのことだ。

倒壊したビル群を見上げ、獣は淡々と語り続ける。

——石造りの高い建物ビルディング。まるで異国の祭祀場ストーンヘンジのようだ。

赤茶けた獣は膨らませた頬から、ぷう、とビル群に息を吹きかける。
ビル群はサラサラと崩れて砂と化した。

——大地に黒い石で線を引いていたのか。

今度は地面を這うように敷かれた、朽ちかけたアスファルトの路面に視線を落とす。

——これでは息苦しかろう。だがそれもいずれは朽ち果て、大地へ還るのだ。

獣が前足でアスファルトを軽く叩けば、それは見る間もなく崩れ去っていった。

——万物は大地ほしより生まれ大地ほしに還る。

——喰らい喰らわれ、いずれは大地で一つになるもの。

——なのなにゆえに何故、小さき生命に気を留めるのか。

——なのなにゆえに何故、今さら人の世に帰ったのか神ヒトシユラ靈。

——なのなにゆえに何故、今さら人に目を向けるのか魔ヒトシユラ帝。

——何故……

——何故……

一言ごとに獣が増えてゆく。

いつの間にか、見渡す荒野を行儀よく座る獣が埋め尽くしていた。

——なにゆえに　いまさら　ひとのむれにかえつた　ひとしゆら

* * *

ひとまず神機のメンテナンス——というか新造——が終わるまで、整備班への出向扱いとなった間雑シン。神機大破は不慮の事故というカバーストーリーや、本来ならば訓練生としてみっちりツバキにしごかれていた時期であること、彼が奇人博士サカキに目をつけられていることから、それほど悪感情が生じることもなく、彼はただ整備局の片隅に座っていた。

整備班の面々には床にじかに腰を下ろし、行儀悪く胡座をかいていると思われていたが、実のところそれは半跏趺坐はんかふざ——あるいは菩薩座とも——という禅の作法であった。シンは特に意識しているわけではない。ただ座るとそうなってしまうだけのことだ。

眠るでなく、起きるでなく。

何者にも気を奪われず、されど何者を拒むこともなく。

あるがまま、融通無碍ゆうずうむげの境地にある時、シンは自然とそうした態さまを見せる。

だが、外から見れば、ただ眠そうにしているようにしか見えない。

それでも彼は放置されていた。

神機をオーバーホールに出したゴツドイーターが、そうして手持ち無沙汰にしている光景は、アナグラでよく見られるものだったから。

決して近寄りがたいとか、たまに体を揺らしてなんか不気味とか、そういう理由ではないはずだ。

ないはずだ。

* * *

神機を振り抜き、超音速で分解した瞬間の光景は、なかなかの見ものだったと思い出す。

音速の壁を突破し、あの悪趣味な処刑道具めいたコクーンメイデンに当たるまでの

間、神機のコアは、神機の崩壊を防ぐべくその形態を自ら変えて刀身を包み込もうとしていた。

だがコクーンメイデンの頭部（？）に当たった瞬間、コアはアラガミによる侵蝕を防ぐために刀身の接触面に集中し、それまで刀身の分解を抑え込んでいた力が消失、刀身はバラバラに飛散してしまう——ちなみに一番大きかった刃の部分は、コクーンメイデンを一刀両断にしてもなお止まらず、超音速の衝撃が巻き上げた砂埃の中、大地を切り裂きながらその亀裂へと消えていった。

多大なマガツヒを消耗した神機のコアは、次の瞬間、これまた自ら勝手に切断したばかりのアラガミのコアを捕食し、一瞬でその周囲に飛び散ろうとしていたアラガミの肉片まで、蜘蛛の糸のように細い食指を、全方位に投網のように伸ばして食らいつき、瞬時にコアへと戻ってゆく。

全てをやつてのけるまでにかかった時間はほんの数秒のこと。だが刹那——即ち七十五分の一秒の動きすら認識しうる混沌王ヒトシユラの目は、その全てを克明に見取っていた。

シンの訓練はビデオ録画すると言われていたので、今頃はきつと黒い狂的眼鏡マッドは大喜びに違いない……と、事情を知らないシンは盛大に勘違いしていた。

爆心地に居た彼には克明に見て取れたその光景は、外からは砂塵の壁に遮られて録画

できていなかったというのに。

これまでシンは、神機と腕輪は合わせてマガタマのようなものだと思っていた。だがしかし、どうやら思い違いをしていたらしい。

考えてみれば、マガタマが自身の姿を変生させる捕食形態プレデターなど、単なる力の結晶たるマガタマの機能からは逸脱している。それもこのボルテクス界の特性かと思つたのだが、マガタマ自身が生きるために行動するとなれば、それはマガタマではなく一個の悪魔アックマと考えるべきではなからうか。

ふと興味が湧いて、シンは虚空から宝重ほうちゅう・万里の遠眼鏡を取り出した。

〔来歴解析「アナライズ」〕の権能は、かなり早い段階で手放してしまっているため、これに頼るしか無い。他者の情報は生き残る上で重要なファクターではあるが、力を蓄えた悪魔はその力を維持するため、より強固な概念——即ち有名な悪魔——へと姿を変える。

有名であるということは情報が多く仕入れやすいということだ。

ターミナル転輪鼓に記された旧文明の記録、アマラ宇宙の情報を手繰れば、弱点や戦術などの大まかな情報は手に入る。故に最初期に手に入れた「アナライズ」の権能は、旅の途中で他の権能に塗り替えてしまつていった。

自身の考えが正しければ、この宝重が来歴を教えてくれるはず。
シンは右目に望遠鏡を当てると、近くの台座に固定されたひとつのピストル第一世型神機を
覗いてみた。

* * *

「何してるんですかねえ？」

「さあ、なあ？」

「あれは？」

「ありやあ確かレイチエル・アダムスの……」

「ああ、あのヴァジュラとの初の交戦記録を残したっていう」

「酷いもんだつたらしいがな」

0 2 7 白昼夢 (1)

神機保管庫の片隅で、一人ボケつと座り込んだ新人ゴッドイーター・間薙シン。

ふとした思いつきから、シンは宝重・万里の遠眼鏡を取り出すと、台座に収められた拳銃型神機を覗き込む。

それが概念存在であるのなら、万里の遠眼鏡は必ずそのものの由来を、能力を暴くはずなのだ。このボルテクス界がどうであれ、オウガテイルは看破できたのだ。この宝重がガラクタになったわけではない、はずだ。

だが、万里の遠眼鏡が見せた光景は、シンの見慣れたものとは大きく異なっていた
……

* * *

++++【西暦二〇五八年 極東地区】++++

わたしの名はレイチエル・アダムス。

フエンリル極東支部で、主に偵察任務を行うゴッドイーターだ。

通常業務の一環として、今、わたしは贖罪の街に出撃していた。

かつて横浜市と呼ばれ栄えた街は、今や贖罪の街と呼ばれる人類の悔恨の地であった。多数のアラガミを殲滅するため、カミを信じた人間たちを犠牲にしたこのエリアには、彼らの棺桶を思わせるアラガミ・コクーンメイデンがよく現れる。

コクーンメイデンはアラガミの中でもユニークな存在だ。それは伝説の拷問道具よろしく簡素な人形のような姿をしていて、出現した場所から一步も動かず、ただ獲物を待ち伏せする。そして不用心な生物が前面を通過するとレーザ^{光線}を照射したり、あるいは背後から接近するとハリセンボンのように全方位に三メートル超の棘を伸ばして奇襲し、弱った獲物を溶解し吸収する。

ドクター榊は「自己進化を行うアラガミとしては移動能力を持たないなど完成度の低さが顕著なため、もしかすると進化途中のサナギのようなものなのかも知れないが……」と前置きをした上で、「現状確認されているコクーンメイデンは、食虫植物の特性を発現したアラガミではないか」と分析していた。

その分析が正しいかは知らないが、コクーンメイデンは放っておくと雑草のようにね

ずみ算的に増殖するため、ときおり間引かなければならない。完全に駆除しないのは、彼らが場のオラクル細胞を同型種なかまの増殖に消費することで、大型のアラガミ発生の予防になる、と予想されているからだ。

そんなわけで、コクーンメイデンの調査と間引きは、専ら戦闘力の低い偵察班わたしたちの仕事となつている。

ちなみにわたしの神機は拳銃型。長銃身の太ぶりなハンドガンを模したこの神機は、反動が大きくゴッドイーターの腕力でも連射には不向きだが、静止時の命中率は高く遠距離から狙撃に適しているため、コクーンメイデン相手ならば安全に対処できる。

偵察班にとってコクーンメイデン相手のミッションは単なるルーチンワークであり、手軽なくせにアラガミ相手のため危険手当も出るという、ちよつとしたボーナスミッションだった。

……そう。

今回のミッションも、予定通りであれば鼻歌交じりに片付けられるものだったはずだ。

しかし今、わたしが対峙している危険は、そんなものではなかった。

『パターン識別……アラガミ・ヴァジュラ！ よくやった！ 新型だ！』
 ナビの喜色に満ちた叫び声が、インカム越しにわたしの耳朵を叩いた。

高層ビルだった瓦礫の山の上に、見たこともない巨大な四足獣型のアラガミが、王者のごとく屹立し、悠然とあたりを睥睨している。

ナビゲータによれば、まだ基礎情報すら明らかではない新型のアラガミ。

ユーラシア大陸南東エリアで発見されたが、同エリア支部に遭遇の一報を入れたゴツドイーター部隊は壊滅。後日辛うじて回収された被害者の遺体の一部から、それが雷撃を使うらしいことが予想され、同エリアに古くから伝わる神の武器の名——ヴァジュラ（本来の持ち主が聞いたらどんな顔をするのやら）——と命名された存在。

わたしも名前だけは知っていた。

調査のため半月前に出撃した同僚は、未だにアナグラに帰投していない。

できればさっさと帰投したいのだが、わたしは偵察班で、あいつは未調査の新型だ。次にナビから来る指示は分かりきっている。「可能な限り情報を収集せよ」だ。

ああ、遂にわたしの番が回ってきたかと空を仰ぎたくなつた。

だが、その予想は斜め下に裏切られた。

『レイチエル君。そいつは新型だ。しかもほとんど未調査の。この意味、分かるね?』

——この卑怯者が……ッ!

大型アラガミの情報は、いつだって十名以上のゴツドイーター^同の生命と引き換えに得てきたものだ。普通に考えれば、たった一人放り込んだって大した情報は得られないだろう。それでも新型との遭遇そのものが非常に希少であるため、これを好機とし、わずかな可能性に賭けて、生きては帰れぬ命令せざるをえないのだ。

フェンリル職員に情報不足の恐ろしさを知らない者はない。わたしも職員教育の中で繰り返し教えられてきたし、実戦に出れば知識の重要性は嫌というほど思い知らされるものだ。

アラガミ出現初期にはあのコクーンメイデンの自然増殖を放置して大量発生を許し、中米エリアの都市^{ネスト}を放棄させられたことすらあったそうだ。コクーンメイデンは増殖することで互いの死角^音を補完し、やがて全方位をクロスファイアポイントとしてしま

決死の命令をするのは誰だつて嫌だろう。だが、それでも命令しなければならないのが指揮官の仕事である。とはいえ指揮官の最優先ミッションを除き、ほとんどのミッションはナビが指揮官代理とされている。

ゴッドイーターは現場で力を尽くすが、重要な判断についてはナビが決断し、責任を持つ。それが通例である。なのに命令される側に提案させ、あくまで自分は現場の判断を尊重した体を取り繕おうなどは酷い責任転嫁、度し難い怠慢ではないか。

『レイチエル君、聞いているのか？ ……おい』

わたしはインカムを握りつぶして放り捨てると、再びあの大型アラガミの様子を窺う。

瓦礫の上に雄々しく屹立する姿に、わたしはどこか神々しいもの、触れ得ざるものを感じる風格を感じていた。

* * *

それからヴァジュラとわたしの長い我慢比べが始まった。

ジリジリと照りつける太陽の下、このわずかな遮蔽に隠れてヴァジュラを観察する。

ネコ科の猛獣をベースに、頭部には硬質化した流木のように太く節くれだつた角らし

きものを、また顔の側面から顎にかけてはタテガミともヒゲともとれない毛を生やしている。

口元から伸びる二本の長く鋭い牙によって口角が押し上げられ、まるで不敵に笑っているようにも見える面差しは恐ろしい。

いかにも力の有りそうな太い四本の脚先には、大地をしつかりと踏みしめる大ぶりの足があり、それぞれがこれまた硬く鋭そうな四本の爪を備えている。あんなものが振るわれれば、人間は愚かゴッドイーターとてただでは済まないだろう。

肩のあたりからは薄く柔らかい布のような部位が、腰のあたりまでを覆っている。あれはもしや翼か。だとするとあの巨体が飛行するのか。わたしはそんな悪夢を想像する。

瓦礫の山の上で悠然と構えていたヴァジュラは、そんなわたしの視線に気付くこと無く、また周囲に生物の姿が見えなかったためか、退屈そうに腰を下ろし、寝そべっている。その姿はかつて記録映像で見た「トラ」とかいうネコ科の猛獣を思わせたが、恐ろしさばかりが前面に出ていてちつとも愛嬌が感じられない。

わたしは注意深く観察した情報を、まずは文字データの状態でアナグラに発信する。データ量の少ない文字情報は一回の発信時間が極めて短いため、電波を察知するアラガ

ミにも発見されづらい利点がある。比較的安全が確保され、文章を作成する時間がとれる状況である場合の第一選択だ。

続いて光学情報。写真を撮ることを考える。

ただしこれにはファインダーを向ける必要があり、当然、太陽光が反射すればアラガミに察知される危険が伴う。これは慎重に行わなければならない。

ヴァジュラのみならず他のアラガミにも気付かれないよう、物音を立てず、息を殺し……

観察情報を可能な限り文字に起こして情報パッケージを幾つも作成しながら、じっと太陽の角度が変わるかヴァジュラが移動するまで待つ。

それから約一時間。ヴァジュラは小動こゆるぎもせず、わたしは逃げ出したくなる気持ち堪えてじっとその遮蔽に隠れていた。

アナグラに居れば、食事でも取りながら仲間とちよつと歓談わしゃべりするだけで過ぎてしまう一時間。しかし荒野に居れば、何度も運試しをしなければならぬほどの長い時間だ。

その一時間を、わたしは耐え忍んだ。

照りつける太陽の熱にも、にじみ出る汗の不快感にも、強い緊張状態のせいでもよお

した生理現象にも、もしかしたら今動いても気付かれないんじゃないかという慢心にも……そして今日に限って「威力偵察してみない?」、「あれくらいブン殴れば黙るんじゃないか?」、「強くても神格ケルペロス程度だろ」などと無責任な提案を囁いてくる自分の脳みその声にすら抗って。

そうしてようやくヴァジュラは動き出した。

幸運にもわたしに背を向けるようにして、瓦礫の山の向こう側へと下っていくではないか。

——あとしばらくの辛抱だ。

あの巨体が山陰に隠れたら、わたしもこのちっぽけな瓦礫の遮蔽から出て、作成した文字情報パッケージを発信しつつ、次の死角へと大急ぎで移動しなければならぬ。

そのプランは何度も何度も脳内でシミュレーションしていた。そしてそれを実行に移そうとした。

だが、わたしたちはまだ知らなかったのだ。

自己進化を繰り返すアラガミという存在の本当の恐ろしさを。

人間との戦いの中、彼らも学習するということを……

#028 白昼夢 (2)

——なんなんだこれは？

整備局の神機保管庫の隅に座りこんで万里の遠眼鏡を覗いていたはずのシンは、いつの間にやら先日行つたばかりの贖罪の街とかいう廃墟に立っていることに気がついた。

しかも耳元から中年男の喧しくがなり立てる声が聞こえる。神経の細さと傲慢さを兼ね備えた声だ。贅沢と金勘定が好きに違いない。きつとオーカス思食の豚やメルコム魔界の徴税人と話が合うだろう。

『レイチエル君。そいつは新型だ。しかもほとんど未調査の。この意味、分かるね？』
——さっぱり分かん。

そもそもレイチエル君とは誰なのだろう？

この声の主は誰と話しているつもりなのだろうか。

声を払いのけるように軽く手を振るが、そちら側には誰も居ない。そうしてようやく、それが耳に付けた通信機インカムから聞こえていたことに気がついた。

五感のすべてがどこか作り物めいていて、まるでマネカタの体にも入ってしまったように感覚が鈍い。

「このクズがー」

思わず口をついた言葉も、どことなく自分の意志からズレているような気がする。クズと罵られた耳元の通信機が、先程に輪をかけて何かをがなり立てている。

——やかましい。

騒音の元を親指と人差指で摘み取ると、そのまま手のうちに握り込む。今となつては貴重品であるはずの石油製品の外殻はあつさり割れ、中の部品もろともに圧壊したそれを無造作に投げ捨てた。

静かになった耳元に満足すると、シンは改めて現状確認を始める。

そしてすぐに気がついた。

敵意でも害意でもない、ただの食欲が周囲に撒き散らされていることに。

何者かとその発信源を見れば、「流木のように太く節くれだつた角を生やした巨大なトラ」とでも言おうか、いまいち言葉にしづらい合成獣めいた動物が、コンクリートの瓦礫の上に居座っていた。

かのボルテクス界ではお目にかかったことのない悪魔だ。

やはりこちらの悪魔は何かが違うらしい。

妖獣か、魔獣か、それともまさかの神獣か。

獣系の悪魔は、見るからにその格レベルにふさわしい風体をしているものだが、だとするとアレほどの程度だろうか？ 地獄ケルベロスの番犬ベロスくらいはあるのか、それとも見掛け倒しのわんオルトロスちゃんだったりするのか。

どんなものか興味が湧いたシンは、万里の遠眼鏡で見てもようと考えたのだが、そこでフと気がついた。

——人おれ修羅の手、どこいった？

いかなる障害をも打ち砕いてきた無骨な鉄拳が、見れば運命モイの三女神イイどものように細く荒れた手指に成り果てていた。

* * *

——意識だけアマラ回廊に落ちたようなもんだな。

シンは置かれた状況を、そう理解した。

元よりボルテクス界では理解できないことがよく起こるのだ。そして理解不能な出来事は、概ねアマラ回廊の気まぐれか、金髪野郎ルイ・サウアーの悪ふざけ、さもなればハゲ頭の仕業

であった。飽きるまで付き合ってやって、気に入らなければ後で殴り飛ばしてやれば良い。

あの戦いの日々の中でも、ターミナル転輸鼓を通じて助言を寄越したあの男に「そういうものだ」と言われてしまえば、「そうなのか」と納得するしかなかったのだし、今さらだ。

シンはあの長かったのか短かったのか今となっては判断のつかない戦いの中、そう理解あきらめしていた。

そんなことよりも現状把握だと、シンは気持ちを入れ替える。

なにか出来て、なにか出来ないのか。それを理解しておかなければ、いざというときに殴り飛ばせないではないか、と。

まずはアイテム宝重。

それらを取り出すことは出来なかったが、使おうとすれば使えるようだ。実際、万里の遠眼鏡を握るように右手を筒状に丸め、覗き込んでみたら大トラの名前が分かった。名を「ヴァジュラ」と言うらしい。

あの愛らしさすら感じられる単純明快なオウガテイルと違って、由来が良く分からない。誰が付けたのだろうか？

ヴァジュラといえば、たしか雷帝インドラの武器の名前だ。雷神トールのミヨルニルみたいなものだろうか。シンはインドラとは直接の面識こそ無かったが、ヴァジュラは仲魔のシヴァが持つていたので見せてもらったことが有る。その記憶と比べてみても、全然似ていないと思うのだが、一体なぜそんな名前になったのやら。

次に権能^{スキル}だ。

シンが身に携えていた二十五のマガタマの存在は確かに感じ取れるし、時間が経つにつれて馴染んできた身体の能力は生身の時とほぼ変わりなさそうなのだが、実際に行使しようとしてもマガタマは一切反応しなかった。

無意識下に行使できる【貫通】や【食いしぼり】あたりがどうかは分からないが、【至高の魔弾】や【地母の晩餐】、【気合い】、【雄叫び】あたりも反応がない。

だがこれについては思い当たる節があった。思うように肉体を動かせないことと、関係があるのではなからうか。

意識だけがアマラ回廊に落ちたような状態。

シンがそう理解したのは、急に場所を転移させられたとか、見知らぬ状況に投げ出されたとか、それだけが理由ではなかった。

肝心の肉体が、自分^{シン}のものではなかったのだ。

肉体の持ち主の名前はレイチエル・アダムス。

どうやら極東支部に属するゴッドイーターのようだった。

——道理で動きにくいわけだ。

自分のものではないだけでなく、それが骨格から違っているのだから、動きにくくても当然だ。しかもこの肉体にはレイチエル自身の意識もあり、優先権はそちらの方が強いらしい。いかにシンが動きたいと思っても、レイチエルがそれを拒否すれば指一本、動かすこともままならない。

お蔭でシンはこの一時間ばかり、ずっと瓦礫の影に隠れながらあの魔獣を眺めているしかなかった。

実のところ、初遭遇のヴァジュラに興味のあったシンは、あれやこれやとレイチエルを唆してはいたのだが、そちらはまるでナシのつぶて、レイチエルは断固反対、聞く耳を持たないとばかりにシンを無視していたので仕方がなかった。

もしもここに金髪の老人が居たなら、人間の耳元で囁き、唆して悪事に誘うなど、悪魔^{ルシファール}の所業そのものではないかとため息を漏らして首を振ったことだろう。

* * *

だがまあ時間をかけたお陰で、分かったこともある。

ヴァジュラとやらがあんな外見をしている理由だ。

あれには食ったモノの情報が、そのままに残されている。

およそ地上よりも魔界の方がお似合いなあの合成獣^{キマイラ}めいた外見は、これまで食ってきたモノの中からあれやこれやと使えそうなものを継ぎ接ぎ^{パッチワーク}にしたものらしい。だが混ぜものが多すぎて、もはや個としての来歴を知ることが出来なかった。たぶんオウガテイルの由来が知れなかったのも、そのせいだろう。

だからどうした、と思わなくもないが、分からなかったことの一つが分かってスッキリしたので良しとする。

ツギハギのイメージから、シンはかつて出会った気弱な男のことを思い出していた。自己主張の仕方が分ならず、加減を誤り暴発した心優しい少年。まあ同族殺しはやりすぎだったと思うが、偽善者ぶった耳たぶ男よりは万倍も好感の持てる男だった。

彼も既にシンの仲魔であり、悪魔全書にもその名が記されている。思い出して召喚しようとしてみたが、やはりというか彼が現れることはなかった。

あのヴァジュラとか言うアラガミとの我慢比べは、都合一時間ほど続いただろうか。

しばらくはキョロキョロと周囲を警戒するように見回していたが、レイチエルが動かないので飽きたのか、瓦礫の山に座り込んで、眠るように頷垂れたり、欠伸でもするよ
うに体を反らせたりするようになった。シンは隙アリと思つたが、レイチエルはその挙
動の一つ一つをメモに取るだけで行動に移そうとはしなかった。

ヴァジュラはこちらにチラリと視線をやると、口の端を持ち上げて牙をむき出しニヤ
リと笑つた。そして立ち上がつてもう一度伸びをすると、わざとらしく瓦礫の山を、わ
ざわざもと来た方向へ、つまりレイチエルの反対側へと歩き出した。

合わせてレイチエルも、この機を逃すまいと動き始めた。

だがデータを送信するため手元の機械を操作する刹那の間、ヴァジュラから視線を逸
してしまつていたレイチエルは、魔獣の笑みに込められた意図を見落としてしまつたよ
うだ。

フェンリルの歴データベース史に残る 英雄 〃 レイチエル・アダムスの受難だいかつやくは、これより始まる。

#029 死闘

先手を取ったのは巨獣^{ヴァージュラ}だった。

シンはその動きに気付いてはいたものの、看過することしか出来なかった。

なにしろ彼は今、あくまで彼女^{レイチエル}というゴッドイーターの肉体を介して世界を覗き見ているに過ぎないのだから。

インカムを潰して放り捨てたり、ヴァージュラへの先制攻撃を阻害され続けたことから、シンは現状についてそう判断した。おそらく肉体の主導権は今なお彼女にあり、シンには彼女と同調^{シンクロ}するか、彼女の自我が働いていない隙に割り込ませることでしか操縦出来ないのだろう。

諦めたかのごとく瓦礫の山の向こうに姿を消したヴァージュラは、密かに大きく迂回して彼女の死角へと回り込んでいた。そして彼女がアナグラに情報を送信しようとするたびに切らした警戒の間、そこに巨獣はその図体に似合わぬ速度で切り込んできたのだ。

だが不意をつかれた、それ自身がレイチエルの幸運だった。

彼女の意識が空白で埋まった瞬間、シンは繰り出されたヴァージュラの右前足の一撃を

横殴りに打ち払うとともに、攻撃のずれたそのわずかな隙間に彼女の身体を滑り込ませた。

そのまま横つ飛びに一回転し、辛くも危機から逃れたレイチエルはすぐに意識を取り戻す。

偵察班と言えども歴戦のゴッドイーターである。紛うことなく戦士の精神は、理不尽に生き延びた過去に何故と問うより前に、まず眼前の危機に向けて牽制した。

対するヴァジュラは勢いよく振り下ろした爪を横殴りにされ、体勢を崩して無様に大地に転がっていた。

何が起こったのか？ そんな無駄なことを考える脳はこのアラガミには無い。ただ奇襲に失敗したということ、餌がまだ生きているということ、そしてその餌がこれまでとは違う力を持っているという事実を認識するのみだ。

身を捻るようにしてすぐさま起き上がると瞬時に後ろに跳躍し、餌の銃撃を躲してみせる。

……と同時に大きな咆哮をあげ、鋭い牙をむき出して威嚇した。これまでの経験で、弱い餌がこれだけで動けなくなることをヴァジュラは知っていた。それでもなお反撃してきた餌は強く、そして美味かった。そのことを彼はよく覚えていた。

強い圧力を感じる咆哮に、神機と腕輪がカタカタと音をたてる。それが彼女の怯懦によるものか、あるいはアラガミとしての神機が武者震いをしているのか、シンに知る由はない。ただ肉体の主導権をもぎ取ることが出来なかったことから、彼女の意識が途切れること無く、またこの戦いから逃れるつもりもないことだけは分かった。

シンは彼女が諦めるまでこの戦いを傍観することに決めた。

彼女がダメージで一瞬意識の飛んだ隙に、「メデイアラハン」集団完全治療が使えることは確認済みだ。おそらく魔法は体を動かす必要が無いため、極小の隙でも割り込めるのだろう。それでヴァジュラの前足を横殴りにした右拳を密かに治してやったのだ。だから即死の一撃でも受けない限り、いつでも救助は可能はずだ。あるいは「サマリカーム」完全復活が使えるかも知れないが、こればかりは試す気にならない。

そして自分がどうやって元に戻るかといった問題についてだが、そのあたりはまあ、どうにでもなるだろうと高を括っている。

人修羅シにとってではもはや、彼女が寿命で死ぬまで付き合ったところで大した時間ではないのだ。

* * *

とはいえ実際はワンサイドゲームもいいところだった。

ヴァジユラの攻撃を、彼女はひたすら躲しながら罫を張り、逃げ惑うしかない。

かれこれ一時間近くもそれを繰り返してきた生存能力の高さは「さすが偵察班」と賞賛に値するものかも知れないが、それだけだ。シンが憑依したせいで身体能力が急に向上していたことも裏目に出た。結果として何度も攻撃を受けてしまい、手持ちの回復錠も使い切ってしまった。頑強さの増した肉体ではそれほどのダメージになってもいなかったのだが、予防的に早めの回復を行ったのもマズかった。とはいえいまさら後悔しても始まらない。

スタングレネードやホルドトラップで動きを止めたところで、レイチエルの武器は拳銃型神機ただ一つ。冷静に各部位を狙い撃ってはダメージの通りを検証する冷静さこそ有れ、致命傷を与えるだけの攻撃力は持ち合わせていなかった。

それに、拳銃型神機には致命的な弱点が有る。
弾数制限だ。

射撃型の神機はゴッドイーター自身のオラクル細胞から抽出されるエネルギーを弾丸とするのだが、技術的問題からそのエネルギーの長期保存はまだ出来ない。そのため自身のオラクル細胞を強制的に活性化させ、エネルギーを絞り出す専用アンブルを飲むしか無い。今回、レイチエルはコクーンメイデンの間引きを目的としたため、通常ミツ

シヨンの三倍に相当する六本のアンプルを支給されていたが、それも残り僅かだ。

何よりこのアンプルは、過剰摂取することで副作用が生じる劇薬だ。生きるか死ぬかの現状においては飲むしか無いのだが、万が一にも副作用が出た時が恐ろしい。彼女は其の恐怖とも戦い続けていた。

他のアラガミから隠れることも早々に諦め、救難信号はずっと出し続けている。おかげでザイゴードが群がってきたが、彼らはヴァジュラの見境ない攻撃に晒され、いつの間にか姿を消していた。

だがそれで救援が駆けつけるかと言えば、それも期待薄だ。近くに派遣されているゴツドイーターが偶然居て、彼らが偶然手すきで、更には彼らのオペレーターが善意の人でもなければ、即時の救援を期待することはできない。まして相手は新型アラガミである。討伐班でもなければ二重遭難になりかねない。

要するに、レイチエルの死はほぼ確定的と言える状況になっていた。
鋭い鉤爪。

巨体からは想像できない宙返りの一撃。

身軽に跳躍しての強烈な踏みつけ。

超重量級の突進。

そして咆哮と共に放たれる大雷球。

かろうじて致命傷となる一撃こそ回避しているものの、全身は打撲痕の痣、流れた血と砂にまみれ、もはや白かった素肌を見つけるほうが困難だ。

それでも彼女は立ち上がり、また瓦礫に身を隠しながら、生きる道を模索していた。

その戦いぶりに感心したシンが助け舟を出そうと、

——助けてやる。だからもう抗うな。

と囁きかけても、

「黙っているアラガミ！」

と怒鳴り返されてしまった。

どうしようもなく言葉選びを間違ったことに、シンは気付いていない。

狂気に身を委ねず、諦めに身を投げ出さず。

何本も欠け折れた歯をむき出して食いしぼり、頭部に受けた鉤爪の痕から流れる血が片目を塞いでも、懸命に己の戦いを続けている。

あるいはそれこそが狂気という者もいるかも知れない。

だが彼女は正気だった。

「正気のまま狂っている」というのが、きつと一番近い。

もつとも、言葉による定義など今の彼女にはどうでも良いことだろうが。

そうして拮抗状態に陥り、数分のにらみ合いの時間が続いていた。

だが慎重に距離を測り、慎重に様子を窺っていたヴァジュラが、ついに動き出す。背のマントを大きく広げ、溜め込んだエネルギーを無数の雷球に変えて眼前に並べた。これまで見たことのなかった光景に、その絶望に、レイチエルは一瞬、身を竦めてしまう。

それでも彼女は冷静に雷球を観察した。これまで打ち込まれた大雷球よりも一つ一つは小さく見える。上手くすれば回避できるかも知れない。それが射出されると同時に、直撃を避けるべく大地を蹴った。

いや、蹴ろうとした。

だが既に、その足先は彼女の言うことを聞いてはくれなかった。

ダメージの蓄積した肉体に、脳は麻薬を生成して末端の痛みを忘れさせていた。ゴツドイーターの頑健な肉体にも効果のある、強力な脳内麻薬。そして偵察班の彼女は、これまでこれほどのダメージを負ったことはなかった。

だから気が付けなかった。

この遮蔽に飛び込んだとき、右足首から先が千切れてしまっていたことに。

そうして飛来した雷球にその身を焦がされた彼女は、初めて諦めの境地に到った。

#030 ブギウギ

小さな雷球が不規則な起動でいくつも飛来し、片足を失ったゴッドイーターの身体を焼き尽くさんとするその刹那。

この戦いの中で、初めて彼女レイチエルが目を瞑った。

それは彼女が諦めた瞬間であり、この奇妙な体験ビジョンクエストの中で初めてシンが肉体の主導権を得た瞬間であった。

全身に付けられた幾つもの傷、そしてちぎれた右足首の断面から流れ出た夥おびただしい流血は、その肉体から生命の源、すなわちマガツヒが失われてゆく証でもある。肉体レイチエルの死が近付くにつれ、シンの意識も薄れてゆく。だが――

——【メデイアラハン】
集 団 完 全 治 癒

瞬く間に失われてゆく生命力と、何より自身の意識をつなぎとめるべく、シンは即座に魔法を発動した。肉体のいかなる損傷をも即座に直しうるその権能が、レイチエルの負傷した肉体をコンマ秒の速度で万全な状態まで戻す。

それと同時にその肉体に一つの変化が現れた。青黒い幾筋もの模様が浮かび上がり、左右の首筋に角のような突起が突き出したのである。それは一人の少年が生きるために人間と袂たもとを分かった象徴。人に似て人に非ざるもの。悪魔に似て悪魔に非ざるもの。即ち人修羅の証であった。

シンは瞬時に肉体の制御を確保すると、取り戻した足で大地を蹴って、辛くも飛来する雷球を躲すことに成功した。崩れきった体勢から無理に飛んだため、高さが足りずにつんのめって前転する羽目になったが、ひとまず体勢を整える時間を作ることは出来たので良しとする。

改めて自分の状態を確認する。

レイチエルの肉体の支配権を得て気付いたのだが、この肉体は先程まで認識していた強ステータスさよりも随分と脆弱だ。全力で動いたら一瞬で四肢がバラバラになってしまいそうな危うさが有る。飛び退く際にも力を入れすぎたのか、足首に痛みが残っていたので、もう一度「メディアアラハン」をかけて回復しておいた。

どうも支配権を得るまでは元の肉体の感覚に引きずられるらしい。いや、受肉したことで対象の肉体に引きずられる、という方が正しいのか。

余談だが、「ディア」系の魔法に折れた精神を癒す効果はない。彼女が我に返り、再び

この肉体の主導権を取り返すまでには、まだしばらくの猶予がある。

それまでにケリを付けることにしよう。

シンはそう決めた。

* * *

勝利を確信していたヴァジユラ^{巨獣}は、この戦いの中で初めての状況に戸惑っていた。

眼下に現れた小癩な人間^{エサ}を上等な敵手と見定め、慎重にダメージを与えながら動きを鈍らせていた。

そのはずだったのだが、トドメの一撃を打ち込んだ瞬間に今まで見たこともない動きをして、それを回避してしまったのだ。

それだけではない。

これまでの戦いが全て無かったことになってしまったように、疲れもダメージも感じさせない機敏な動きを取り始めていた。

……そしてなんだか少しだけ見てくれが変わったような。

とにかく、これまで相手にしたことのない頑丈さだ。

アレを食べば、もっと強くなれるかも知れない。

そう思った瞬間に身体が震えたのは、きっとその期待のためだろう。

自分の身に起こった異常を、ヴァージュラ彼はそう判断した。

慌てる必要はない。

この戦いが始まってしばらくの間、あの敵手の近くに寄ると時折おかしな攻撃を受け、左手が向けられると硬い何かが飛んできてぶつかることが有った。

だが、それだけだ。

あの敵は飛び抜けて頑丈だが、自分を傷つける力はない。

彼はそう判断し、持久戦を再開した。

いや。

再開しようとした。

距離をとった敵に、エサ遠間から駆け寄って飛びかかる。

自分の巨体がそれだけで、相手を跳ね飛ばす凶器と化すことを知っている。

だが飛びかかるうとしたその瞬間、あの左手から飛び出す硬い何かが踏み降ろされる

前足にぶち当たり、オラクル細胞が反応して緑の閃光を放った。その威力がこれまでのものとは段違いで、ヴァジュラはこの戦いで初めて痛みを感じ、身を引いて体勢を立て直す。

何が起こつたのかは分かる。

しかし何故そうなつたのかが分からない。

だが分からないことについて深く考える必要性を、分かる必要性を、ヴァジュラは見出だせなかつた。同じような見てくれの人間^{エサ}を喰つてから、時折分^{エサ}からないことはあつたが、常に答えは同じ。「目の前の生命^{エサ}を喰らえば良い」であつた。

それでも分からないことに気付くことを、彼はただ無駄だと思つていた。

* * *

「ちんぽんぽん」

自身の血で滑らないよう、レイチエルが自分で左手に縛り付けた拳銃型神機。興味を持つたシンが地面に向けてトリガーを引いてみると、魔法を使つたときと同じ感覚——自身の肉体から微量のマガツヒが抜け出すそれ——に気がついた。

要は魔法の射出機だか発動体だか、そういつたものなのだろう。

「神機Ⅱ擬似マガタマまたは疑似悪魔」という自論にまたひとつ確信を持ったシンは、右手首の腕輪と左手に持った拳銃型神機を見やる。

この拳銃型神機も良い。拳銃を撃つという体験が出来たことに、ちよつとシンは浮かれていた。アナグラの訓練場ではぶら下げるように構えるバズーカじみた巨砲や、力を入れると壊れてしまいそうなスナイパーライフルしか撃てなかつたので、あまり面白くなかつたのだ。

だがこの肉体が弱いせいか、あるいは拳銃型神機がよほど頑丈なせいか、気にせず引き金を引き絞ることが出来た。シンのかつて男の子だった精神が浮き立つのも、仕方のないことだろう。

浮かれ気分でいるシンに水を差すように、巨獣が助走をつけて飛びかかってきた。

うるさげに見やるシン。あの程度の獣にぶち当たられても大したことはない。そんなことよりこの拳銃の威力を見てみたい。

そう考え、銃口をヴァジュラに向けてと無造作にトリガーを引いた。

狙いをつけるといふ感覚は無い。

反動を抑制する事も知らない。

当たり判定が大きめなゾンビシューティングゲームの感覚で、なんとなく銃口を向け

て三連発。デタラメに撃った弾は一発だけが当たり、残り二発はかすりもしなかった。だがその一発が牽制となったのか、ヴァジュラは飛びかかる直前で身を翻し、再び距離をとった。

(そういえば)

拳銃を使った戦いを、シンは以前、見たことがあることを思い出す。

あのボルテクス界に現れた、怪人黒マント。なんとか童子とかいう猫を連れていた、目付きの悪い男。

(たしかこんな感じで……)

記憶の黒マントを真似して、ろくに狙いも付けずにトリガーを引きまくるシン。

テンションが上ってきたのか鼻歌まで歌いだし、自身の魔力でブーストされたバレットを無差別にばらまき始めた。

#031 テキサス(?)

「この後どうするんだったつけ？」
ヴァジュラ

敵が本能の衝動に突き動かされて戦意を充満させていた頃、シンの意識はまったく別のことを考えていた。

拳銃片手にあのボルテクス界を走り回っていたモミアゲモミアゲ黒帽子ウの真似をして、左手一本で拳銃型神機を乱射していたのだが、この後にどうするかは考えていなかった。

この神機のトリガーを引きながら、既に眠上書きらせてしまったはずの、ここに無いはずのマガタマの権能スキル——「ファイアブレス」や「放電」など幾つかの魔法——を思い浮かべると、魔法属性の乗った散弾が撃ち出せることに気付いてからは、そりやあもう調子に乗って撃ちまくっていた。

それによってある程度はダメージを与えているように見えるが、シンは急所を狙って撃っているわけでもないし、ヴァジュラヴァジュラも極力装甲の硬そうな部分で受けていた。

流石に相手も人類の天敵たるアラガミである。これだけで倒せるほどヤワではないだろう。

だが、だからといってバラ撒いている弾幕を止めると、逃げられてしまうかもしれない

い。それは業腹だ。シンはアラガミの性質をまだよく理解していない。より狡猾で生き意地汚い悪魔たちのご同輩だと思っていれば、なおさらだ。彼女の奮闘を自分の選択で台無しにするなど、拳銃をぶつ放して上向いた気分が沈みねない悪手である。

なによりそれはつまらない。

だからこの先にどのような手を打とうかと、シンは記憶を探っていた。

シンの手持ちの権能のうち、直接攻撃は「至高の魔弾」と「地母の晚餐」の二つのみ。この内、前者はリンドウとアナグラに向かう道すがら、一度だけ試しに使ってみたのだが、マガツヒを直接撃ち砕く因果逆転攻撃はアラガミのコアを一撃で破壊してしまった。ゴッドイーターの任務はアラガミの討伐およびコアの抽出である。故に「すまんがそれは使わないでくれ」とリンドウに念を押されていた。

そして後者は発動すらしなかった。「地母の晚餐」はその土地の地母神に対して供物を捧げる一種の召喚儀式だ。どういった理由かは分からないが、召喚能力が使えない今のシンには同じ理由で行使できないのだろう。たぶん。

故にシンは、この戦法を使っていた黒マント男の戦いぶりを思い出そうとしていた。

「確か、ええと、ガーチアンとか……」

「凶鳥ガーヂアン」。凶鳥モーシヨボーという悪魔を使役して魔法を放つ技である。
なぜか召喚魔法が使えない今のシンには使えない。

「乱舞系の……なんとか乱舞」

【ジライヤ乱舞】。地霊ツチグモを召喚してタツグ攻撃をする技。
なぜか召喚魔法が（以下省略）

「ヨシツネ……」

【ヨシツネ見参】。英雄ヨシツネを召喚（以下略）

「使えん！」

そりやもう召喚できないのに召喚タツグ技なんて使えるはずがない。

いや、そもそもモーシヨボーもツチグモもヨシツネも、シンは仲魔にしていなかった

のでどうしようもなかつたりするのだが。

ちなみにこれらの技名は、学ラン黒マントが連れていた大層な名前の猫から聞いたものだった。一時共闘した際、彼独特の技にどう指示を出せばよいのかと相談したら、そう呼べば良いといちいち解説を混じえて教えてくれた。たまに間違いや嘘も混じっていたが、そのあたりはもう関係ないことだ。

「他にもあつたはず……」

そんな独り言をぼやきながら、シンは一人ぶつくさ言いながら記憶の海をさ迷っていた。

* * *

鼻歌を歌いながらご機嫌で強化バレットをばら撒くシンに、ヴァジュラはあつという間に防戦一方となつてしまった。

最初はどうにか避けながら隙を窺つて一撃を繰り出そうとしていたのだが、ばら撒かれる礫は硬いものだけでなく熱かつたり冷たかつたり痺れたり、尖つていて刺さつたり

自分の爪のように切り裂いたり触れた瞬間に弾けたりと様々で、次第にヴァジユラは自分の置かれていた状況が理解できなくなつてゆく。

アラガミも人間^{エサ}もお構いなしに攻撃しまくる、あの阿呆なひよろ^{コクーンメイデン}長い柱の亜種^{色ちがい}だつてここまで多彩な攻撃はしないだろう。少なくともこの巨獣は見たことがない。

そもそもこの時代、まだアラガミは単純な物理攻撃と、電撃、爆発くらいしか攻撃手段を学習していない。アラガミの攻撃手段は元々、野生動物や人間との戦いの中で学び、必要と思われたものを、喰つたモノの情報に基づいて肉体の組成を改変して身につけるものだ。

その最新型とも言えるヴァジユラですら見たことのない攻撃が、デタラメに撃ち出され荒れ狂う大波のように押し寄せて来るのだから堪らない。

だが、それが自分に着実にダメージを与えているということ、また攻撃ごとの特性を、ヴァジユラは学習していく。無駄と切り捨ててきた考えるという能力が、ここで急に開花した形だ。

この力があれば、そしてこのエサを喰らえば自分は今もつと強くなれるだろう。その予感と確信にアラガミは身震いがする思いだった。それはアラガミの本能、最後の一体になるまで生き残る手段とも合致する。自分が最後まで生き残るモノになれるかも知れ

ない。いや、きつと成れるだろう。この巨獣の脳裏には、そんな確信すら生まれていた。故にヴァジュラは、逃げ出すことなど微塵も考えてはいなかった。

そして確信を得、覚悟を決めたその瞬間、何故かこの強敵エサの攻め手が緩んだ。好機だ。

ヴァジュラは硬い角を盾にして猛然と突撃し、弾幕を総身に受けながらも会心の一撃を繰り出した。

* * *

「チャツ!!」

低く枯れた奇態な音が、彼女レイチエラの細い喉から漏れた。

シンがこの肉体の支配権を得て、初めてまともに攻撃を受けた瞬間であった。と同時に、この恐ろッアしげな巨獣ジュラに効果的な一撃が加えられた瞬間でもあった。

思考に意識を割かれ、わずかに気の逸れたシンに繰り出されたヴァジュラの突進に、仮初の肉体は貫かれ、そのままの勢いで大きく跳ね飛ばされた。

だがヴァジュラの硬い角のようなものがシレイチエルの肉体ンにぶち当たろうというその直前、シンは無意識に右拳を繰り出し、これまで幾度となく銃撃を弾いてきた堅固なそれを一撃で割り砕いたのだった。もつとも、そのせいで割れた角が鋭利な槍になつて肉体を貫かれてしまったのだが。

ヒトシユラ自身のものとは比べ物にならないほど柔らかな身体を貫かれ、勢い余つて跳ね飛ばされた瞬間、シンの脳裏でその感覚と一つの記憶とが結びついた。

——そうだ。あの黒マント男にも同じように殺されかかったではないか。

即座に立ち上がったシンは、再び左手の拳銃型神機を構えて弾幕を展開すると、自身の傷を「メデイアラハン」で癒やした。角槍に刺された貫通痕も、大穴と言うほどではない。この程度の傷なら数え切れないほど受けてきたし、直してきた。どうということもない。

シンは記憶を手繰つてあの黒マントに受けた痛恨の一撃を思い出す。

銃撃による弾幕で身動きを封じ、たまらず相手の意識が無謀に傾いたその瞬間を狙

い、全身を使った刺突の一撃を加える。弓矢のように引き絞られた肉体から繰り出されたその一撃は、もしも「食いしぼり」が残っていない耐えきれないほどだったのだ。残念ながら——あるいは当然ながら、彼は「食いしぼり」の権能は持ち合わせていなかった。

生憎と日本刀の持ち合わせはなかったため、自身の抜き手で代用した物真似の一撃は、真紅の閃光を放ちながら砕かれた角の跡から脳髓、そして頸椎までを貫き、彼の生命活動を刈り取ってしまった。

「テキサス……だっけ？」

技名までは思い出せなかったようだが。

0 3 2 第一変異

「……で、君はそこで何をしてるのかな？」

くすのき
楠リツカに声を掛けられ、シンはいつの間にか元の肉体に戻っていたことに気が付いた。

ただし全てが元通りというわけでもない。

部屋の隅に座り込んでいるのは変わらなかったが、左手には覗き込んでいた万里の遠眼鏡の代わりに、何故か拳銃型神機が握られていたりする。保管用の台座にしっかりと固定されていたはずのものが、頑丈な格子もそのままに中身だけがシンの左手に有った。

「君は本当にすぐ問題を起こしてくれるね」

その異常事態に、こうして整備班から楠リツカが飛んできたという次第である。

そうして神機破壊者として恐れられ始めているシンに、小言をくれてやれる数少ない

人材として面倒を押し付けられたことを愚痴りながら、リツカは不機嫌を隠そうとせずシンに言い募る。

とはいえシンに罪の意識も無ければ、状況に対する理解もない。不思議体験から唐突に戻されて、持っていたはずの万里の遠眼鏡が消えていたので一瞬慌てたものの、すぐに四次元ポケットめいた自身の胎内に確認できた。あの謎の体験が上着に続く理不尽なアイテム強奪だったらどうしようかと、少しだけ不安だったのだ。

そうした不安から開放されたシンは、ただ脱力していた。

しばらく愚痴と小言を続けていたリツカだったが、まるで寝ぼけているような表情で首を傾げる年長者の姿には毒気を抜かれてしまった。だらしない年上の異性というものを、両手の指で足らないくらい見慣れていたし、彼らが多少アレコレ言ったくらいで態度を変えるような存在でないこともまた、嫌というほど思い知っているのだ。

故に彼女は、少しだけ予先を変えてみることにした。

「研修でレクチャーしてもらってなかったのかな？」

通常、神機はコアに登録された腕輪の持ち主にしか触れることが出来ない。これは適合試験の際、神機とゴッドイーターが腕輪を介してある種の認証登録を行っているため

だ。

適合試験で適合者に注入されたオラクル細胞は、固有のパターンを持つようにパーソナライズされている。そうして個性化されたパターンを認証キーとして、神機は個体認証を行っている。人造アラガミたる神機は、その個体認証によってゴッドイーターを自身の一部と認識するのだ。

「だけでもし、自分のでない神機に触っちゃうとね。神機は君を敵、あるいは餌と認識する。そして君を食べようとするわけだ」

もしも認証キーを持たない生物が神機に触れれば、神機は容赦なくその生物を喰らおうとする。そこに善悪は存在しない。オラクル細胞とはそういうモノなのだから。

だが神機のオラクル細胞は、ゴッドイーターを捕食対象と見做さない偏食因子を持っている。より正確には同じ偏食因子を持つことで、互いを同種なかまの細胞と見做してしまうのだ。それによって認証キーが個体認証を行うまでの短い時間、ゴッドイーターは神機の攻撃から身を守っている。

とはいえそれも完全なものではない。開発責任者であるペイラー・榊は「偏食因子とはある種の欺瞞情報に過ぎない。仲間や同族といった関係が共同幻想であるようにね」

などと嘯いたそうだ。いかにも偏狂^{マッド}が言いそうなことではある。

ともあれ個体認証は「自分(の一部)」、偏食因子は「同種」という違いは、オラクル細胞の判断に大きく影響する。長時間の接触という強いストレス下におかれたオラクル細胞は、やがて――

「自身の偏食因子を変異させて、相手を食べられるようにしようとするんだ」

現在のゴッドイーター、神機はともに「P53型」という共通の偏食因子を有するオラクル細胞を基盤としている。同種の偏食因子だから、神機のオラクル細胞はゴッドイーターを捕食しようとしなのだ。だが偏食因子が変異し、異なるパターンを持つようになれば、既存のゴッドイーター、既存の神機は捕食対象になってしまう。

これは自身の肉体であっても同じこと。変異前のオラクル細胞を、変異後のオラクル細胞が食らう。あるいはその逆もある。そうして一つの肉体の中で、オラクル細胞同士が共食いが発生することとなる。そしてオラクル細胞が異なるオラクル細胞を過剰摂取すれば単体進化が発生し、その先に待つのはアラガミ化だ。

アラガミ化したゴッドイーターは当然、かつての同僚たちに処^レ理されることとなる。

「ボクは君が処分されて欲しくはない。もちろんボクが君に殺されるのも嫌だ。だからね、お願いだから自分のものでない神機には、触らないで欲しい。分かってくれるかな？」

リツカの真摯な表情に、シンは小さくうなずいた。

* * *

実はゴッドイーターと神機の接触にはリツカが話さなかった、別の事情もある。

より高性能な偏食因子の生成については、フェンリルにとつても重要な研究課題だ。

何しろこれまで生成できた偏食因子は、マーナガラム計画で使用され事故を招いたP73型と、現行ゴッドイーターに適用されているP53型しか存在しない。変異によって新たな偏食因子が生成できるのであれば……と期待する声は、今でもあるのだ。

だが、それを知るためには多くの実験を必要とし、当然そのためには相当数のサンプルが必要となる。そのサンプルとは言わずもがな、人類最後の希望たるゴッドイーターだ。ただでさえ減少した人類の中でも数百、数千人に一人の適合者。彼らは発見され次第、適合試験に回され、促成訓練の後に前線に投入されている。そうして辛うじて、人

類の生存領域は守られているのだ。そんな貴重な資源を実験で使い潰せるほど、人類に余裕はない。

そして、その実験を抑止しているもう一つの要素。それがこれまでの経験上、変異した偏食因子に実用的なものが無かったという現実だ。

もしも変異細胞から実用的な偏食因子が発見されてしまったなら、その非人道的な実験に陽の目が当たってしまう。無論、最前線で戦う一線級のゴッドイーターが被検体となることはないだろう。だが二線級のゴッドイーター、また適性はあるものの人格的にアラガミとの戦いに向かない者、適性率の低い者などが被検体として使い捨てられることは十分に考えられた。

故にゴッドイーターが自分以外の神機に触れることは、固く禁じられている。緊急出动に備えて完全に隔離することこそ出来ないが、代わりに神機保管庫には監視カメラや各種センサーが設置され、二十四時間体勢で監視されていた。間違つて登録外の神機に触れたゴッドイーターがいた場合、即座に台座を格納、隔離する手はずは整っていた。

そんな中での今回のトラブルだ。

リザーブ中の神機の管理を任されている整備班のみならず、シンの様子を監視カメラで見っていたアナグラ上層部もまた、揃って頭を抱えていた。

彼は何故こうも次から次へと規格外の問題を起こすのか。
当のシンにとつては、まったく知ったことではなかったが。

* * *

シンが他者の、それも寧猛なアラガミ・ヴァジュラを初めて単独討伐し、コアを持ち帰った『最新の英雄』レイチエル・アダムスの神機に触れた——実際はそれどころか長時間に渡って保持していたのだが——ことについては即座に箝口令が布かれ、整備班の部外秘となった。

帰投したばかりの第一部隊が緊急招集され、シンを被験室へ連行する任に当てられた。万が一、彼がアラガミ化した際に対処できる可能性が最も高いのは、アナグラ最強の呼び声高い彼らに他ならなかったからだ。

帰投して早々の召喚にリンドウがボヤキ、ツバキの鉄拳を受けたことは言うまでもない。

とはいえシンは特に体の異常を感じていなかったし、その異常事態を異常事態であると認識すらしていなかった。元より彼にしてみれば「楽しい^{ホーナスゲム}時間が終わってしまったこ

と」の方が重要だったのだから仕方がない。

何故か左手にあった彼女の拳銃型神機レイチェルについても、その理由について考えるより、それが酷く損耗していたことに気が回っていた。きっとあの後も彼女と共に戦場を駆け巡り、酷使されたのだろうことは想像に難くない。

シンが最初に万里の遠眼鏡で覗いたときより、さらに酷い状態になっている気がしたが、その疑問にはリツカも含め、誰一人として答えることは出来なかった。神機側のサブコアにも重大な損傷が見られ、もはや神機としての役目を果たすことも出来ないそれに、今さら関心を払う人間など居なかったのだから仕方がない。

連行されたといっても別に両脇を抱えられ、拉致された宇宙人のような有様だったわけではない。ただ「付いて来い」と言われて、同行しただけだ。そうしたことは、これまで何度もあったので、殊更疑問を持つこともない。

念のために説明を求めてみたものの、緊張した面持ちの面々には答える余裕もないようだった。

当然だ。アラガミ化したゴッドイーターの強さは、元のゴッドイーターの素質に左右される。高い適性を持ったゴッドイーターは、より強いアラガミへと変化する傾向が有った。相手は過去最高の適性を持った規格外のゴッドイーター。もしもアラガミ化

したならば、どれほどの怪物となるかは想像すらできない。その緊張は、サカキ博士が検査結果を通知するまで続いた。

「特に心配は無さそうだね」

普段どおりの糸目の声に、第一部隊および整備班客員は大きく胸をなでおろしていた。

被験室では腕輪を経由しての血液、体細胞サンプルを採取され、各種データがその場で調べられていた。機密漏洩を防ぐため、検査はシックザールとサカキがたった二人で行うという異常体制だ。晩年、サカキ博士はもしもこの場でシンがアラガミ化していたなら、その時点で極東支部の機能は壊滅的打撃を受けただろうと回顧した。

「だが我々が立ち会わずにいたところで、彼がアラガミ化したならアナグラなど数十秒で吹き飛んでいただろうからね。どうせ同じなら、効率的な方が良いだろう？」

そう言つて楽しげに笑つたらしい。

このことは、彼の狂気の一面が垣間見えるエピソードとして知られている。

ともあれ、そうして検査は無事に終了した。

そういうことに、なっていた。

* * *

「さて、これはどうしたものだろうね？」

体細胞サンプルを培養するシャーレを量産しつつ、困ったものだと洗面を作ってボヤいた黒い研究者^{ペイラー・編}。だがその声には言いしれない喜色がにじみ出ている。

「どうもこうもあるか！ 大発見だ！ 異常事態だ!!」

バン、と机を叩いて怒鳴りつけた白い^{シックザール}為政者の手の内で、『検体814より抽出された変異偏食因子』と書かれた紙が握りつぶされていた。

0 3 3 神機覚醒

シンのオラクル細胞から「変異」偏食因子が検出された数日後。

研究班では日夜——といっても太陽の代わりにカグツチの輝くこの世界に明確な「夜」は存在しないが——フル回転でデータの採取が進められていた。現状の最たる発見は、通常のP53偏食因子とは異なる生成エネルギー波形を示している点だ。

「あの後、なにか体の調子が良くなったり悪くなったり、変わったこととか無い？」
「特には」

その生成エネルギー波形がゴッドイーターの体にどのような影響を及ぼすのかは、未知数だ。シンというイレギュラーは、サンプルとしてはまったく役に立たなかつた。

シンから抽出したオラクル細胞と、他のゴッドイーターのオラクル細胞とを、同じシャーレに入れて培養してみたところ、一時間ほどで「両者の細胞が共に死滅する」「シンの細胞に吸収される」「両者の細胞が住み分ける」などの結果を得ることが出来た。だがそれがどういった法則によるのか、データ上の共通点は発見できず、仮説すら立つて

いない。

焦る研究班の中には早くも「投与実験を」との声もあるが、それについては慎重派が多く、実行には至っていない。そもそも変異元であるP53偏食因子と同じ適性検査で良いのかどうかすら分かっていないのだ。

こうしたとき、最初に被検体となるはずのハツカネズミは、世界が変わってしまったから十日と保たずに全滅してしまった。その他の動物も壊滅状態だ。となれば被検体は人間しか無い。

だが人間という資源が限られていることは前にも語ったとおりだ。黒白の指導者たちも、決断できずにいる。

そんな中、蜘蛛の糸のようにか細い可能性にかけたりツカの問いは、しかしシンに蹴されてしまった。

彼らを遠目に囲み、固唾を飲んで見守っていた面々からは落胆のため息が漏れる。

そんな中。

シンがふと、おかしなことを口にした。

「そういえば、ゴッドイーターは魔法って使えないのか？」

* * *

シンがとんでもないことを言い出した翌日。シンとリツカ、および第一部隊の面々は贖罪の街を見下ろす崖の上に立っていた。

「くすのき楠。お前まで来ることはなかったんじゃないか？」

「大丈夫。ボクはかんなき間難の担当だしね。それに良いデータを取るには現場にいらなくっちゃ」

第一部隊長のあまみや雨宮ツバキが、心配なんだか迷惑なんだかわからない調子でリツカを咎めても、彼女はどこ吹く風とばかりに平気な顔をしている。

リンドウはくわえタバコに火をつけ、気怠げに紫煙をくゆらせてため息を吐く。その他の面々も、いかにも面倒ごとごに付き合わされて億劫です、と言わんばかりの態度だ。

まあそれもそうだろう。いきなり「魔法」だのと言われても、どう答えて良いのやら分かったものではない。世界が変わってしまうより以前であれば、ゴツドイーターに憧れる子どもたちがそういった幻想を抱くことも、まま有った。だがまさか、成り立てとは言えゴツドイーターの口からそんな言葉が出るとは。

ゴツドイーターは過酷な職業だ。嫌なこと、受け入れがたいことなど呆れるほど体験してきた。そんな状況に出くわせば、魔法のような力があればと願ったことだつて一度や二度ではないだろう。だが、そんなものは無いのだと、「この悲劇こそが現実だ」と歯を食いしばって生きてきた。それが彼らだ。

これまでシンに対して引け目を感じていた面々も、正直どう接して良いものか分からなくなつてしまつていた。

そんな彼らを後目に、シンは急ごしらえの神機を手になると、一瞬ぶると身を震わせる。身に帯びたマガタマの震えが表に出たためだ。そうして無造作に崖を飛び降りると、西側にある開けたスペースまで移動。

彼が動き出したのを見たその他の面々は、崖の上から降りずにそのまま観察に適した場所まで移動する。

あの奇妙な体験ビジョンクエストによつて、シンは神機を通して魔法を放つ感覚を得ていた。

最初はそのことに気がついては居なかつた。ただ「変異」偏食因子の調査の一環として、改良整備中のシンの神機——それは神機コアと認証用サブコアとを柄に固定しただけのフレームに過ぎなかつたが——に触れるよう言われ、そうした時に、急にそのことを理解したのだ。

だからあんな質問をして、そして今、実験をすることになっている。

「メラ」

刀身の無い神機を短杖ワンドのように構えてそれっぽいことを言ってみるが、当然何も起こらない。そもそも今この時代に、某国民的大ヒットゲームを知っている人間など居るはずもない。

第一部隊の面々はこれといった反応を見せなかったが、計器を調整していたリツカだけは別だ。一挙手一投足に注目していた彼女に『今のは？』と尋ねられ、「なんでもない」と気まづげに答えるシンだった。

『こつちの準備はできたから、いつでも始めていいよ』

「リョーカイ解」

インカムから聞こえるリツカの声に応えたシンは、気持ちを入れ替えるように短く息を吐き出した。

そうして手にした神機と自身の肉体との感覚を同調シンクロさせてゆく。手のひらと神機の

接点が癒着したように、神機のみだけ腕が伸びたように意識を広げてゆくと、神機のコアはシンにとって新たなマガタマと認識された。

そのまま神機のコアを、マガタマの代わりに励起する。

25、いや今や26あるマガタマだが、一度にそれら全てを励起させ、その力を扱うことは、シンにはできなかった。「それはカグツチからアマラ宇宙すべてを奪い、唯一人で創世を成した者のみが到達しうる領域だ」と、六枚翼ルシファーのやつは笑っていたが。

故に普段は最強のマサカドゥスの一つのみを励起しているのだが、どうもそれでは神機を介した魔法は使えないらしい。仕方なくシンは他のマガタマを眠らせ、神機のコアという新たなマガタマを励起する。

—— 名称：神機コア “SIN”

—— 属性：NEUTRAL

—— 特徴：身体を強化する／保有者と共に成長する

—— 相性：アラガミに強い

—— 能力：【変形／捕食形態】エネルギー【熱量変換】衝撃【ザン】治癒【ディア】蘇生【リカーム】

シンの脳裏に浮かぶマガタマの能力を、大雑把に表すとこんなところだろうか。

人修羅の身に秘められたマガタマと比べると貧相なものだが、あれらの権能がろくに機能しないことを考えると、使えるだけマシというものだ。

まずは分かりやすい権能から試してみることにした。

「ザン」

バンツ!!

大きなゴム風船が割れたような音が響いたかと思えば、シンの前にあったコンクリートブロックが勢いよく跳ね飛び、廃墟の外壁に当たって砕けた。

シンはただ一言つぶやいただけだ。

彼の全身に付けられた速度センサーは、彼がただ突っ立っていただけであることを示している。

だが確かに、彼の眼前のコンクリートブロックは吹き飛び、そして砕けた。

「一体、何が……?」

「コアと同調した。それからコアの能力を使った」

「コアと……同調……?」

シンの言葉に、リツカは戸惑いの表情を見せる。

現在生産されている神機のコアは、討伐したアラガミから摘出したものにP53偏食因子を注入、加工したものだ。つまり元はアラガミのものである。いかにゴッドイーターがその体内にアラガミのものと同じオラクル細胞を有するからといって、同調などということが可能なかどうか。

ただ、歴代最高の適合率を誇る彼の言葉である。無視できるものでもない。

すぐにでも帰投して、類似する現象の記録が無いか調べるべきではないか。この実験は、なにか危険な、踏み越えてはいけない線を超えてしまうような……

そんな胸騒ぎを覚えたリツカに気付くこと無く、シンは説明を続ける。

「どう言ったらいいのか……。ゴッドイーターは神機を持って腕輪とつなぐことで、神機と肉体を一体化させているだろうか？」

「ゴッドイーターの体内に混じったオラクル細胞と、神機のオラクル細胞は同じ遺伝情報を持っているからね。神機だって本当なら相当な重さなのに、君たちは軽々と持ち上げて、振り回せてしまうのは、それを体の一部だから。ちゃんと覚えていてくれたんだね」

「その、つながってる感覚をもう少し強くする。神機が手のひらに吸い付くように感じるんじゃないくて、神機と手が溶け合って一つになったように意識する。すると——」
「すると?」

リツカは自分が生唾を飲んだ音を、やけに大きく感じていた。

「マガタマ——いや、コアが目を覚ます」

「そうすると、どうなる?」

「コアの力を自分のものにできるようになる。体内に溶け込んだコアが、それまで忘れていたことを思い出すように、教えてくれる」

そう言ってシンが神機を——刀身のない柄ばかりのそれを——軽く振るうと、存在しないブレードの軌道に沿って一陣の突風が吹き、廃墟のコンクリート壁に太刀筋のような大きな亀裂を刻みつけた。

機材チェックをしていたリツカも、そしてシンの周囲に警戒し、必要に応じて狙撃手が牽制をしていた第一部隊の面々も、これにはただ驚くばかりだった。

「おい。それは我々の神機にもあるものなのか!？」

忘我の領域からいち早く立ち直ったのは雨宮ツバキ。全世界のゴツドイーターの中でもトップクラスの最精鋭、極東支部アナグラ第一部隊の隊長は伊達ではない。それでも混乱を極めた思考の中から意味のある言葉を紡ぐまでに、たっぷり10秒はかかっていた。

「もちろん。そのはずだ」

0 3 4 三つの選択肢

先日、かんなき間薙シンの一言に端を発した超常技能実験。間薙シンが神機を介し、まるでアラガミのような攻撃手段を披露してみせた記録映像は、研究班を大いに驚かせた。そして間薙シンから抽出された「変異」偏食因子——こちらは便宜上「P53プラス」と命名された——に対する研究班の情熱は、今や天井知らずだ。

まずはP53+を保有するオラクル細胞の培養を行い、パレット上で一般的な投薬、耐熱、加圧などの基礎データの検査後、そこからP53型との相違点を洗い出した。

これについては「オラクル細胞が生成する熱量波形が、従来の大きくなだらかに増減するものと異なり、規則性はあるが複雑な波形になっている」ことが分かっている。これは従来型の波形に、脈動のようにオンオフが極端な波形が重なっているのでは？ という仮説が立っているが、現在のところ単純な熱量以外に類似するパラメータを検出できていないため、本当のところは分かっていない。

そしてそれ以外の差分は、ゴッドイーター適合試験前に採取したシンの体細胞とほぼ同一のパラメータを示しており、新たな発見は無かった。むしろそのパラメータがその他のゴッドイーターから抽出されたパターンともほぼ一致していたあたり、シンは適合

試験前からゴッドイーターに近い体組織を持つていたことが予想された。

そして次のステップ。

ここで問題が生じた。

従来ならば次のステップはマウスに対する投薬実験。これは嚴重な隔離処理が行われた施設で行われる。ここでもP53型との相違点の洗い出しが行われ、一定の安全が確認されるか、または安全を確保する手段を講じることが出来て、初めて投与実験へと進むことが出来る……はずであった。

だが既に説明したとおり、実験用に飼育されていたマウスは、この世界がボルテクス界へと変じた直後から死に始め、既に残っていなかったのだ。

そうした状況下で研究班から二通の嘆願書が提出されたのは、ゴッドイーターによる神機を介した超常能力行使実験の実施から、わずか3日後の出来事だった。

一つは「一足飛びに最終実験を行うべきだ」というもの。最終実験とはつまり人体実験のことだ。こちらは約二割の研究員が署名して嘆願書と、合わせてP53+投与実験用アンブルがシックザールのもとに届けられた。

対抗するように提出されたもう一通は「人体実験をするにはデータが不足している。

実行すべきではない」という嘆願書。こちらは前述の急進派の倍、約四割の研究員の署名がされている。しかもご丁寧にドクター・サカキを介して持ち込まれた。

「さて、どうしたものだろうね」

デスクに置かれた二通の嘆願書を前に、フェンリル極東支部局長ヨハネス・フォン・シツクザールはため息を吐く。責任者というのは厄介なものだ。

研究者たちが善悪を超越して好奇心に忠実であることは、彼らがたしかに人類圏の防衛を担う最精鋭であることの表れだと、自身もまた研究者であるシツクザールは信じている。だがその才能の表れを、人類社会が常に歓迎するわけではない。むしろ歓迎されないことをしようとするからこそ、彼らは天才なのだ。

同僚であり同志であった研究者のペイラー・榊さかきがP53偏食因子を発見し、しかして数多の実験案をことごとく却下されて以来、そうした天才タレント——あるいは天災ディザスター——と人間社会をつなぐ役割を、彼は自らに課している。あの時だって、それ以前の予算案が通つていれば何もあんな危険な賭けに出ることはなかったのだ。だから彼は、安全のためには誰かが彼ら“天才”の暴走を制御しなければならぬと信じていた。

誰に褒められることもなく、むしろ忌み嫌われることの方が圧倒的に多い仕事だ。し

かもそれは常に難解なことばかりで、その身をすり減らしてようやく成し遂げることができる偉業であつた。

その彼の眼前にある選択肢は、全部で三つ。

ひとつは安全な実験のためにマウスの代用になるものを調達すること。

ただしそのためには、マウスのように人間よりも弱く小さく寿命の短い生物が必要となる。だがこのフェンリル極東支部（ラ）の管理圏内に、もはやそんな弱者は残っていないかつた。いや、おそらくこの閉ざされた世界のどこを探しても、結果は同じだろう。対アラガミ防壁によつて守られている各地のフェンリル支部を除けば、アラガミの侵入を防げる構造物など存在しない。

問薙シンはアナグラに投降した折、彼が発見される直前まで維持されていたシエルターがあつた、という欺瞞情報（カ）を証言したが、そんなものが実在するはずが無い。それが分からないシックザールではなかつた。彼を受け入れたのは、リンドウや一部局員に對するメンタルケアと、シンの素質を見込んでのことに過ぎない。

だが、あくまで安全第一とするのであれば、これしか無い。無いものを探し、迂遠に時間と資源を浪費する。それでもこの案を採るのであれば、魔法なる力はいくまでシン

個人の特性として扱い、最大戦力としての彼に状況改善を期待することになる。

あるいは彼ならば、単独で世界を救うことすら可能なのではないか。そう思わせる何かを、シツクザールはシンに感じていたが、彼はそれに賭けてしまえるほど、捨て鉢にはなれなかった。

次の選択肢は、マウスの代わりに人間を被検体とすること。要は人体実験だ。

新規にゴッドイーターになる者、簡易テストで適合者と出た人間に協力を要請する。これならば、損失はただの人間が数人という最小限で済む。

人間の数もだいたい減ってしまった。アナグラ構内の生産プラントは可能な限り食料品の生産に回しているが、アナグラで暮らすフェンリル職員と、周辺の村々サテライトへの配給分で本当にギリギリだ。配給のトレーラーがアラガミに襲われた分だけ、人類は減る。もはや事態はそこまで切迫していた。

故に人体実験そのものに対する反対は、人道という美徳を除けば、おそらくそう加熱することはない。

ただしゴッドイーター適合者は、既にあらかた適合試験を実施済みだ。集落への食料供給の対価として、パッチテストで適合率が四割以上だった者は適合試験を受け、ゴッドイーターとなることを義務付けている。今更新しい適合者が見つかるかどうかと

いった問題がある。

それにフェンリル本部との連絡が途絶える前、内偵スパイの送ってきた最後の情報によれば、彼らは優秀なゴッドイーターの集まるこのアナグラに対して、些か歪んだ好奇心を持ち始めているらしい。現状ではこちらに手出しをする余裕もないだろうが、状況が改善した際、サテライトの支持を失っていれば彼らの介入を招くことになりかねない。

三つ目の選択肢は、ゴッドイーターを被検体とした実験を行うこと。

既に偏食因子を投与済みのゴッドイーターへ、新たにP53+型偏食因子を投与する。間雑シンのオラクル細胞と他のゴッドイーターのオラクル細胞は、同じシャーレの中に入れると「全滅」「棲み分け」「吸収」などの結果となる。吸収するタイプのゴッドイーターなら、もしかしたらP53+型が全身のオラクル細胞を塗り替えてくれるかも知れない。

だが、これもつとも危険な賭けだ。P53+がどのような変化をもたらすかも分からない。万が一、間雑シン相当のパワーを持つアラガミが生まれてしまったとすれば、抗すべう術など無い。おそらく人類文明はその時点で終焉する。

シツクザールの現状認識に間違いは無い。

無論、彼の知るところではなかったが、ボルテクス界による意志なき者の淘汰は、既に終わっていた。この地上で生きていけると言える者は、もはや人間とアラガミしか存在しない。

だからこそ悩むのだ。

どちらを選んでも「正義は我に在り」と言い張るに値する。それがたとえ、現実から目を背けるための詭弁であつたとしても。

「人道的には当然、人体実験などするべきではない。それに現状でもゴツドイーターは人類圏の防衛をやつてのけている。急ぐ必要はない、はずだ……」

だが、とフエンリル極東支部長・シツクザールは逡巡する。

彼には過去に、安全性の確認を怠つた人体実験を行った経歴がある。それも愛する妻となるはずだつた女性と、幸せな家族を築くはずだつた息子の二人に対して。

結果は強力なゴツドイーターと変じた息子と引き換えに、最愛の妻を失つた。

「人道。人道か……」

嘆願書を持ってきた折の、か·つ·て·の·友·人·の·覗·き·込·む·よ·う·な·瞳·を·思·い·出·し、シツクザールは机に拳を叩きつけた。

#035 アナライズ

白い責任者が胃を押さえて煩悶し、黒い傍観者が自論に一つの確信を得るに至った頃。

アナグラに混沌をもたらした男・間難シンは、唐突に出撃ゲート前に姿を現した。

といつて出撃するわけではない。彼の蛮用に耐えうる専用神機はまだ出来上がっていないのだ。開発局は現在、どうにか撮影された彼の神機が自壊するまでの映像を検証しながら、対アラガミ装甲の技術を応用できないかと悪戦苦闘の真つ最中だ。

ジツとしているのが嫌いなわけでもない。人修羅として無限の時間の中に身を置いている彼は、その気になれば自由に活動を休止し、また必要に応じて自動的に再開することができる。まあ確かに、旺盛な好奇心が少しづつまた疼き始めていることを認めないではないが。

とはいえ今回は「気まぐれ」ですらない。流石に例の一件以来、神機保管庫——職員には墓^{グレイフヤード}地や墓標^{ハカイド}と呼ばれる——には厳重な監視体制が布かれ、許可なく立ち入ることはできなくなっている。

ということと今回シンがここに居るのは、新人整備班員にして前整備班長の忘れ形

見・桶くすのきリツカの要請によるものだった。

「どうやってコアの魔法を知るのが、実際に見せてくれる?」

「構わないが……」

「どうしたの?」

「ある道具を使うんだが、貴重な品なんadena。ここで見せるのは構わないが、貸し出しは出来ないぞ」

「そっか。まあその辺のことはまた後で」

とまあ、そんなわけでシンは出撃ゲート内にある神機保管庫——使用者を失った墓標の方ではなく、使用者の生きている現役の神機を収めた方——にいた。左右の壁面にずらりと並ぶ保管用の台座は、墓標のようだったあちらとは違い、三分の二は空いていた。今日もそれだけの数のゴッドイーターが出撃しているということだ。

そんな光景になんら感慨を示すでもなく、シンは無造作にデニムパンツのポケットに手をつまむと、手のひらに収まるくらいの小さな筒を取り出す。

ピツタリとポデイラインを露わにする彼のパンツに、そんな膨らみはなかったはずだとリツカは驚くが、シンは気にせずそれを摘んでするりと伸ばした。

螺鈿細工の施された、小さくも綺羅びやかな望遠鏡。

広げた手のひらに載せて、それをリツカに差し出して見せる。

「そのものの持っている力を暴き立てるのは、この万里の遠眼鏡とおめがねと呼ばれる宝重だ」

「ホウチヨウ？」

「この世に一つしか無いくらい貴重なもの。宝物という意味だ」

「へえ」

「本当に一つしか無いかは分からんが、な」

あの日あの時、世界がトウキヨウだけになってしまった時、トウキヨウ中を駆け回って探してみたが、これはひとつしか見つからなかった。それに誰もがこれを貴重な品だと言ひ、かの六枚羽ルシの青悪魔フアーすらその存在に本気で驚いたほどだったから、相当な希少品レアものであることは疑っていない。

それに悪魔たちが伝承によってのみ得られる権能アナライズと同じ効果を、こんなちっぽけな道具が持っているというのだから、とんでもない話である。

実際シンは、力を優先して「アナライズ」の権能を封印してから長い間、何度も遭遇戦で死ぬ思いに遭っており、その都度後悔していたものだった。旧世界の神話伝承を手

繰れば、悪魔の能力にはおおよその見当は付く。だがそもそもその悪魔が何者であるか分からなければどうしようもないのだ。攻略本を片手にゲームを進めるのはわけが違った。

「それでそれで？　これで見れば良いの？」

「そうだ。ゲームみたいに見えるようになる……はずだ」

「ゲーム……？」

間薙シン。彼は拡張現実^A_R技術の概念が広まるよりも前にトウキョウに生まれ落ちたため、視野内に各種情報が表示される光景をそうとしか説明できなかった。

だがこの時代に彼の知るようなデジタルゲームは残っていない。アラガミの大量出現により人類文明の崩壊が決定的になった2051年より後の、電力事情の厳しい時代に生まれたリツカにとって、ゲームとはカードやブロックを使ったアナログゲームのことを指す。

リツカのキョトンとした表情に、自分の説明が伝わっていないことを理解したシンは、言葉での説明をすぐに諦めた。

「……見れば分かる」と言いながら遠眼鏡を構え、使い方を説明するようにシンはそれ

を覗き込んでみせる。彼の視界には悪魔を覗いたときと同じように、神機の基本スペックがパラメータ化され視界に上書きしていた。^{オーバーラップ}

— 名称：神機コア〃OGRE〃

— 属性：NEUTRAL

— 特徴：身体を強化する／保有者と共に成長する

— 相性：アラガミに強い

— 能力：【変形／捕食形態】【熱量変換】【突撃】【^{治癒}ディア】【^{硬化}ラクカジャ】

— 名称：神機コア〃COCCOON—MAIDEN〃

— 属性：NEUTRAL

— 特徴：感覚を強化する／保有者と共に成長する

— 相性：アラガミに強い

— 能力：【変形／捕食形態】【熱量変換】【^{つくもぼり}九十九針】【^{治癒}ディア】【^{隠密}エストマ】

「ふんふん、なるほど。視界に情報がオーバーラップするんだね。スマートゴーグルみたいだねえ」

「スマートGoogle?」

こちらの世界ではAR技術を軍事転用し、センサーによって得た情報を視界に上書きする軍用ゴーグルがあるらしい。とはいえAR技術などサイバーパンクのアニメくらいしか知らないシンである。「なにかすごい便利な技術があるんだな」という大雑把な理解しかしていなかった。

何であれ、説明の必要がないのであればそれに超したことはない。

……と思っていたのだが。

「〃属性〃 って何?」

「悪魔^{アックマ}が持つてる性質だ。NEUTRALは中立、状況によってどこにでも属する奴らのことだな」

「〃特徴〃 って?」

「悪魔の傾向を大雑把に表したものだ。神機^{ゴキ}コアの場合、ゴッドイーターにどんな影響があるかを表してるんだろう」

「〃能力〃 の【熱量変換】 って?」

「それは俺にも分からん。吸収した熱量を別のなにかに変換するとか、そういう能力だ

ろう。悪魔の中には熱だの冷氣だの電撃だのを吸収して生命力にしたり、魔力にしたりする連中が居たが。神機の能力にそういったものは無いのか？」

「なんだろう。取り込んで変換するものっていうと、オラクル変換かな。じゃあこの【十九針】って？」

「たくさんの針を作り出して連射する悪魔の魔法だ。^{スキル}体毛を変化させたり、口から吐いたり、方法は一つじゃないが」

畳み掛けるように質問を繰り返しながら、リツカは一つ一つメモを取り、咀嚼する。

シンも分かる範囲で答えてゆく。スキル名はシンの知っているものとはほぼ同じだったので、それほど戸惑うことはなかった。

そうしてリツカはいくつかの神機を眺め、大凡のデータを取り終えると最後に一つの質問をシンに投げかけた。

「さつきから言ってるアクマって、何？」

#036 アクマ? アラガミ? ゴツドイーター

「さっきから言ってるアクマって、何?」

悪魔とは何かと問われ、シンは困ってしまった。

概念存在。

形を得たマガツヒ。

人の心の海から出しモノ。

誰かが賢さかしらに語っていた言葉を思い出す。だが、そうした答えで納得させられるとは思えない。

とはいえリツカが納得できるような、詳細な説明をすることは不可能だ。なにしろシンにとって悪魔とは、当たり前前に存在するものなのだから。

「? 悪魔は……悪魔だ」

「具体的に」

「具体的……」

そう尋ねられても、何が知りたいのか、何を語れば良いのか、シンには分からない。だから思いついたことを、ただ口の端に乗せてみるしかなかった。

「悪魔は、魔法を使う。使わないやつもいるが、そういうやつは力が強い」
「魔法……」

悪魔は魔法を使う。

魔法とは神話・伝説などで語られてきた不可思議な力の具現、埒外魔のルール法だ。かのボルテクス界においては「闘争による新世界の選定」という原義に沿って、使える魔法も闘争にまつわるものに限定されていた。だが本来の悪魔たちの魔法は、もつと極端な災厄や気まぐれな祝福など、およそ理不尽な現象を引き起こすものが多い。

こうした強力な魔法は権能と呼ばれたりもするが、本質は同じものだ。

人修羅であるシン自身、前世世界の人類の足跡——様々な神話の元型エッセンス——を凝縮した神話素マガタマを介してその身に帯び、数多の魔法を使うことができる。

……とはいえその全てを自由に使えるわけではないのだが。

「それから……悪魔には役割がある」

「役割？」

「そうだ。悪魔はみんな、決められたことをするために生まれる。普段は勝手にしていても、決められた役割を果たす機会が来たら、必ずそれをしようとする。そう生まれる」

シンの言う悪魔の役割とは基本的に、悪魔の名が残る神話・伝説の再現だ。これは悪魔が自身の存在の維持・強化に必要となるマガツヒを集めるための行動でもある。

どうして神話を再現するとマガツヒが集まるのか。その原理はシンにもよく分かっている。

人修羅はマガツヒを生み出す人間の性質を持つがため、そうした必要がないらしい。故にシンはこれまで関心を持っては来なかった。

だからこれらの知識も、あの青肌ルシの大悪魔フアーの受け売りに過ぎない。

かつて人に生まれ、人修羅に変じ、やがて混沌王に成り果てたシンであったが、かの大魔王に唆され、創世を司るといふハゲ頭に喧嘩を売ってこのかた、ターミナル転輪鼓の恩寵は永劫に損なわれてしまった。

以来シンは「人ヒトに似て人に非あらず、悪魔に似て悪魔に非ず」と謳われるように、そのどちらにも馴染めないまま、あやふやな上位存在として今に至っている。

要するにシンは、悪魔の何たるかなど、よく分かっていない。

「人間は、違う。そうだろうか?」

「う、うん」

分からないまま断定する言葉には、無駄に力が入ってしまうものだ。

それは自分自身に言い聞かせるためなのだが、その圧にリツカは言いしれぬものを感じ、怯えるように生返事を返していた。

あの世界での記憶を思い出そうと、ぼんやりと視線を宙に泳がせるシンに、そのことに気付く余裕は無かったようだが。

ふと次のセリフを思い出したように、シンは「そういえば」と言葉を続ける。

「役割を与えられた人間が悪魔なのか、役割を与えられなかった悪魔が人間なのか。そんな事を言っていたやつも居た。俺にはよく分からなかったが」

もう名も忘れてしまったあの呪われた男は、いつもそんな、よく分からないことを喋っていた。

最後には世界の真実とやらを知ったらしいが、あの男はそれを抱えたまま無謀にもコトワリの戦いに加わろうとし……そして見向きもされずアマラに散った。

それがあの男の宿命だったらしいが、今となってはどうでもよいことだ。

「……なら、悪魔になった人間って」

「居た。だが人間になった悪魔は居ない」

そう。人間になった悪魔はいない。

いたとしてもそれは人間という悪魔になったに過ぎない。

「もしかして、君……?」

「ああ。俺は元は人間だった。だが今は違う」

ようやくとシン自身の分かる話題に戻ってきたことで、彼はリツカに視線を戻し、頷いた。

「なら君にも役割が?」

「ああ。俺にも役割はある」

彼の役割は、神を滅ぼすこと。

かの大悪魔と共闘すると約したその日から、彼はそういう存在となった。

「だから、お前たちの言葉を使えば、俺もまたゴッドイーターということになる」
「でもそれって……なら、ゴッドイーターって……」

リツカは思考する。シンの話とその背景にある理論を。

悪魔とは。

アラガミとは。

人間とは。

ゴッドイーターとは。

彼の言葉が正しいとするならば、ゴッドイーターとなると言うことは、つまり……

「ああ。たぶん、その考えは間違いじゃない。お前たちの言う「アラガミ」は悪魔だ」

#037 人というアラガミ

あの後すぐ、リツカの端末に連絡が入り、シンと共に二人はサカキ博士の研究室へと呼び出された。

何事かと尋ねれば「君たちが興味深い話をしていたからさ」と、盗み聞きしていたことを悪びれもしない。

もつとも、今やシンの挙動はアナグラ上層部の焦眉の元であることは、リツカも重々理解するところだった。加えてこの宝重・万里の遠眼鏡だ。傍観者スタルツァーを自称するペイラー・榊の興味を惹かないはずがない。

サカキは二人を散らかり放題の研究室に招くやいなや、机の上のコンソールを操作してドアをロックし、各種防諜システムをフル稼働させる。廊下側はドアにシャッターまで降りていたが、これはサカキ博士が研究室内で実験を行う際のことなので、誰かが通りかかっても「またか」と思うだけだった。

なお、シャッターの昇降は無駄に静音にこだわっているため、室内にいる人間には分からない。

シャッターが降りるまでの僅かな時間、サカキは内心ワクワクしているさまを全身で

表すように、落ち着き無くうろろと歩き回っていた。放っておかれたシンは何事かと首をひねったが、リツカに「いつものこと」と言われてそういうものかと状況を受け入れた。

そうしてシャッターの完全閉鎖を告げるランプが点灯すると、サカキは早速シンに質問を投げかけた。焦らされすぎたのか、その言葉はしばらく「あー」だの「あれ」だのと意味にならないものだった。

「落ち着いたらどうだ」とシンに促され、「座っていい?」とリツカに尋ねられて、ようやくサカキは来客を立たせっぱなしにしていたこと、自分の思考がめちやくちやになつていたことを自覚した。おほん、と芝居じみた咳払いを一つして二人をソファに座らせると、自分もその対面に座って身を乗り出す。

そうしてようやくと、まともな(?) 会話が始まった。

「それで、つまり君は『ゴッドイーターは悪魔だ』と考えているわけだね?」

「完全な悪魔じゃない。人間と悪魔のあいの子、悪魔人間くらいじゃないか?」

「そう思うのは、君がそうだからかい?」

「ああ……いや、今の俺は完全に悪魔のはずだ」

アクマニンゲン。

口にしてみると間抜けた雰囲気すらある響きだが、内実は結構えげつない存在だ。

悪魔はマガツヒを操るが、そのマガツヒは意志ある生命——即ち人間——の存在なくして生み出されることはない。マガツヒの供給源となる人間がいなければ、悪魔はいずれ干からびてしまう脆弱さを持つ。

だが、それらが一つになつたらどんなことになるのか。

誰よりも知っているのはそれを体現した人修羅である間薙シン、その人だ。

この世界がアラガミという驚異に曝さらされているからこそ存在を許容されるが、もしも平穏な世界であつたなら、きつと人間の驚異として敵視され、迫害され騒乱の種になるか、良くても兵器どうぐのように扱われるに違いない。

その時、数が質を圧殺するのか、質が数を蹂躪しんするのかは……やってみなければ分からないが。

「つまり、かつては違つたわけだ。それがその、悪魔人間アクマニンゲンになつて、今は完全に悪魔になつたと」

「俺がそう思っているだけで、本当がどうかは分からんが」

「いや。おそらくそれは、君がそう思っている、ということが重要なんだろう。悪魔とい

うものが君の言う通り、役割を与えられた存在であるなら」

本人にも分からないことを、まるで確信しているかのよう^に断言してみせたのは、はたして人類最高の科学者サカキ博士の知性によるものか、それとも傍観者^{スターゲイザー}ペイラー・榊の無責任か。

だが不思議とその言葉には、同席した者たちを信じさせる力があつた。

「どういふことだ？」

「つまり君は『悪魔になる人間』という役割を果たしている最中なんだ。あるいは、それを僕らに伝える役割を果たしている、と考えることもできるね」

「……よく分からん」

シンのあまりに率直な物言いは、しかし^{マッドサイエンティスト}狂的^{マッド}科学者の想定から漏れることはなかつたらしい。サカキ博士は「そうだろうね」と呟くと、その感情を見せない表情のまま席を立ち、デスクの引き出しから紙束を取り出した。

リツカは気が付かなかつたが、シンはそのとき、サカキが小さくため息を吐き、その手を僅かに戦慄^{わなな}かせていたことを見ていた。どうやらこの黒い傍観者でも緊張することはあるらしい。

だがそれ以上、シンが興味を向けることはなかつた。

彼はコトワリに至る者ではない。

シンの思惑になど囚われず、サカキは元の椅子に腰掛け、紙束を差し出す。

「僕は以前から、こんな事を考えている」

そう言つてサカキ博士が差し出した紙束の、最初の一枚に書かれたタイトルは。

* アラガミの行動原理と進化傾向 *

* 人間というアラガミ *

「博士、これは——！」

「落ち着いてくれないかな」

「でもこれは……いくらなんでも——！」

それを目にしたリツカが、色めきたつて前のめりに勢いよく席を蹴ると、サカキの前の机を強く叩きつける。そのまま机を押さえつけるようにして自制しながらも、彼女の目は、口は、今にも吠え掛かり噛みつかんばかりの形相だ。

だが睨みつけられたサカキはそれを両手で制すると、リツカにもう一度、席に戻るよ
う促す。

「いろいろ言いたいことはあるかもしれないが、質問は後にさせてくれないか」

「……はい」

リツカは不承不承といった様子で席に戻った。

「何か問題のあるものなのか？」

「だって……」

「君にとつてはそうではないのかも知れないが、リツカ君にとつて……いや、今この地球ほしに生きている人類にとつて、アラガミというのは許すべからざる天敵だ。そんなものと同類扱いしようとしたら、感情的になつても仕方がないことだと思うよ」

説明されたシンには、やはりあまり理解できない感情の働きだった。彼には既に、天敵と言える存在などどこにも居ないのだから。

ただ一つ、天敵と同類扱いというあたりで、忘れかけた記憶に引つかかるものがあつたらしい。もはや名前すら口々に思い出せやしないが、ボルテクス界の戦いの中には、やたら勝手に他人のことを決めつけ断罪したがる敵がいたような気がした。そして倒すべき仇敵、アマラ宇宙の中心に座する無尽光ハダの存在を思い出し、ああ、と納得したようだった。

「敵ひたと同類扱いか……それは確かに、腹立たしいな」

「それにリツカ君は無闇矢鱈に暴力を振るうような人間じゃあないからね」

「……要はあんたの性格が悪かったと」

「興味深い飛躍だけど、今は置いておこう。それより今はこの話だ」

シンの罵倒（？）に笑顔を浮かべたマッドサイエンティストは、紙束を手にしてそう言った。

#038 アラガミ進化論

「前世紀の一時期、『ガイア理論』という思想がもてはやされた事があつたのを知っているかい？ これはガイア、つまり地球を一個の生命体とみなし、その健康状態をいかに管理するのか、という考え方だ」

サカキ博士は口を開くと、自著『アラガミの行動原理と進化傾向』を片手に滔々^{とうとう}と語り始めた。よっぽど話したかったのだろう、その言葉に淀みはない。

「現在では石油資源の将来的な枯渇やオゾンホールの発生、そういった環境破壊が問題視され始めた頃の、一種の科学宗教^{カタルド}だったとされている。それによると、地表で繁殖する僕ら人類は、皮膚の常在細菌の一種に相当するわけだ。シツクザールは馬鹿馬鹿しいと怒っていたけどね」

突然はじまった解説に、リツカもシンも相槌すら打てず、ポカンと口を半開きに間の抜けた顔をしていたのだが。そんな事を気にするペイラー^{マッドサイエンティスト}・榊ではない。

「昔はこのガイア理論を根拠に、アラガミの発生を、地球が増えすぎた人類を調整するために生み出したものだ、なんて言い出した人間まで居たんだよ。『ガイア教』とか言っただかな？」

「でも博士、アラガミは手当たり次第で、調整なんて……」

「そう。だから彼らも、最初は乱高下しながら最終的には適正値に収束する、なんて提唱していたわけだ。まあ相手が通常の生物で、人類が一致団結して叡智の限りを尽くしていれば、その可能性もあったんだけど。」

でもアラガミは既存の生物からは決定的に乖離した存在だった。現実には収束するどころか、人類より先にその他の動植物を駆逐しちやっかし、人類は団結することが出来なかった。結果として、今では人類が限られた生態系を保護してのような有様になっている。だからこれは、ただの人間原理的妄想だった、と否定されたわけだ」

そうだ。地表は既に生態系と言えるものは残っていない、というのがこの時代の常識らしい。それらの大半はアラガミに捕喰ほじくされてしまったからだ。加えてアラガミの出現ポイントから外れていたことで、わずかに残っていた高山地帯の生態系も、ポルテクス界化世界が受胎したこととどめを刺されているはずだ。

「最初に発見された初期のアラガミ、いやその元となったオラクル細胞——旧オラクル細胞は、アメーバのような単細胞生物だった。原生の旧オラクル細胞は熱やオゾンにも弱く、今のように万能の耐性を持った人類の、生命の天敵ではなかったんだ」

「——でも」

「そうだよリツカ君。でも、だ。彼らは貪欲だった。弱者でいることに甘んじず、強くなる方法を模索した。それは人類が一般的に考える“知性”よりも原始的な確率論によるものだったんだけど」

「つまりは“数撃ちや当たる”か」

「……その言葉、カノン君には教えないようにね」

「?」

「忘れてくれ——話を戻そう。」

彼らはただひたすら、手当たり次第に他の生命を捕喰し、その機能を取り込んでいったんだ。おそらく最初は植物から。植物の毒性を使って小動物を。小動物の機動力で虫を、虫の能力で肉食獣を……いや、順序は分からないが、とにかくそうやって出来ることを増やしなから、オラクル細胞は進化していった。そうして個体が獲得した特性を種全体で共有することで、多種多様な耐性を持つキラ^{天敵}因子になってしまった」

「……………」

マッド・サイエンティストのイメージと異なり、サカキは意外と話がうまかった。おそらくは何年も脳内でシミュレーションを繰り返し続けたのだろう。身振り手振りをまじえたアラガミの進化史などは、なかなか聞かせるものがある。シンは黙って聞き入った。

「そして、それに合わせてアラガミも進化した。旧オラクル細胞の発見からほんの五年ほどのことだ。

この「進化」というのも、他の生物とは異なっていてね。彼らは自身の細胞を分裂させて、捕喰した機能を再現するのではなく、他のオラクル細胞と群れをなして、その役割を分担することで擬似的に機能を再現している。

アラガミはあくまで単細胞生物、オラクル細胞が集まった「群体」に過ぎない。新種のアラガミ、というのはそのオラクル細胞の集まり方、設計図を変えただけで、オラクル細胞そのものは、耐性情報こそ強化されてはいるが、その性質自体はほとんど変化がない」

「通常の進化では時間がかかりすぎたんだろうな」

フエンリル職員として速成教育を施されたシンにも、アラガミの性質については先日習ったばかりの話だ。ようやく聞き覚えのある内容になったことで、思考に余裕が出来たのだろう。これまでの相槌のような言葉と異なり、彼なりの理解を口にする。

これまでの話に殊の外、知的好奇心を刺激されたのかもしれない。この世界に来てから、過去の体験については大分忘れてしまったようだが、知識まで失ったわけではないのだ。シンは自身の知る歴史とのつながりを考えながら、このボルテクス界の在り方について考えていた。

隣に座るリツカにとっては、ソファに深々と腰掛けていた彼が、いつの間にかわずかに前傾姿勢前のめりになっていられることが、不思議だった。これまでの彼は、粗野でこそ無かったものの、実践主義、現場主義のゴツドイーターに、より近い印象を持っていたから。

進化論に沿ったそれを、サカキはその糸のような目を見開いて驚きを表した。そうして我が意を得たりとばかりに大きく頷き「そうなんだろうね」と同意し、話を続けた。

「それまでのアラガミは、他の動物の姿をそのまま模倣していた。だから外見からは判断しづらかった。最初のアラガミの氾濫とされる南米でのパニックは、これが原因だっ

た。

人類と都市内で共存していた、小動物に擬態したアラガミたち。それが外から迷い込んだ野生動物に擬態したアラガミと接触して、一気に変容した。野生動物の身体能力を得て、人類の捕喰を始めたんだ。そして彼らはこれまでとは異なる進化を見せた。現在のオウガテイルやサイゴードのように、存在しない動植物の姿をとるようになったんだ」

「それ、ボクも聞いたことがある。人間の攻撃に適応したとかつて」

「そうだね。そう言われている。既存の銃火器、質量兵器に加え、生物兵器や化学兵器も併用された駆除作戦だった。それに対抗するため、アラガミはこれまでに存在しない動物になるしかなかった、と考えられている。つまり状況に応じて選択し変化する、極めて高い環境適応能力を発現させたわけだ」

「だから、人間というアラガミ、なのか？」

「今ので分かったのかい!？」

サカキは驚いたように大声を上げるが、シンは気にする風もなく頷き、答える。

「今の話、そのまま人間の歴史そのものだろ。個人が群れ、集落を作り、社会になって役

割を分担し、「敵」に合わせて在り方を変える」

「……そうなの？」

だがシンの言葉に、リツカは首をひねる。この時代に生まれた彼女は、そんな話は聞いたことがなかったからだ。

「敵を環境と言い換えれば、もつと妥当性は上がるね」

「ヒストリア ソシエタス 歴史とか社会とか、習わなかったのか？」

「……知らない」

サカキが肯定し、シンの問いにも、リツカはただ首を振るばかりだった。

とはいえ、それも無理のないことだった。シンの生きた時代であれば、彼女は15歳——中学卒業という若さで技術者として現場に立ち、大人たちに伍して仕事をしてきたのだ。それだけの技術と知識をその若さで身につけようとすれば、その他の学習は疎かになっても仕方のないこと。むしろ当然とすら言える。

シンの教養に驚いたサカキの方が、特殊なケースなのだ。

彼はまだ人類文明が完全に衰亡してしまう前の時代を、辛うじてではあるが、知って

いる。当時の最高学府で学んだ彼にとつても、歴史学などは高等教育であつて、人間しか学ぶ機会が無いものだった。20年前ですら、文明は既に近代レベルまで後退してしまつていたのだ。10代の少年にしか見えないシンが、どこでそんなことを学ぶ機会に恵まれたというのか。

彼が本当にどこかのシエルター出身で、彼と同じ教育を受けた人類が生き残つていたら……そして彼らを研究員として招聘できたなら、自分の研究はどれほど捗つたことだろうか。サカキは埒もない願望を思い浮かべた自分の脳に同意し、知らず肩を落としてしまう。

「シン君。君、本当は学者だつたりしないかい？」

「少なくとも知識のために頭を増やすような、書痴ダンタリアンの悪魔ではないはずだ」

0 3 9 最終捕喰説

「ダンタリアンという『ゴエティア』だね。この時代にはもうフェンリル本部にしか残っていないような趣味的なデータをよくもまあ。いや君は本人を知っているというところか」

「ああ」

「僕にとって今の君は、まさにダンタリアンそのものと思えるんだけどね」

ダンタリアンとは由来不明の魔導書『ソロモンの小さな鍵』第一の書『ゴエティア』に登場する、ソロモン王に仕えた七十二の悪魔のうちの一柱とされる。あらゆる知識を司り、人の心を読み、それによって人を操る権能を持つという。

よしてくれ、とシンは小さく否定を口にした。

サカキも「ふむ」と一息つくくと、再び背もたれにその身を預けて仕切り直しの姿勢を見せた。

柔らかな微笑んだ顔には、元の糸目が戻っている。

「ところでアラガミは何故すべて捕喰し尽くしてしまうんだろう?」
「どういうこと?」

「アラガミが地球上の自然を捕喰し尽くしたスピードは異常だ。自然界にオラクル細胞を発見したのが2046年。49年に南米大陸での大氾濫。翌年には世界各地の大都市を中心に大量発生して、それから人類の撤退戦が始まった。たった五年のことだったんだ。それから十五年で地球の表面のほぼ半数が捕喰され、2065年——三年前だね——連合軍の作戦が失敗すると、組織的抵抗ができなくなった人類は、あつという間に各地のフェンリルの都市ネストに押し込まれた。地球上で彼らのエネルギー源となるものは、もうほとんど残っていない」

「動物は摂取上限で脳から抑制が働くんだったか」

「いわゆる満腹感だね。アラガミにそもそも胃に相当する器官があるのかは分からないから、そのあたりはまだ答えは出ていない。アラガミにとつては消化器も選択的な機能の一つだろうから、たぶん、持つものも持たないものも居る、というあたりに落ち着くと思うけど。どちらにせよ、彼らは過剰に栄養を摂取し、爆発的に分裂増殖していった」

サカキは手元の紙束を何枚かめくると、二人に一つの線グラフを指し示した。

「これは概算値だ。地域ごとの酸素量と植生をベースに、アラガミが得たエネルギー量を試算した。空が赤くなるまで、軌道衛星との連絡が途絶えるまでのデータだが、見ての通り、既にグラフは減少傾向に入っている」

食べるものが無くなれば、生物が生きていくことはできなくなる。

アラガミがオラクル細胞の集合体、群体であるからといって、オラクル細胞自体が単細胞生物なのだ。いかに異常な生物であったとしても、エネルギーを補給しなければならぬことに代わりはない。

「人類もそうだったな。20世紀、石油が無くなれば現人類の文明は終わりと言われていた。原子力の開発で乗り越えたと思っただが、水資源が問題になった。こればかりはどうしようもなかった」

「人間にとって水は必須だったからね。海水の濾過による飲料用水化が可能になって、そこに電力が必要だったら同じことだ。電力と海水、石油、ウラン、結局は奪い合いになった。地球上の人口は頭打ちになり、徐々に減少傾向になっていた。フェンリルも元は製薬会社だ。電力は命綱だった」

「同じ道を辿っているというのか」

「ガイア教の、適正数への調整って考え方は、たぶんこの試算が元になっていたんだろうね」

一人蚊帳の外に置かれる形になったリツカは、これまで辛抱強く黙って見つめていた。

だがどこか楽しいに言葉を交わす二人に、段々と苛立ちが強まっていくのを抑えきれなくなっていく。

それでも激発しなかっただけ、彼女は人間が出来ているといえる。

「つまり、どういうこと?」

「アラガミは自分で自分の首を絞めているってことだよ。地球上の生物すべてを捕喰してしまったら、アラガミ自身も滅びるしかないんだ。どうしてそんな生物が生まれたのか。十字教が終末説を唱えたり、メシア神の子の再来を祈ったのも、分からなくはないね」

「メシア?」

「ああ、いや……古い友人が信者だったのですね」

気まずそうに目を背けるサカキに、シンは興味を惹かれた。この男はこれまでシン

に、マッドサイエンティスト偏執的科學者らしい好奇心と、自身が希望する通り傍觀者スターゲイザーの無責任な姿しか見せなかったからだ。

メシア。

神の子。

それはシンがかつて人間だった頃に生きていた世界の残滓だ。およそ二千年前、かつての世界のコトワリを啓いたとされる人間。シンは本来、彼の後継者となるはずだった。

そんな人間の再来を祈った誰かが居た。

もしかしたら現在この世界がボルテクス界化しているのは、彼らが受胎の儀式を行ったからかも知れない——シンの時代の、あのM字ハゲのように。

であるならば、コトワリを持つものがそこにいるはずであった。

だが今はリツカが先だ。

時間はいくらでもあるのだからと、シンは鷹揚に構えることにした。

「それで博士。もしこの計算が合っていて、アラガミの数が減っていたとしたら、この後の地球ほしはどうなるの？ ボクたちは？」

「アラガミはエネルギーを補給するため、ネストを襲うようになるだろうね」

「そんな！」

「それしかエネルギーを補給する手段が無くなっちゃった。そうしたのは彼ら自身だけだ。あるいはオラクル細胞同士がエネルギーを融通し合うことはあるかも知れない。ほら、神機でも出来るだろう、オラクルパワーの譲渡。まあそれは共食いと同じことだけどね」

「共食いを繰り返したら、どうなる？」

「そうだね。そうなったら、これまで捕喰した全ての生物の情報を統合した、超アラガミ」とでも言うべきものが生まれるのかもしれない。すべての生物の頂点だ。どんな存在になるのか、興味があるね」

黒衣の男の無邪気な笑顔と、作業着の女の沈鬱そうに眉をひそめた表情に、見事な対比だとシンは一人、呆れ返った。

そうしてシンが、結局この男は自らの好奇心が全てなのかと、評価をまた一段下げようかと思っていたその時、サカキは右手の人差し指を一本立てて、「もう一つ可能性がある」と言い出した。

「可能性って？」

「オラクル細胞のエネルギーとは、要するに熱のことだ。ならばもつと膨大なものがあるじゃないか」

「どこに?」

「このずつと下。マグマだよ。それに彼らが気付いたとしたら。彼らがそれを実行しようとしたら。つまり彼らがこの地球そのものを捕喰したとしたら、果たして彼らはどんな姿に変化するんだろう?」

星がまるごと受胎したこの世界で、果たして地下にマグマが眠っているのかは、シンにも分からない。

だがおそらくは、受胎し裏返ったこの世界の中心にある、あの輝くカグツチに熱はない。またアラガミのコアにもマガツヒがあったことから、オラクル細胞のエネルギー源は、現在、マガツヒに置き換わっているのではないだろうか。

だとすると彼らの最終目的地もやはりあの無尽光なのかもしれない。

どうにかしてあそこに再び赴き、またあの石頭を殴り飛ばさなければならぬのだらうか。

「便宜上、僕はこれを最終捕喰と呼んでいる。理論上の地球ほしのおわりの終焉だ」

シンの思索をよそに、
星^{スター}の^{ゲイ}観^{イザ}察者は最後にそう締めくくった。

第四章 喰人転生編

#040 エリック・デア＝フォーゲルヴァイデ

ゴッドイーターになったばかりの新人、エリック・デア＝フォーゲルヴァイデは今年で14歳。簡易検査で適性七割イェロを叩き出した有望株だ。だが彼はこれまで適合試験を受けずに過ごしてきた。

それというのも彼がまだこの時代2068年においても未成年とされる年齢であり、フェンリルの関連企業の御曹司として何不自由なく暮らしていて、そして何より周囲がそれを認めなかった（時には露骨な妨害工作まで行われた）からなのだが、正義感に溢れる彼自身はそれを良しとはしていなかった。

特に生まれながらにして難病を抱えてしまった最愛の妹の存在は、彼の精神を厳しく練磨した。

父の財力、権力に守られ、かつ——妹と違い——健康な肉体として生まれた彼は、やがて自分を厳しく律することを自身に課すようになったのだ。

妹の治療法についてアラガミ研究に活路を求めた彼は、激戦区であり新型アラガミとの遭遇報告も多く、そしてアラガミ研究の第一人者が揃った極東支部に「視察」に現れ

ると、ずっと機を窺っていたのだった。

そして大地が閉ざされ天頂に忌々しいカグツチが輝くようになったあの日も、彼はア
ナグラに居た。

すわ好機と思つたものの、今度は激変した状況に周囲が対応できず、名目上でしかなかつたはずの「視察グループの最高責任者」の肩書きが、実態を伴つて彼に襲いかかつてきた。管区のほぼ全てが荒野と化した極東支部と異なり、フエンリル本部のある北欧管区や大陸各地の造山帯は、アラガミの被害も少なく生産力を残していたのだ。少年はその生産力の一翼を担う企業の御曹司である。資産も権限も、緊急時だからこそ無視できるとではない。

アナグラに保管されている一部物資の扱い、期間満了となる一部契約の更新手続き、人手の足りないアナグラ各部署への部下の臨時出向、更には引き抜きヘッドハンティングへの対応など、それから二月ばかりの間、彼が自由に行動できる時間などこれっぽっちも無かつた。

母の影響を強く受け、派手な装いと奇矯な振る舞い——彼はそれが周囲を笑顔にする
と信じて疑わない——を好むようになったエリックだが、内面は極めて真面目な少年
だつた。貴種ノブレスの果たすべき義務を自身に課すその生き方は、時に不器用で周囲の迷惑と
なることもあつたが、不思議と人々に嫌われることはなかつた。

故に彼は、彼個人へと向けられる作為に対して、どこか不用心なところがあった。

そうして彼は、暴走した研究員の甘言に乗ってP53+偏食因子適合試験に協力し、ゴツドイーターへと成り果てたのであった。

* * *

P53プラス偏食因子の対一般人投与実験は、よりにもよって関連企業の御曹司に対して行われてしまった。シツクザールがそのことを知ったのは、被験室の使用ランプが点灯していることに気が付き、急いで駆けつけた先で神機を掴んで気絶していたエリックを見つけた時だった。

日々の雑務に追われながら、悩みに悩んで救護室の世話になったシツクザールの心労は、一人の研究員の暴走によって無に帰した。フェンリルが即効性の胃痛薬を開発済みであったことは、彼にとって僥倖だったのか、それともその逆か。

一罰百戒。いや、この場合はより直接的に殺一警百と言うべきか。

実行した研究員は、彼自身が自己を弁護するために唱えた「科学の必然」に従い、適合率一桁ブルに対する投与実験の「被験体」として、世界初の貴重な記録映像となりはて

た。

そうして今、新たな悩みが人の姿となってシツクザールの前に座っている。

極東支部長はこれまで取引相手として何度と無く折衝を行ってきた少年に、上司として命令することになった現状に頭を抱えたかった。

「まずは偵察班で、基本的な立ち回りを学んでもらう」

とはいえエリックには生き残ってもらわなければ困る。

あるいは帰還を強行したことにして存在を抹消することも検討したが、人の口に戸は立てられぬもの。特に多くの職員と交流を持っていたエリックのような存在に何かあれば、箝口令を敷いたところで秘密はどこからか漏れてしまうものだ。

シツクザールは彼が少しでも生き残れるよう、危険の比較的少ない偵察班への配属を決定した。

その後、二、三の連絡事項を通達すると、シツクザールは大きく息を吐いて柔らかな声で付け加える。

上官という立場、それも状況によつては彼に死に等しい命令を出さなければならぬ

立場になってしまったとはいえ、必要のない波風を立てたいとは思わない。この場で和解など出来ようはずもないが、その端緒は掴んでおきたかった。

「……お互い意に沿わぬことになってしまったものだが、ゴツドイーターとしての義務さえ果たしてくれば、とやかく言うことはない。健闘を祈る」

「これも力持てる者の義務というものでしょう。僕はこれからこの力を持って、守るべき人たちを守ります。あなたがたもそうであることを願うばかりです」

背筋の伸びた赤髪の少年は、普段のおちやらけた態度からは想像もできない真摯な面持ちで、これから上司となる白衣の指揮官に、ちくりと皮肉を一刺しした。

* * *

「よろしくお願ひします!」

「偵察班の任務は地味なものが多いが、だからといって気を抜くなよ?」

「はい!」

かくしてまずは偵察班のメンバーとして立ち回りを学ぶエリックだったが、向上心のある後輩としてすぐに先輩ゴッドイーターから可愛がられるようになっていた。

そもそも近年、激化の一途をたどる極東支部では、ゴッドイーター部隊に欠員が出ないようにするだけで一苦労だ。周縁集落で実施する簡易検査での適合率の基準を下げながら、どうにか戦死者を下回らないように調整してきたため、新人たちの素性はあまりよろしくない。

サテライト出身のゴッドイーターたちは、故郷への食料供給をストップされないよう差し出された人身御供か、特権者になりたかっただけのお調子者、日雇い労働感覚の者などロクな人材がない。だから命令不服従の新人に現実を思い知らせることが、指導係が最初にやらなければならないことだった。

それに比べればアラガミへの復讐心で、前線へ出たがるくらいは可愛いものだ。

ただ、実験を実施することしか頭になかった研究員の暴挙で、彼に接続された神機がブラスト型である点だけは、どうにかならなかったのかと悔やまれている。

第二世代の射撃型神機の中でもブラスト型は攻撃力、特に大型アラガミの硬い外殻の破碎を目的とした重砲で、現在知られている大型アラガミのヴァジュラや、中型のブルグ・カムランなどに無類の強さを発揮する。だが大ぶりで射程距離が短く連射性能も悪

い、接近しなければ使えないのに機動力を奪ってしまう。一人ひとりが貴重なゴッドイーターが扱うには、欠陥だらけの設計だった。

そんな中でもどうにか使えるようにしようと、開発局では日々試行錯誤が繰り返されている。だが試験機として作られても、使うゴッドイーターがいなければ無意味だ。そんなわけで、開発局には使用者未定のブラスト型神機がいつも残っていた。阿呆な研究員はそれに目をつけ、勝手に持ち出してエリックに与えてしまったのだ。

命知らずの年若いゴッドイーターや、アラガミに強い復讐心を持ったゴッドイーターたちが、我が身を省みずに振り回すのがブラスト型だ。その砲撃は硬い外殻を持たない小型のアラガミにはあまり意味がなく、本来なら安全第一の立ち回りを覚えるべき彼という存在と、余りにミスマツチな神機だと言える。

彼の教育を任された偵察班では頭を抱えたことだろう。だが放置すればそう遠くない未来に、アラガミに突撃して命を落とすことは目に見えている。彼がそういう男であることは、一度任務に同行すれば誰にでも分かることだ。

たとえばアラガミを交戦ポイントまで釣り出すための囮役が危機に瀕した時、我を失って飛び出してしまうことが何度か繰り返された。

世界の大半が荒野と化してしまっただけとは言え、極東支部周辺もまた旧首都圏に属する

エリアであり、かつての住宅、工場、商業施設など、建物が密集している場所も多い。アラガミの大きさや数、参加するゴッドイーターの数と戦術、任務目標が討伐か捕獲かなどによって戦場を選ぶことは日常的に行われている。

その日も二人組^{ツーマン}で任務に当たっていたところ、囷になって釣り出すはずだった先輩ゴッドイーターが、不覚にも瓦礫に足を取られて転倒してしまった。もちろん囷役とは言え距離はとっていたし、すぐに立て直すことは出来たのだが、エリックは待機することが出来ず、追いついて来るアラガミの前に飛び出してしまった。

エリックはまだアラガミを捌きながら高速移動する技術を身に着けてはいない。だからこそスナイパー型でもないのに釣り野伏などやっていたのだが、今更そんな事を言っても仕方がない。開き直ってその場で撃退することにしたのだが、当然ながらこれは無茶を要する選択だった。

結果として、指導係のゴッドイーターは負傷により二週間程度の戦線離脱^{バカンス}という、手痛いしっぺ返し^{ツレゼン}を食らう羽目となる。

……はずだった。

#041 こぼれ落ちるもの

シンとリツカがサカキ博士からレクチャーを受けていた、ちょうどその時。シツクザールは執務室で、ナビゲーターの竹田たけだヒバリから「ツーマンセルで巡回偵察中だったゴツドイーターの反応が反応喪失した」との報告を受けていた。

カトール・鳩場はとば——偵察兵。

エリツク・デアーフオーゲルヴァイデー——偵察兵。

ヒバリは彼らが巡回偵察任務中、不意の襲撃を受けたのではないかと言う。

反応喪失とはゴツドイーターに付けられた腕輪から送られるバイタルデータが途絶えたことを意味する。これは腕輪または神機の破損、神機と腕輪をつなぐケーブルの切断、またはゴツドイーターの死亡によってのみ生じる現象だ。

腕輪が破損すれば、致命的だ。ゴツドイーターは腕輪を介して定期的に偏食因子を注入し、肉体がオラクル細胞に必要以上に侵食されることを防いでいる。腕輪が壊れてしまえば偏食因子を注入できなくなり、じきに腕輪のオラクル細胞に全身を侵食されてしまふことになる。それはつまり、アラガミ化してしまうということだ。この場合、急行

したゴッドライターはそのまま処刑人としての役割を負うこととなる。

神機が破損した場合については、なにしろこれまで記録がなかったので、よく分かっていない。つい先日、一件だけ確認されたケースについても、極東支部の上層部によって機密扱いとされ、知るものは当事者を除けばあと数名しかいない。

それまではおそらくは腕輪の破損と同じことになるだろうと思われる。だがつい先日起こったその一件の当事者は、何事もなかったかのように未だにケロッとしている。

当事者とは言うまでもなく、問難かんなきシンのことだ。

神機と腕輪をつなぐケーブルの切断事故は、確率的にそれほど高くはないものの、発生件数はそこそこ存在する。主に適合率の低いゴッドライターに発生する現象なので、適合率70超のエリックに発生したとは考えにくいのだが、可能性はゼロではない。このケースであれば、ゴッドライターは生存している可能性が高い。

最後の項目については、言うまでもないだろう。

ナビゲーターはあくまでインカムによる音声情報と、腕輪から発信されるバイタルデータの受信状況でしか、現場の状況はわからない。以前はこれにナビゲーション用のドローンカメラからの情報もあったのだが、資材不足の現在では重要任務を除いて使用されていない。

そして当然、ただの巡回偵察任務中だった二人には、配備されていなかった。

であるなら、ごくごくわずかながら生存の可能性は残っている。

シツクザールは胃痛に顔を歪めながら、すぐさま現場に第三部隊を急行させた。わずかな救助の可能性に賭けて。もし無理だったとしても、せめて腕輪と神機を回収しなければならぬ。こんなことなら適合試験の時に処分してしまった方が良かったのではないかと、わずかに後悔しつつ。

フエンリル極東支部——通称アナグラ——のエントランスは、沈鬱な空気に包まれていた。

* * *

「ところで話は変わるけど——」

その頃、シャッターが降ろされ外部との連絡が一切遮断されている室内で、サカキ博士はまだ話を終わらせる気がないようだった。

「さつき覗いてたアレ。あれは何なんだい？」
「あー」

説明が難しいなど、シンは先程リツカに通じなかったことを思い出して口ごもった。代わりにリツカが説明しようとする。

「スマート-googleみたいに、インフォメーションが視界にオーバーライトされるんですよ」

インフォメーション
「情報？　どんな？」

「……神機の」

「うん、神機の……は？」

「ですよ。そうなりますよね」

サカキの驚愕の表情に、リツカは大きく溜息を吐き出すと、シンに視線を送りつつ、これ見よがしに大きく頷いてみせた。目は口ほどに物を言う。うつすらと隈の浮かんだ彼女の両の眼は、「どれだけ価値のあるものか、これで分かったよね？」とシンに訴えかけていた。

当のシンはと言えば、リツカの無言の抗議をまるで理解せず、オウム返しに頷き返したり、リツカをじっと見つめたりしていたのだが。

「間薙君」

「？」

「見せてくれ」

「ああ」

そうなるだろうとは思っていたので、シンは軽く握った右拳の中にそれを思い浮かべた。ただそれだけのことで、果たして世界に二つと無い宝重ほうちゆう・万里の遠眼鏡がその姿を現した。

見た目は金銀螺鈿、贅を凝らした彫金細工の施された円筒である。細工物としてはそれなりの価値がありそうではあるが、いかんせんシンの大きな手で握ればほとんど隠れてしまうほどの大きさしか無い。だがそのちっぽけな筒が、戦いの道行きでどれほど役立つてくれたことか。

あのボルテクス界のルールで、一体の悪魔は最大でも八つまでしか権能スキルを持つことが出来ない。だがこの宝重はその権能の一つである「アナライズ」と、全く同じ力を持つ

ているのだ。それが何度でも使えるというのだから、まったく破格である。

他に「マハンマ」^{集団破魔}の権能を代替する破魔の霊扇、「サマリカーム」^{完全蘇生}の権能を代替する反魂神珠といった宝重があったのだが、どうしたわけかシンが呼び出してみようとしてみても、これらを取り出すことはできなかった。やはりなにか、こちらとあちらの違いのようなものがあるのかもしれない。

閑話休題。

シンがそうして万里の遠眼鏡を取り出してみせると、サカキ博士は再び驚き、話はあっさり脱線する。

「……どういう原理なんだい？」

「ある男が言うには『粒子化している』……ということらしいが、俺にもよく分かってはいない。見えないポケットから取り出してる感覚だし」

「それが装備に応用できれば、作戦の幅は広がるよね」

それまでどうにか二人の話を咀嚼するだけで手一杯だったリツカも、こと道具の話となると目を輝かせて参戦してきた。

「そうだな。……実際、こういうことはできるようになる」

そういつてシンは掌を上に向けて差し出せば、その掌からピンポン玉ほどの大きさのくすんだ煙結晶がボロボロと大量にこぼれ落ちてゆく。テーブルの上にこぼれたそれの上に更に降り積もり、やがて床にまで広がっていった。

一つ一つは小さくても、塵も積もれば山となる。ピンポン玉を九十九個も積み上げれば、それはもはや人体のどこかに隠しておける量ではない。

「うん。もうこれ、手品の線は完全に消えたね」

「これは何だい?」

その理不尽な光景を目の当たりにして、リツカは疑念を振り払い、サカキは新たな疑問を口にした。

「^{ませ}魔石と呼んでいたが、要はマガツヒの結晶だ。悪魔のカンフル剤だな」

「……………」

魔石とは、ボルテクス界で最もポピュラーな回復薬である。マガツヒの結晶であるそれを、悪魔たちは砕いて摂取する。飲み込むものもいれば傷口から取り込むものもある。シンは仲魔たちの傷を癒やすため、その馬鹿げた握力で粉微塵に砕いてから、相手にふりかけて使っていた。

悪魔の体内に結晶することがあり、悪魔が消滅する際に残留する^{ドロップ}ことがある。^{ジャンクシヨップ}雪ダルマの店に行けば無尽蔵に転がっていた、安物の^{アイテム}消耗品だ。

「他にもある。たとえば——」

今度は魔法石を、各種治療薬を、魔鏡を、宝玉を取り出してみる。アマラ深界での最後の戦いで散々に消費したため、道^{ちがえしのたま}反玉ですら数を減らしていたが、それでもまああのジャンクシヨップで買えた程度のものは一通り揃っている。

当然テーブルからこぼれ落ちたが、シンにとっては無価値なものばかりだった。

0 4 2 そして扉は開き

食料や薬品、グレネードのような補助武装、野営装備など、ゴッドイーターの装備の多くは、長いこと人間の正規軍のものを流用していた。これは人類世界がまだ辛うじて残っており、フェンリルが営利企業組織としての建前を捨てることが出来なかったからだ。

もしもフェンリルが現在のようになり人類世界の統治者として活動していたなら、連合軍はその肩書と建前によってフェンリルと敵対していた可能性が高かった。無論そうならばフェンリルが勝つたことは疑うべくもないが、それに伴う損害は致命的なものになりかねなかった。

そうして人類文明を道連れに衰退していった連合軍が、自らの存在を賭けて挑み、完全に壊滅した最後の反攻作戦から三年。世界各地のフェンリル支部とその周辺の都市^{ネスト}を再建し、配給食料とパッチテストを始めとする支援体制、ひいてはフェンリルによる支配体制を確立した。

これでようやくフェンリルは、自前の戦力であるゴッドイーターとその装備の開発に、注力できるようになったのだ。

それがここ、西暦2068年のフェンリル極東支部の現状であった。

今、シンの共にこの部屋にいるのは、装備開発部門の俊英・楠くすのきリツカと、神機ゴツドイーター開発部門長のペイラー・榎サカキ。そしてその目の前に、未知の道具がある。

「この玉は一体——」

「あの、これは——」

「それはどういう——」

「こつちと、これと、これと、あとこれも——」

こうなることは、想像して然しかるべきだった。

「あー……」

まだしばらくは、この部屋のシャッターが開くことはなさそうだった。

* * *

「じゃあ博士、お先にー」

「ゆつくりで構わないからね。なんなら私が行くまで待つていてくれて構わない。いや
そうしよう、それがいい。そうしてくれるなら——」

「いえいえ、お忙しい博士のお手を煩わせるなんてー」

カラーケースを積んだ台車を押しながら、リツカは未知の道具おたからたちを種々の検査にかけるため、一足先に部屋を出ることになった。

これからの作業に目を輝かせる彼女に、にこやかに手を振られたサカキといえ、執着を振り切るように積まれたカラーケースから目を逸らしてなお未練たらたら。先んじられることを諦めきれない様子でぶつくさと呟いたかと思えば、腰を浮かせ、手を伸ばして引き止めにかかっている。

「それじゃあシンくん、ごゆつくりー」

「ああ」

「嗚呼……」

リツカが退出すると、再びシャッターが降り、部屋は密室となる。

しばらくは名残惜しげにドアの方を見つめていたサカキを前に、シンは待機モードへと推移した。そうしておけば、定義した外的刺激に晒されるか生命の危険に陥るまで、何時間でも何日でも何年でも待つことができるからだ。今のサカキは、シンにとつてさほど興味を持てる対象ではない。

「それで、マガツヒってというのは何なんだい？」

どれほど時間が経ったか知らないが、ようやくシンに視線を向けて口を開いた。

予想していた幾つかのパターンのうち、最も核心に近い質問だったことについては「流石の頭脳」と内心称賛しつつ、しかし正確な答えを持たないシンは頭を悩ませた。

「禍^{マガツヒ}ツ霊は……無機物と有機物を分かつもの、らしい」

「ふむ。それはつまり、生命エネルギーってことなのかね？」

「おそらくは。アラガミも、おそらくそれで動いている」

「それはどういう——」

シンがオウガテイルに「吸血」の権能を使った際、確かにコアからマガツヒが漏れ出し、それが尽きたときにオウガテイルは崩れ去った。

リンドウとのアナグラまでの道程でも、リンドウの神機がアラガミのコアを打ち砕いた時にも、マガツヒの漏出とコアの崩壊は見ている。

恐らくは世界の受胎——ボルテクス界化が原因だろう。

「アラガミの持つ不自然な能力について、そのエネルギー源については謎だった。いや正確にはオラクル細胞が放出する電磁波のパルスと、異能を使う際との同期性から、恐らくはそのパルスを発生させるものがエネルギー源だろう……というあたりまでは予想されていたんだが……」

「だが？」

「物質や現象としては観測できていなくてね。あとはオラクル細胞を加圧することで、これが大きな熱量として放出されることが、経験則として分かった程度だったんだ。これを応用して遠距離型神機を作ったわけだけど、まあ、我々はそれくらい、アラガミについて分かっていない」

「それは仕方がないんじゃないか？ 技術なんてそんなもんだらう。理屈を知らんでも

ハサミで髪は切れる」

「それはそうなんだけど、そこで留まれないから僕は科学者なんだよ」

「分かる気はするが……」

「ただ、一つ気になっていることはあるんだ。もしかしたら、という程度の、仮説でしかないんだけど——」

マッドサイエンティスト

道 楽 者の独演会に、流石のシンもいささか食傷気味になっていた。楽しいのだからということとは膨れるマガツヒを見れば分かるが、シンの科学知識など、二十一世紀初頭の日本で大学受験に受かるかどうか、という程度が関の山だ。

世が世なら羨望の的となっただろう、サカキ教授の個人講義ではあったが、今この場

で受けるシンにしてみれば、説明不足で断片的にしか理解できない。

猫に小判。

豚に真珠。

そんな言葉が、シンの脳裏をよぎっていた。

どんどん専門的な話へと転がってゆくサカキ博士の言葉モジャモジャ頭を聞き流していると、流石にサカキの方でもシンの生返事に気が付いたのだろう。ようやく言葉を止め、バツが悪そうにすっかり冷めてしまったマグカップに口をつけた。

そうして半ば無理矢理に人心地つけたところで、シンが何気なく手元で弄んでいた筒——宝重・万里の遠眼鏡——に、その意図が伝わるように熱視線を注いでみせる。眼鏡のレンズを調整しながら、過剰にアピールしながら、悪びれもせずサカキは再び口を開く。

シンにしても、分かりやすくしてくれた方がありがたかった。

「で、それなんだが」

「実際に見てみればいい」

「それもそうだね。少し、気分転換を兼ねて外に出るとしよう。これで神機を見れば良いんだったね？」

「ああ」

そうして二人は遂に部屋を出ると、奇妙に静まり返った廊下をエレベーターでエントランスまで。

神機保管庫へと足を向ける二人の前から、一台の神機が自走台車に載せられ運ばれて来るではないか。

「あれでいいか。どれ——」

そうして博士は手にした円筒を右目に当て、移送中の神機を不用心に覗き込んだ。

0 4 3 幻想浸食

——人間ともがらを捨てた人修羅ヒトシユラ

——破壊ちからを求めた人修羅

——何故に今また帰り来た

——滅ぼし足りぬか人修羅

——喰らい足りぬか人修羅

* * *

「早く下がれ——！」

瓦礫だらけの戦場に、男の叫びが響き渡る。

「助けます！」

視界がひどく狭かった。

気付けば自分は瓦礫の上に寝転んでいて、上下に狭い視界の中に、駆けてくる誰かの足ばかりが見えている。

「いいから下が——っ」(がなりたてる声がうるさい)

まるで耳元で叫ばれているようなそれを疎んじ、耳をふさごうと手を動かす。

カクッ

立ち上がるためについていた手を急に耳元にやろうとしたため、体勢が崩れて再び瓦礫の上へと倒れ込んでしまった。大口を開けていたため、勢いよく打ち付けられた歯茎が痛む。

(……なんだ、叫んでいたのは私か)

「先輩！」

(騒がしいなあ)

エリックク……なんとか。やたら仰々しい名字の後輩は、正義感に溢れる新人ゴツド

イーターだ。

そう、やつの振る舞いはまったく正義感に溢れている。

今も囿わとりである俺がちよつと躓いて転んだだけで、思わず狙撃ポイントから駆け出して来てしまうほどに。お陰でこの一時間の苦労は水の泡だ。せつかくコンゴウの群れから苦労して一匹だけいた変異種を釣り出してきたというのに。

たとえそれが善性から来るものでも、感情的に行動してしまうということは、独善的であるということだ。正直に言つて、チームワークで仕事をしている俺たち偵察班には、まったく向いてない、むしろ足を引つ張りかねない害悪だと思う。

だが、それでも戦力として使わなければならぬ。我々ゴッドイーターは致命的な人手不足の中にあるし、これはシツクザール支部長の命令でもある。

(まったくヨハンにも困ったものだ)

私[・]がため息を吐いたところで何が変わるわけでもない。

それにもう、手遅れだ。

!!!!!!

およそ人間の耳には判別しきれない轟音の爆発に、俺は岩肌エリックに、後輩も瓦礫の山へと叩きつけられ、身動きが取れない。

このわずかなタイムロスで、ただ転んでから立ち上がるまでの時間で、追いつかれてしまった。

変異種コンゴウ——まだデータが揃っていない、未知のアラガミだ。コンゴウ種の外見で、白と寒色系の体色をしているため、便宜上「白コウゴウ」とか「雪原コンゴウ」と呼んでいる。その特徴は、冷氣弾による砲撃。あれを食らって一気に運動能力を奪われ、命を落とした同僚ゴッドイーターは既に十名を超える。

そしてその後ろに、もう一体。こちらは通常のコンゴウ。先程の轟音は、こいつの咆哮だろう。

つまりあれだ。

最初から失敗していたのだ。

俺は偵察班だからどうかやっつけていける程度の、適応率40台グリーンの旧型ゴッドイーターだ。そんな俺に、中級アラガミを二体同時に相手どって、単独で戦える力なんて無い。だからこそ自分を囮にしてまで、どうか一対一の状況を作ろうとした。作りたかつ

た。

発見は偶然だった。

だから撤退しても良かったのだが、放っておけばエリックが一人で突貫しかねなかった。だから作戦だと言って、どうにか有利な状況を作るために、この囷作戦を実施したのだ。

だが、もう無理だ。

あの咆哮は、おそらく仲間を呼び寄せるものだ。コンゴウは中型アラガミの中でも出現報告が最も多く、そのため研究もされていた。咆哮の周波数を検知した腕時計型端末が、増援警戒の警報アラートを表示する。

万事休す、だ。

俺は神機を握る手から、汗が滲むのを感じていた。

* * *

(ああ、状況が分かかってきた)

(私は今、誰か他人の中ゴッドイーターにいるのか)

(理由は分からないが原因は分かる。あの望遠鏡だ)

(あれで自走台車オートワゴンで運ばれてきた神機を見て、こうなった)

(これが彼の言う「ゲームのような」ということなのか)

(分からない。だが、これがゴッドイーターか。ふむ)

私——ペイラー・榎さかきの意識は、どうしてかカトール・鳩場というゴッドイーターの身体を通して外の世界を認識していた。

(平坦な地形と外周を囲む壁のような崖から、場所はおそらく嘆きの平原)

(敵はコンゴウ型が二体。うち一体は変異種)

(任務内容は巡回。これは不意遭遇戦か)

(僚機は新人のエリック・デアIIフォーゲルヴァイデ。咆哮と同時に砲撃を受けて……あれは一時的な行動不能といったところかな?)

(そして敵は二体ともこちらへ急行中。やや距離を広めにとっているのは挟撃狙いなのか?)

(いや。牽制か、警戒か、最低一体はエリックを視野に収めるようなフォーメーションをとっている。これは偶然か?)

(その効果を理解して行っているとするれば、学習したということだろうか)

(どのようにして学習したのか。興味は尽きないが、やはり彼らの知能は侮り難い)

(ふむ……無理だね、この状況。立て直せる時間はない)

どこまでも冷静に、そして無慈悲に状況を俯瞰する。

私の性分はどうやらこの異常事態にも変わることはないようだった。

(ところで私が、いやカトール・鳩場がここで死んだら、私はどうなるんだろうか?)

(そのまま消えてしまうのは嫌だな。折角こんな体験を知ったのに)

(もっと見てみたいものだ。こんな経験は他にありえない)

(だから誰か助けてはくれないだろうか)

そんなことを考えている間に、既にコンゴウは私の目前にあって、その丸太のような太い腕で私を、いや、カトール・鳩場を押しつぶさんとして――

* * *

【サマリカーム】^{完全蘇生}

嗚呼、作り変えられる。

脆弱だった俺の身体が、強靱なものへと、戦い喰らうためのものへと変わってゆく。骨が、胃が、筋肉が、内臓が、腱が、血管が、血液が、皮膚が、舌が、歯が、鼻が、耳が。コンゴウの腕に押しつぶされその手指で引きちぎられ、牙と歯で咀嚼され唾液にまみれ貪られた俺の身体が。あのゴリラ野郎のオラクル細胞に取り込まれて溶け込み、失われたはずの細胞の一つ一つが蘇り、塗り替えられていくのが分かる。

そうして最後に復元された眼球が捉えた光は、紺のフードを目深にかぶった一人の少年の姿だった。

#044 選別される魂

つい先程まであの狂的^{マッ}科学者^ドとアナグラの廊下で立ち話をしていたはずが、気がつけば荒野に立っていた。

いや、違う。

この感覚。またアレだ。

しかし今回は、あの痩せ犬は姿を見せなかった。

これはあいつの仕業ではないのか。

わけが分からない。

……今はそんなことはどうでも良い。

遠くで何者かの咆哮が聞こえた。

知らず身体が動く。闘争の気配に心が踊る。

右手に持ったノコギリのような刃を持った無骨な神機を握りしめ、その気配へと駆け出した。

だが残念なことに、戦いは既に終わったあとだった。

そこに有つたのは二つの肉塊と、それに群がる数多の巨猿^{コンゴウ}。あれは、前に自分を水たまりに突き落としたのと同じ種族^{ヤツ}だ。よく似た景色に、いつかの記憶が蘇る。

戦いに加われなかつた憂さ晴らしか、あるいは過去の報復か。

一足で飛びかかると、その無骨な神機で次から次へとコンゴウたちを蹴散らしてゆく。

土と砂埃、瓦礫とわずかな水たまり。

そこに荒れ狂うのは、速度と重さで切れ味を補う、残酷な暴風。

この体は使いやすい。

きつと元から自分^{アクマ}と親和性が高いのだろう。

アラガミと神機がコンゴウの皮膚を突き破る都度、オラクル細胞同士の反発で生まれる、赤や緑の光が閃いては消える。それを何度も何度も繰り返し、群れたコンゴウの殆どを潰し尽くして、ようやく一息ついた。

大きく息を吐いて目をやれば、戦いの最中に猿どもが群がっていた肉塊まで、踏み荒らしてしまっていた。

おそらく人間だったであろうことは、残骸のいくつかを見れば想像はつく。それに近くに転がる二台の神機。

彼らはゴツドイーターだったのだろう。

なんとなくバツが悪くなってしまった。

この虐殺劇は、自分の気晴らしに過ぎないのだ。

それに巻き込んでしまった詫び代わりに、彼らに手を差し伸べることにする。

あのペイラー・榊ペイラーは、彼らが悪魔に近いものになっていると言っていた。

ならばこれは有効なはず。

【サ完マリカ全ーム蘇生】

飛散した血肉が、動画を逆再生するように戻ってくるのは、それらがより多くのマガツヒを蓄えているためだ。雲散霧消し大地に沈むように消えたはずのコンゴウのものも奪い取る。それでも足りなければ、更に他所から持つてくるしか無い。

そうして周囲のマガツヒを必要量だけ集めれば、その空間の記憶が、そこに在ったものの概念を模倣し形にする。

かくあれと混沌王が思ったならば、そうなるのが正しいのだ。
青褪めた肌の大悪魔が、そんなことを嘯いていたなと思ひ出した。

かくして甦ったゴッドイーターの瞳には、紺色のパーカーをまとった褐色の肌に白い髪をもった少年の姿が写っていた。

* * *

「……という光景を見たのだがね。ソーマ君、覚えはないかい？」

「なに言ってるんだテメエ？」

あわや未帰還^{MIA}となるところだったカトール・鳩場^{はとば}、エリック・デア^{デア}フオーゲルヴァイデの偵察班二名が、特殊任務からの帰還中だったソーマ・シックザールに救助され、生還したのは、シンとサカキ博士が廊下で立ち話をしていた最中だった。

偶然通りかかったカトールとエリック、それにソーマを呼び止めると、サカキは彼らの神機にその手にした円筒——万里の遠眼鏡——を向けて覗き込んだ。

「いやあ、ちようどいいところだ」

とか

「保管庫に行く手間が省けた」

とか言いながら。

で、唐突に「鳩場君。きみ、一度死ななかつた？」とか言い出したのだ。

「いやあ、なんというべきかなあ。どう説明したものだろう。ねえ間糺君？」

「俺に聞くな。過去視の魔法を使う悪魔か何かの仕業だろう」

「アクマだあ？」

「ああ、それはだね——」

狂的^{サカキ博士}科学者に話を振られても、シンは答えようがない。あの現象^{ビジョンクエスト}が何によってもたらされたものなのか、それすらもよく分かつてはいないのだ。

もつとも、彼がその現象に見舞われた状況を調べれば、それが「使用者を失った神機」を万里の遠眼鏡で覗いたときにしか起こっていないことが分かったはずなのだ。シンは殊更その体験について口外しないため、誰もそのサンプルを取れてはいなかった。シンとアナグラの面々とのコミュニケーション不全が招いた結果であった。

誰もその事実気づかないまま、シンの口にした「悪魔」という言葉に反応したソー

マト、嬉々として解説トクシヨウを始めたサカキ博士により、この場で真相に気付く機会を失ってしまった。

アナグラの外では、閉ざされた世界の太陽カツツチが、ひとときわ強く輝いていた。

* * *

「人口が減っている？」

フエンリル極東支部支部長、ヨハネス・フォン・シツクザールの居室に届いた報告書は、この極東支部アナグラを含む都市ネストの巡回班からのものだった。彼らは食料配給のため、都市内を軽装甲車で走り回り、そのついでに住民から上がってくる種々の情報を定時報告していた。

その報告で、都市の人口が明らかに減少していることに言及された。

周縁集落サテライトの人口が減少したという報告も、当の周縁集落そのものが自然消滅したことで届かなくなって久しかった。そして都市の人口は、ゆるやかな微減を続けていたはずだ。それが何故ここに来て明確な減少となったのか。

「ただし姿を消したのは、元より無気力な単純消費者だった者たちとのこと。要は穀潰し^{ごくつぶ}」と言われていた連中が、どこへかは分からねど姿を消しただけ、と考えることもできる。

この段階で「要調査」と返答しつつも、シツクザールはそのことについて、まだそれほど重要視してはいなかった。

あるいは「無駄飯食いが消えたのなら都市の運営上、良いことじゃないか」くらいに考えていたかもしれない。

だがそれから、ネストの人々は次から次へと姿を消していった。

それに合わせておかしな報告が混じるようになっていく。

曰く

「陽炎^{かげろう}のような人影を見た」

「向こう側の透けた人間がいた」

「胸から上しかない青白い人間が浮かんでいた」

ゴースト^{ゴースト} フラットム^{フラットム} 幽霊、亡者という概念が失われかけたこの時代において、それらの怪奇現象を理解でき

る人間はほとんど残っていない。ただ「不気味なもの」として認識され、さほど時を置かずして、巡回班はそうしたものが見える場所を敬遠するようになった。

そんな中でもサカキ博士はシンが持ち込んだ宝重の数々について、リツカはシンをはじめとする新型ゴッドイーターの専用神機について研究に勤しみ、それぞれ一定の成果を出すに至る。

原因のわからない人口減少が急に止まるまでに約一ヶ月。たつたそれだけの期間に、ネストの人口は最盛期の七割程度まで減少してしまった。

* * *

——悪魔おまえにコトワリは啓けぬ

——わずかな人を救えるか人修羅

——この世もまた道連れか人修羅

——大地は既に死んでしまった

——次に人が死ぬだろう

——それまでにコトワリは拓かれねば終わりだ人修羅

——終わるのだ人修羅

0 4 5 二人目

「まったく予想だにできなかった体験だったとも！」

宝重〔万里の遠眼鏡〕により偶発的にあの不思議体験をしてしまった。ビジョンクエストペイラー・榊は、マッドサイエンティスト丸一日、興奮したままだった。

「ゴッドイーターの戦いというものを、これ以上無いほど間近で見ることができた。偵察班の仕事ぶりも、求められる力も、アラガミを前にして一步を踏み出す勇氣も。これまでの私は知らなかったことだ」

そこ声音はどこまでも前向きで、楽しげだ。

反省にも聞こえる言葉にすら、後悔の色など微塵もない。

知らなかったことを知った。

知る機会のなかったことに触れることができた。

それが何より嬉しいのだと、彼の認識する価値あるものはそれだけだという喜色が、

今や彼の内側のすべてを満たしている。

「しかし、あの時のソーマくんは君だろうか？」

「何故そう思った」

「ソーマくんにあんな力は無い。あればシックザールが黙つてはいない」

「なるほどな」

サカキ博士の体験ビジョンクエストの中に、何故かシンも飲み込まれていた。

その理由は、シンにも分からない。

強い思い当たる可能性を考えるのなら、あの荒野に満ちた犬どもの仕業かもしれない。
い。

「それから、犬のようなものに遭遇したんだが」

「ああ、あいつらか」

『力あるものが現れた』そうだよ。『彼とともに歩むか、彼と道を分かつか。人は選ばなければならぬ』だと

「……………」

「あれはどういうことなのかね？」

「……さア、な」

韜晦するシンを、サカキは黙ってじっと見つめていた。

その視線に耐えきれなくなったわけでもなからうが、シンの次の言葉はどこか言い訳じみた空気を帯びていた。

「俺もまだあの変な体験は、数えるほどしかしていないからな」

「あれはあれで見た神機の持ち主の、ゴッドイーターの『死の記憶』^{メモリー}なのだろう？」

「……多分だが、少し、違う」

「違うのかい？」

「【万里の遠眼鏡】は記録^{レコード}を視るものだ。ここに来て変わったのでなければ、あれはおそらく『ゴッドイーターの死の記録』だろう」

「レコード——つまりあれは、客観的な事実だと」

「多分だが」

「つまりあれは本当は死の記憶の追体験ではなく」

「やり直し^{リテイク}、なんだろう」

「なるほど……」

サカキは思考をそのまま矢継ぎ早に口から吐き出していく。

もしもシンが律儀に一つずつ回答していなければ、そのままずっと思考の海に沈んでいつてしまいそうな勢いだ。

「そういえば、君が成り代わっていたということは、ソーマ君も死んでいたのかい？」

「そういう感じではなかったな」

「君は、あの中で死んだことはあるのかい？」

「いや」

「それはそうか。そもそも君は、アクマというのは死ぬものなのかね？」

所在なさげに彷徨させた視線で、否、もはや何も見ていない——おそらく思考の彼方に焦点を合わせているのだろう——瞳で、黒い科学者が素朴な疑問を口にする。

「（ここでも同じかは知らないが）」と前置きをして、シンはそれを自然科学の常識であるかのように言葉にした。

「悪魔は概念存在だ。世界から全ての記録が失われない限り、いつか再生される。ただし肉体や精神にダメージを受けて、概念の原型から大きく乖離すると、肉体を維持できなくなる。そうなると自然回復には数十年から数百年の単位でかかるらしい」

「そういう君は、死んだことはあるのかい？」

「無い」

当然だ。

ボルテクス界で戦いの日々を潜り抜けた混沌王は、もはや生物の軀くわいから解き放たれた最強の存在なのだから。

だが。

「……いや。あったか」

「君が、死んだのか？」

「ヒトシユラ今の自分になる時に」

「なるほど」

かつての東京が死んだ日。

——一人の少年が死に、

——一匹の悪魔が生まれた。

「それが、人間だった君」というわけか。そしてそれが死に、今の君、ヒトシユラ悪魔人間に生まれ変わったと」

「マガタマ寄生虫を飲まされて、な」

「君は作り変えられたことを覚えているのか」

「ああ」

サカキが何かに気がついたように、なにもない虚空へと視線を逸らす。

特に視線の先に何があるわけでもないことを知るシンは、その様子も気にかげず、サカキの反応を待っていた。

自分の手のひらをジツと見つめ、またシンを凝視し、ふらふらと視線を彷徨わせながら思考をまとめたサカキが次に口を開いたとき、そこにひとつの確信があった。

「そして今またここに、一度死に、蘇ったものがある。彼もまた、自分が作り変えられる実感を伴っていた。かつての君と同じように。これは偶然かな？」

「俺には分からない」

「ふむ。では質問を変えよう。君がこれまでここで視てきた死の記録。その当事者の名前を教えてくださいませんか」

「覚えている範囲でなら……」

そうしてシンの口から語られたのは、ゴッドイーターの歴史の中でも飛び抜けた才能を持った英雄たち。

先進文明としての機構が瓦解し、情報の伝達一つとっても正確さと現実味が失われてしまったこの時代においては、既に伝説化した「英霊」たちの名前であった。

「みな、そう大した戦士たちでは無かったが」

「それは君にとってはそうだろう。だがフェンリル（ほく）にとつて、アラガミとの生存競争の中で、ターニングポイントとなったゴッドイーターたちだよ、それは」

「――」

「いや……逆、なのか。君があれを体験した、死の記録をやり直したことで歴史が変わったんだな。君が言うところの大したことのないゴッドイーターが死に、その歴史が神機に記録され、君の宿った英雄的戦闘へと改変された。そして死んだゴッドイーターは、

生まれ変わつて英霊となった。となると今現在、フエンリルに記録された事実も、私が知るこれも、既に「変わった後の歴史」ということか」

過去を改竄するなどまさしく神の所業であろう。

時を遡ることすらできない只人タタヒトごときに抗う術などない。

「だが、死んだものが生き返り、歴史が変わってしまったうなら、生きていたものが死んでしまふこともあるのではないだろうか。あるいは生まれてくるはずだった者が生まれなかつたことにすら——」

サカキの瞳が剣呑な光を帯びて、シンの眼を静かに見つめる。

「そして君がああの体験、死の記録に触れれば、死の事実は無かつたことになってしまう」
「らしいな」

「君がいれば死者はいなくなるのかな？」

「それは無いな」

「どうしてだい？」

「あれはレッドマン。ネイティブ・アメリカンの戦士たちの魂だ。彼らが受け継ぐものは戦士の魂で、それにしか対応できない。戦士でないものの死の記憶を見ることはできない」

そう、あれはレッドマン。

ネイティブ・アメリカンの戦士たちの魂だ。

戦士を、祖先を、魂を、すなわち生き様を重んじる彼らは、時に生死の境を超えて想いを伝えるという。

それが何故、地縁も薄いはずの極東の地に姿を現したのかまでは分からないが。

「つまり」

「あの体験で復活させられるのは、戦士だけ。おそらくゴッドイーターだけだ」

「……検証するべきだ。そうだろうか？」

「必要か？」

「使えるものは何でも使うさ。そうしなければ人類われわれに生存の可能性が無いことも、そうすることでまだ人類われわれが生き残れる可能性があることも、私は知ってしまったからね」

理知と狂気が手を取り合うとき、条理を覆して時代を進めることがある。

狂える天才科学者の瞳に、劇的な回心ヌミルを得た人間が見せるそれに、今がまさにその時なのだ。シンは理解した。

おそらく彼は【守護神】を得ることだろう。

そしてここに、新たなコトワリの萌芽が生まれる。

* * *

シンには簡略に伝えたが、サカキの頭脳は夢うつつに見たその言葉をはつきりと覚えていた。

——力あるものが現れた

——人に似て人に非ざるもの

——悪魔に似て悪魔に非ざるもの

——金星の影

——孤高の王

——太陽を奪ったもの

——大地の法を破ったもの

——彼はかつて人の世界を人ならざるものに売り渡した

——彼がふたたび人の世界に現れた

——渴望するもの

——頂点に輝く星よ

——お前は選ばなければならぬ

——王の翼を得て安寧の地へと至るか

——二本の足で自ら王となる道を目指すか

(あれはどういうことなのかね?)

#046 新型

シンの予想に反し、サカキはしばらく動きを見せなかった。

彼が持ち込んだ場違いな小道具から採取できたデータについて語ったときだけは、以前のようなハイテンションを見せたものの、普段はシンに対して何のモーションも起こすことは無かった。

新型神機開発の際も、ただ粛々とデータを取って一人ブツクサ呟きながら何かを模索するばかりで、シンは正直なところ、少し拍子抜けに感じていた。

ただ、その沈黙ぶりには仇敵・氷川総司令を思い出させられ、嫌な予感を拭うこともできなかつたのだが。

その間もシンは第一部隊の随員として、神機も持たず現場に同行していた。

シンの持ち込んだ品々とシン自身の能力、そして新型偏食因子に関する報告を受けたシツクザールは、実戦データを取るべくシンの第一部隊所属を正式に決定。そして彼に第一部隊の作戦行動中に限定された、都市圏外での自由行動権を与えたためだ。

第一部隊の隊長である雨宮ツバキは決して彼を戦闘に参加させようとはしなかつた

し、シンも積極的に戦線参加を希望することはなかった。

ただし戦闘中、ゴッドイーターが重症を負い行動不能に陥る都度、駆けつけてはアラガミの攻撃を弾き、負傷者に応急処置^{デイク}を施す突撃衛生兵の真似事をする^エことを、敢えて禁止することもなかった。

結果として、第一部隊の作戦遂行能力は目に見えて向上した。

なにしろヴァジュラやボルグ・カムランといった大型種を相手にしても、常に自分の足で帰還するのは彼らだけなのだ。他の部隊であれば、出動したゴッドイーターの約半数は荷物扱いで装甲車に積まれ、ストレッチャーに乗せられアナグラに搬送される。それも場合によっては他部隊の救援を受けて、だ。

第二部隊以下ほぼすべての実働部隊がシンの転属を希望し、シツクザールに毎日届けられる陳情書が「定期便」と呼ばれるようになったのも仕方がないことだろう。

更には新型偏食因子の移植を希望するゴッドイーターまで現れるようになった。

シンという個人を取り合いになれば、たとえばアナグラの防衛を主要任務とする防衛班などは不利になる。

防衛班はひっきりなしに出動しているものの、その大半は安全確認のための都市内パトロールであって、攻撃班のように負傷する危険は少ない。

無論、シンを防衛班へ転属させてほしい旨の陳情書は出しているものの、その希望が

通ることはまず無いだろう。だから次善の手段としてシンと同等の能力を持つゴッド・イーターを隊内に抱える手段を講じたわけだ。

「もはや手段を選んでいられる状況ではない、か……」

主導したのはシックザールだった。

アナグラの所長として、人類防衛の最前線にある者として、彼は戦力の更なる強化の一手を打った。

科学者としての慎重さと、指揮官としての果断さを持つて行われたのは、まず都市に暮らす一般市民への新型偏食因子パッチテスト。

旧型には不適合だった人間でも、もしかしたら新型には適合するかもしれないという希望。そして既にゴッドイーターとなった者が、新型の移植によつて使い物にならなくなつては困るという現実的な事情。

だがこれは、あまりうまくはいかなかつた。

新型とされる偏食因子も、元は旧型の変異したものだ。アナグラ地上部のネストで行つた検査でどうか合格判定が出たのは、わずかに三名。それも旧型のパッチテストで適合率が規定以下ギリギリだった者ばかりだ。彼らは家族の生活保障と引き換えに、

ゴツドイーターになることを承知した。

適合者三名という成果は、数字としては大きなものではない。だが今後を考えれば、決して悪いものでもなかった。それは逆説的に、既にゴツドイーターとなつた者たちならば、適合する可能性が高いということでもあるのだから。

* * *

「この四名に君の代役が務まるよう、訓練してほしい」

フエンリル極東支部——通称アナグラ——支部長室。

正面の壁には大きな世界地図。書類仕事で紙で行われていた頃の名残である、巨大なデスク。観葉植物に、間接照明。サイドデスクには様々な文物、あるいは芸術品と言える陶磁器など。華美というほどでもなく、さりとして物寂しい風情でもない。この荒れ果てた世界において文明の香りを残した、数少ない空間の一つであろう。

作戦からの帰還後、その部屋へと呼び出したシンに、支部長ヨハネス・フォン・シツクザールはそう切り出した。

手渡された書類にあるのは、四名の新米ゴツドイーターの個人情報^{プロフィール}。うち一名は、時

折話に上がっていたエリック・デア・フオーゲルヴァイデ。暴走した研究員に騙されるように新型偏食因子を移植された少年であった。

「代わり……?」

人修羅の代役が務まるようにとは、とんでもない注文である。その希望を十全に満たすには、ボルテクス界の地獄を徹頭徹尾、体験させるしかあるまい。

とはいえ、彼はシンの身体能力については分かっているわけもなく、今更あれこれ説明するつもりもなかった。

ただ、確認は必要だった。

求めている内容や程度によって、その難易度は大きく変わる。単騎で大型アラガミを瞬殺する戦闘力を求められれば、地獄の特訓をしてなお成功率は限りなく少ないが、たまに試作中の神機のテスターを務めるくらいならば、一日二日で終わることだ。

さて、とシンが身構えたところで、シツクザールは小さく苦笑いを浮かべて首を振った。

「もちろん君の戦闘力を求めてのことじゃない。第一部隊でやっている、君の立ち回りだ——ああ、君が戦闘に直接参加していないことは承知している。ツバキ君からの報告では、確か……突撃衛生兵^{アサルトメディック}、だったか」

「回復魔法を教えるだけなら、おそらく可能だ。だがアラガミ相手の立ち回りは、他の^{ベテラン}熟練者に任せた方が確実だろう。彼らの肉^{からだ}体の出来は、他のゴッドイーターと変わらな^{いはずだ}」

「分かった。ならひとまずは負傷回復だけでいい」
「それなら」

シンが承諾したことで、シックザールのゴッドイーター強化計画が始動する。
それがこの滅びかけた世界にどのような意味を持つのか。
その行く末は、はたして……

#047 諦めが肝心

「で、どうよ。新人の具合は」

「とりあえず【小回ディア】は使えるようになった」

タバコを啜えたまま器用に尋ねるのは、フェンリル極東支部のゴッドイーター第一部隊で、次期リーダーと目されている青年・雨宮リンドウ。あまみや

それに愛想のない声で答えるのは、同じくフェンリル極東支部のゴッドイーターの間難シン。かんなき彼はリンドウと同じく第一部隊所属だったが、現在は一時離れ、新人四名を相手に技術指導の真似事をしていた。

今日は訓練を休みにした。というか、させられた。

シンの教え方はおそらく合理的なのだろうとは思えるものの、それ以上に情け容赦の欠片もないものだったためだ。折角の新人たちが壊されては堪らないと、訓練を依頼したシツクザールと、戦闘訓練を担当する百田ゲンももたの方からストツプをかけてきた。

とはいえ、それも無理のない話。

何しろ彼の人生観は万事「生き残るために命を賭ける。できなければ死ぬ」というも

のなのだ。いくらアラガミが跋扈し人類文明が死にかけた西暦2068年とはいえ、ボルトクス界基準のそれを受け入れられる修羅など、そうそういるものではない。

初日。

まずシン自身が自身に傷を付け、それを「ディア」で回復させて見せることで「魔法が実在すること」を理解させた。そしてその方法として神機コア^{マガタマ}を意識的に励起する手順を説明する。

とはいえこれは、新人ゴッドイーターにはそう簡単なことではなかった。なにしろ「神機コアの励起」とは、すなわち適合試験の再演である。

その激痛を思い出し、新人たちの腰が引けてしまうのも仕方ないこと。

自主的に励起実験を行ったのは、癒やされる傷口を凝視し、何故か酷く興奮したエリックただ一人であった。

彼は何度となく苦痛によって断絶する励起実験を繰り返す。

痙攣する肉体を無理やり押さえつけながら、うわ言のように「兄さんが」「エリナ」などと呟き、やがて耐えきれなくなって気絶する。

しかし戦士たるゴッドイーターの肉体はそれを許さない。

彼はごく短時間で目を覚ますと、再び神機コアの励起を行おうと、神機を掴む。

その様子に、却って恐れを強くしてしまふ新人三名。だがシンは容赦しない。

「生き残るために命を賭ける。できなければ死ぬ」とは決して単なる標語ではないのだ。

すなわち彼は、その激痛に慣れさせるため、まず強制的に励起させることにした。

何気なくシンに触れられた新人の一人が、最初にそれを体験した。

悶絶し、数秒で気絶した新人をそのままに、二人目へと手をのばすシン。

そして始まる鬼ごっこ。

追いかけてくるのは本物の鬼。必死に逃げ惑う三人を、容赦なく追い立て、気絶させる。

三名全員が気絶したところで、シンは「メデイアラハン」集団完全回復で全員を回復させた。

ふたたび始まる鬼ごっこ。

ふたたび気絶する新人三名。

うち一名が過呼吸となり、死の淵を落ちてゆく。

容赦なく行使される「サマリカーム」完全蘇生。

みたび始まる鬼ごっこ。

……以下同文……

結局、新人たちが諦めの境地に至り、自ら励起し、その苦痛に耐えられるようになるまで、丸二日を要した。

とんで三日目。

励起の苦痛に慣れたところで、魔法の使い方を改めて説明する。

とはいえさほど難しいことはない。神機コアを励起した状態で、ただ対象の傷を「癒せ」と考えるだけでよい。悪魔マカクマの魔法とは、世界の法則に優越する権能である。たとえば「ディア」の魔法なら、本来あるべき負傷を癒やし、そのものの体力を回復させる権利と能力なのだ。そうあるべし、と権利者が決定したなら、その能力は正しく効果を発揮する。

かくして新人ゴッドイーター四名は、とりあえず「ディア」を行使できるようになった。

「おお。そりゃ助かるな」

だが。

「いや、駄目だ。まだ励起に時間もかかるし、連発も補充も出来ない」

シンが習得させる技術は、負傷回復の魔法のみ。

そのため当初は負傷をたちまちに癒やす【ディア】を教えるだけで終わりかと思つていたのだが、そうは問屋が卸さなかつた。

新人たちの貯蓄するマガツヒが足りないのだ。

訓練で分かつたことは、二回から三回【ディア】を発動した段階で、彼らのマガツヒはほぼ尽きてしまうということ。

これは盲点だったと、今更ながらにシンは考え込むことになる。

【ディア】が魔法であるからには、その身に蓄えたマガツヒを消費しなければならぬ。だが混沌王たるシンにとつて、マガツヒはその身の底から無尽蔵に湧き出すもの。もちろん高位の魔法を連発すれば、多少の休憩は必要になるが、それでもマガツヒが不足する、などといった状態は遠い昔のこととなつていた。

故にシンは、新人たちのマガツヒを急速回復させる手段を考えなければならなかつた。

「なるほどなあ。それで、お前さんはどうやって克服したんだ？」

「ひたすら悪魔を狩り続けて、力をつけた」

「あー……他には？」

「他に。他に……」

周囲に散ったマガツヒを集めて薬とする宝重・チャクラ金剛丹は、他の宝重と同じく、何故だか取り出すことが出来ない。

あ、いや。そういえば。

「チャクラドロップ」

「なんだそれは」

「マガツヒを回復する飴だ。そういえばあつたな、そんなもの」

「おいおい……」

自分で使うことが無くなっていったため、すっかり忘れていたのだつた。
と、思い出したは良いものの、

「しまった」

現物は先日、サカキ博士もじやもじや頭と楠リツカスバナ少女に研究資料として渡してしまったのだった。

「返してもらえば良いんじゃないか？」

「それはそうだが。四人に使わせたらあつという間に無くなるだろう」

「それもそうか。だったら量産できるように、研究開発に回した方が良さな」

「だろう」

「となるとだ。あー……結局あれか。新人にアラガミ狩らせて力付けさせるしかないのか」

黙って頷くシンを横目に、啞え煙草のリンドウは頭を掻きむしって「面倒くせえなあ」とボヤいた。